



青年の公共空間における社会的迷惑と抑制要因の検討 ー他者との関係性と状況適合性に着目してー

谷, 芳恵

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2014-03-25

(Date of Publication)

2015-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6170号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006170>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

青年の公共空間における社会的迷惑と抑制要因の検討
——他者との関係性と状況適合性に着目して——

指導教員 齊藤誠一 准教授

神戸大学大学院 総合人間科学研究科
人間形成科学専攻 発達基礎論講座

学籍番号 048F402F

氏名 谷 芳恵

目次

第1部 問題

第1章 本論文の問題意識と先行研究の概観	1
第2章 本論文の目的と全体構成	11

第2部 認知者の立場からみた社会的迷惑

第3章 認知者の立場からみた社会的迷惑の抑制に関する理論的検討	16
第4章 認知者と遂行者の視点のちがいによる迷惑認知の差(研究1)	21
第5章 他者の迷惑認知と共感性による社会的迷惑の抑制効果(研究2)	28
第6章 他者の迷惑認知と自己のネガティブ評価による社会的迷惑の抑制効果(研究3)	34
第7章 第2部の総合的考察	43

第3部 遂行者の立場からみた社会的迷惑

第8章 遂行者の立場からみた社会的迷惑の抑制に関する理論的検討	45
第9章 罪悪感の喚起に関連する要因の検討(研究4)	49
第10章 罪悪感、恥意識による社会的迷惑の抑制効果(研究5)	56
第11章 第3部の総合的考察	63

第4部 個状況における公私認識と社会的迷惑

第12章 公私認識と他者に対する無配慮的態度に関する理論的検討	65
第13章 青年の公共空間に対する公私認識とその関連要因(研究6)	70
第14章 社会的迷惑の抑制要因と公私認識の調整効果の検討(研究7)	78
第15章 第4部の総合的考察	85

第5部 総括

第16章 状況の差異に着目した社会的迷惑の様相と抑制	87
第17章 総括	95

引用文献・・ 98

謝辞

付録

第1部 問題

第1章 本論文の問題意識と先行研究の概観

第1節 公共空間における迷惑行動の問題と現状

電車やバスの中、街角、広場などの公共空間で過ごす時間は、人々が社会生活を送る多くを占めている。公共空間における行動の一つに、迷惑行動がある。迷惑行動とは、一般に公共マナーへの違反行動を指し、ゴミのポイ捨てや映画館・公共交通機関での携帯電話の使用といったものがある。迷惑行動は、触法行動に比べて軽微な問題とみなされがちであるが、日常的に遭遇する機会が多く、テレビや新聞などのメディアにおいてとりあげられるなど、近年関心が高まりつつある話題であるといえる。しかし、これらの問題は一向に解消される気配はなく、もはや当たり前の行動になりつつある。このような迷惑行動を抑制することは、無用な軋轢をなくし、快適な社会生活を送る上で重要な課題であるといえる。本論文では、特に電車利用場面で起こる迷惑行動に注目するⁱ。

電車利用場面における迷惑行動については、運輸政策研究機構による「公共交通における緊急事態への対応に関する調査」(2003)では、「利用する際に不安や不満を感じる」としてマナーの欠如や社会的迷惑を挙げる回答が多くみられるなど、2000年頃からどう対処すべきか公共交通機関等においても盛んに検討されている。日本民営鉄道協会が2000年から継続して行っている「駅と電車内の社会的迷惑ランキング」では、2009年度から2011年度の3年連続で「騒々しい会話・はしゃぎまわり等」が1位になり、その他「座席の座り方」「携帯電話の着信音や通話」「ヘッドホンからの音漏れ」などが上位にランキングされている。また2005、2006年度の同アンケートでは、鉄道事業を取り巻く社会環境の中で最も重要だと思うテーマとして「駅や電車内でのマナー向上」が最も多く挙げられている(2005年度は37.3%、2006年度は39.7%)。特に、例年迷惑行動の上位にランキングされるPHS、携帯電話はこの頃が普及期にあたり、急激に利用者が増加した1995年から、電車内での利用の是非について盛んに議論されるようになった(森・石田,2001)。また、新聞などのメディアによる乗車マナーに関する報道も、1995年から多くみられるようになっている(森・石田,2001; 高田・矢守,1998)。

このような結果を受け、鉄道各社は駅構内や電車内のポスターによる呼びかけなど、様々なマナーアップキャンペーンを展開している。最近では、国土交通省が主体となり、首都

圏，近畿圏，中部圏を中心とする鉄道事業者と連携した「『ひと声マナー』はじめよう。」キャンペーンが実施された(2011年12月～2012年1月)。これらのキャンペーンを通じて，周囲の人々の迷惑になるような行動への気づきを促し，迷惑行動を抑制しようという試みである。しかし，このような努力にも関わらず，マナーが「改善された」という回答はこの5年間では20~30%を推移しており，変わらないあるいは悪化したという回答が過半数を占めているのが現状である。以上のことから，電車利用場面での迷惑行動は依然大きな問題であるといえる。

第2節 迷惑行動に関する心理学的研究の動向

公共空間での人々の過ごし方や行動については，これまで主に建築学や環境心理学などで取り上げられてきた。それらは着席行動や遮蔽物による私的空間の確保など，パーソナル・スペースに関するものが主流であった。また公共空間での迷惑行動は，問題行動の一部として，規範意識や道徳性の観点から取り上げられてきた。公共マナーに関する行動が心理学的研究の一つの領域としても注目されるようになってきたのは，1990年代半頃からである。

公共マナーや迷惑行為を扱う上で，第一の課題とされたのが，何を迷惑行動と捉えるのかという問題である。他者の迷惑になる行動という点，人を物理的に傷つけたり，他人の物を盗んだりといったような，他者に実害が及ぼされることと考えられることが多い。これに対して，社会的迷惑の多くは，他者に直接的な危害が生じるようなものではなく，慣習的あるいは個人的な問題に属するものであるといえる。そのため，社会的迷惑をめぐっては，何を迷惑とするかという基準の設定が困難であるという問題がある(稲永, 1999)。この問題に関して，先行研究では，社会的迷惑を他者に直接危害を及ぼす行動としてではなく，他者に不快感をもたらす行動として捉えることで対応しようとしてきた。斎藤(1999)は，「行為者が自己の欲求充足を第一に考えることによって，結果として他者に不快な感情を生起させること，またはその行動」を社会的迷惑(行為)と呼び，迷惑行動を認知者の立場から捉えようとした。これ以降，認知者の立場から社会的迷惑を検討しようとする心理学的研究が頻繁に行われるようになったⁱⁱ(e.g. 出口, 2004; 出口・吉田, 2005; 石田・吉田・藤田・廣岡・斎藤・森・安藤・北折・元吉, 2000; 松井, 2004; 斎藤, 1999; 菅原・永房・佐々木・藤沢・薊, 2006; 高木, 2005a, 2005b, 2006; 高木・村田, 2005; 戸田, 2006; 戸田・小林, 2007; 吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折, 1999; 吉田・元吉・北折, 2000)。

また、認知者の立場に焦点を当てることで、社会的迷惑が生じる背景にある問題が明確に捉えられるようになった。社会的迷惑が起こるとき、実際に行動をする人(遂行者)だけではなく、その行動をみて迷惑を感じる人(認知者)が必ず存在する。そして、誰もがその遂行者、認知者のどちらにもなりうるということが、社会的迷惑の特徴である。しかし石田他(2000)は、社会的迷惑の問題の根底には、遂行者の他者に対する関心の欠如だけではなく、自分が迷惑だと感じなければ他者にも迷惑ではないとする認知者の態度があると指摘している。また高木・村田(2005)は、規範的行動の注目理論の立場から、社会的迷惑は遂行者と認知者の注目する規範の食い違いに起因し、社会的迷惑を抑制するためには遂行者を認知者の視点に立たせることが必要であるとしている。社会的迷惑は、従来、主に遂行者の問題として捉えられてきた。しかし、以上の指摘は、社会的迷惑の問題を検討するためには、認知者と遂行者双方に焦点を当てることの必要性を示唆している。このことから、遂行者側だけでなく認知者側からみた社会的迷惑についても検討する必要があると考えられる(齋藤, 1999; 吉田他, 1999)。

なお、これまでに心理学的研究において扱われてきた社会的迷惑は、乗車マナーなど公衆道徳を守らないといった不特定多数の他者に影響を及ぼす一般的迷惑(e.g. 出口, 2004; 石川, 2005; 小池・吉田, 2011; 菅原・永房・佐々木・藤澤・薊, 2006; 高田・矢守, 1998; 戸田, 2004; 戸田・小林, 2007; 薄井, 2009)の他、受け手が限定されている状況で受け手が迷惑と認知しうる対人的迷惑(e.g. 小池, 2004, 2010; 小池・吉田, 2005, 2007)、特定の集団において集団活動や集団内の人間関係に影響を及ぼす集団内迷惑(e.g. 尾関・吉田, 2007, 2009; 卜部・佐々木, 1999; 出口・吉田, 2005)などに分類することができる。本論文で取り上げるのはこのうち一般的迷惑にあたり、主に知らない人との間で問題になる行動である(吉田他, 1999)。

第3節 青年の社会的迷惑と他者志向的な規範意識

社会的迷惑は、主に青年の問題行動として扱われることが多い。社会的迷惑が問題として注目されるようになった背景には、青年の規範意識の稀薄化があるとする指摘がみられる。飯田(2002)は、高校生を対象とした校則についての調査(樋田・耳塚・岩木・苅谷, 2000)から、「守って当たり前」だった校則がもはや「当たり前」ではなくなりつつあり、その意味さえ薄れつつある現状を指摘している。これは、校則に限らず、全てのルール、特に日常生活を送る上での慣習的なルールについても、青年にとって「ルールは守るもの」とい

う前提が成り立たなくなりつつある可能性をも示唆するものといえるだろう。

日本の青年の規範意識については多くの調査研究がなされているが、してはいけないとされるさまざまな行動について「本人の自由」と考える高校生の多さがうかがえる。例えば、「高校生の生活と意識に関する調査」(日本青少年研究所, 2004)によると、ずる休みでは 67.4%, 親への反抗では 55.1%, 先生への反抗では 51.4%, 授業中のメールのやりとりでは 49.7%, 出会い系サイトの利用では 45.3%の高校生が「本人の自由」と考えていることが示されている。また「高校生の学習意識と日常生活」(日本青少年研究所, 2005)では、麻薬の使用では 93.1%, 万引きでは 84.4%の高校生が「絶対にしてはならない」と考えているが、無断外泊(23.5%), 学校をさぼる(30.8%)飲酒(36.7%)など、触法行動に対しては「悪い」という意識をもっているが、マナー違反といった比較的軽微な問題行動について本人の自由であると考える割合が多く、「してはいけない」という意識が近年低下しつつあることが示されている。また、このような青年の社会的迷惑への対策として、特に小学生から高校生の青年を対象にしたマナーアップキャンペーンも多く展開されているⁱⁱⁱ。

しかし、これらの結果から一概に青年のモラルが崩壊したということとはできない。山岸(2002)は、青年期は規範の意義を根源的に問い直そうとする時期にあたり、発達の一過程として一時的に規範意識が稀薄化するとしている。これは権威に服従するものとしての規範を拒否し、自らの意思で判断・決定するという自律性を意味するものであり、青年たちにとって真に意義ある規範を見出そうとする動きとも捉えられる。また稲永(1999)は、公共におけるモラル、マナーはあくまで慣習的なものにすぎず、それを実体的なものとしたとしても規範としての存立根拠の問題をクリアすることはできないとして、社会的迷惑を規範意識の観点から捉えることの困難を示唆している。

その中で、他者志向的な規範意識は現代の青年においても重要な判断基準であり、日本の青年にとって他者に迷惑をかけるかかけないかが善悪の判断基準になっていることが指摘されている(谷, 2006; 友枝・木村, 2003)。社会的行動に他者が与える影響については、さまざまな分野で指摘されている。道徳性研究では、山岸(1976, 1990)は、日本人は道徳判断において、男女問わず対人関係への志向がみられ、個々の他者に具体的、現実的な配慮をし、その状況において他者に最善の結果をもたらす行動を考える者が広くみられるとしている。文化心理学では、日本人は相互依存的で調和と関係性を重視する傾向があり、その傾向がパーソナリティ特性や精神的健康、道徳観など様々な心理的プロセスに影響していることが多く指摘されてきた(木内, 1995, 1996; 北山, 1994; 北山・唐澤, 1995; Markus &

Kitayama, 1991; 高田, 1999; 高田・松本, 1995)。また Benedict (1946, 長谷川訳, 1972)は、他者からの否定的な評価を避けることが道德の基準となり、社会的な秩序を守っている社会を「恥の文化」、内なる神を道德基準とし、内面的な罪の自覚に基づいて社会的な秩序を守っている社会を「罪の文化」とよび、日本は恥の文化であるとした。その他、集団主義(e.g. Triandis, 1995, 神山・藤原訳, 2002), 間人主義(浜口, 1982), 日本的自己(高田・松本, 1995), 世間体(井上, 1977), 人並み感(元橋, 1993)など、日本人が他者との関係を重視する傾向については、さまざまな形で言及されている。

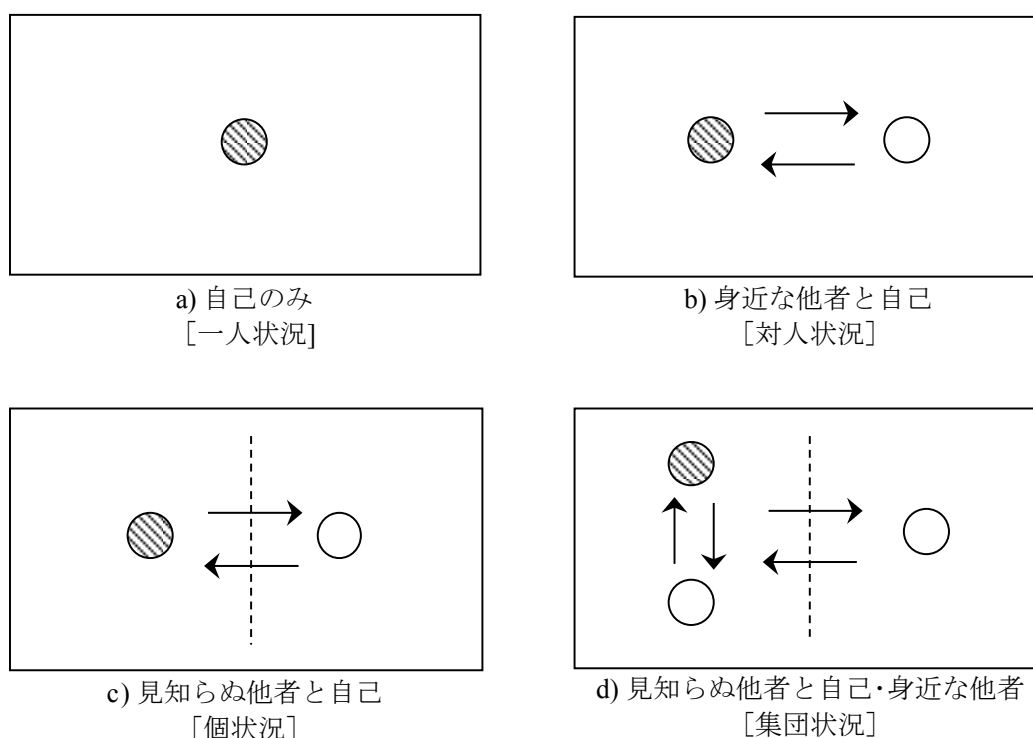
しかし同時に、他者に直接迷惑をかけないような行動に対する抵抗感が相対的に弱くなったり(友枝・木村, 2003), 売春など、重大な問題行動であっても他者への直接的な害が弱い行動では、してもしなくても本人の自由であると考える青年が多く見られるなど(谷, 2006), 他者に迷惑をかけないことが行動の正当化の論理としても使われたりするという問題が指摘されている(越智, 2000)。このことから、その他者志向的な規範意識が迷惑認知や恥意識、罪悪感といった社会的迷惑についての評価のずれを生じさせ、社会的迷惑を引き起こす一因になっていると考えられる。

第4節 電車利用場面における状況の分類

前節で述べたように、公共空間における行動制御には周囲の他者との関係性維持の動機づけが関連していると考えられる。井上(1977)は、周りの人々の多くが顔見知りであったかつての社会においては、社会規範の基本はおおむね「世間」に準拠して恥ずかしくない行動をすることであったと述べている。そのため、日本人は「世間の眼」からみられたときの自分という極めて状況的な倫理を内面化し、他者の存在は社会的迷惑を抑制してきたとされる。しかし、これは身近な他者に限ったことである。公共場面で遭遇する多くの見知らぬ他者は、その後深く関わることはなく、その場で起こる軋轢が後々の生活に何らかの影響を及ぼすことはない。そのため、生活領域全般での評価者にはなりにくく、社会的迷惑を抑制する眼として作用していないことが考えられる。このため、共存する他者との関係によって、関係維持の動機づけは異なると推測される。また、このような見知らぬ他者と身近な他者に対する意識の違いは、見知らぬ人がすると迷惑に感じるような行動であっても、友人や家族がしてもあまり迷惑に感じないという現象を引き起こすであろう。これとは逆に、友人や家族の前ではためらうような行動であっても、見知らぬ人ばかりの中ではしてしまうことがあると推測される。このように公共場面における他者との関係性

は、家族や友人、顔見知りといった特定の個人と相対する対人場面における関係性とは異なる性質をもつと考えられる。そこで本論文では、社会的迷惑が引き起こされる様相を捉えるため、公共空間において共在する他者との関係性に着目して、社会的迷惑が起こる諸状況についてみていく。

本論文における公共空間とは、二人以上の人々に共有される物理的空間全般を指す。公共空間では多様な人々が共在し、その個々人の価値観や関係性によって、その空間における行動のルールが規定されると考えられる。以下では、このような公共空間内での個人間の関係性といった社会的コンテキストを含む空間を状況と呼ぶことにする。本論文で取り上げる公共空間である電車利用場面は、共在する個人間の関係から、4 状況に分類することができる (Figure 1-1)。電車車両内に a) 自分一人しかいない [一人状況], b) 自分と身近な他者だけが居る [対人状況], c) 自分と見知らぬ他者だけが居る [個状況], d) 自分と身近な他者と見知らぬ他者が居る [集団状況] である。このうち、本論文で公共空間と呼ばれ



● 自己 ○ 他者 → 迷惑の方向

注) 破線 - - - - の内側に居る他者は身近な他者を、外側に居るものは見知らぬ他者を表す。

Figure 1-1 電車利用場面における状況の分類

るのは、b～dの3状況である。[一人状況]では迷惑の受け手である他者が存在せず、そのため社会的迷惑は生じ得ない状況であるといえる。この状況では、他者が存在する状況では抑制されていた行動であっても、抑制する必要は生じないし、実際にその行動をとり得るだろう。例えば、電車内で飲食することに抵抗がある人でも、早朝の誰もいない車両であれば飲食をすることについてのハードルは、多少の躊躇いはあったとしても、低くなるだろう。またbの[対人状況]では、社会的迷惑の受け手は身近な他者に限られる。この状況で起こる社会的迷惑は特定の他者に対するものであり、一般的迷惑ではなく対人的迷惑に分類されるものである。以下では、cの個状況とdの集団状況の2状況において引き起こされる社会的迷惑についてとりあげる。

また吉田らは、社会的迷惑の増加の原因として、共同体社会の崩壊と生活空間の拡大による相互監視システムの機能不全、情報化社会への移行による価値観の多様化と個人の価値判断の優先という風潮をあげている(吉田, 1998; 吉田他, 1999)。また岩田(2001)は、非常にバラエティに富んだ人々が集まる都市環境では、社会規範の力が相対的に弱いため、あまり社会規範を気にする必要がないと述べている。公共マナーなどの慣習的ルールは、普遍的なものではなく、時代により変化しうるものであるために、何を社会的迷惑とするかの評価に世代間でずれが生じている可能性があり、そのずれがマナーの悪さという評価を引き起こしているとも考えられる。つまり社会的迷惑は、公共場面のもつ、見知らぬ一般的他者ないし異なる価値観をもつ人々との空間の共有という性質によって、必然的に生じる問題であるといえる。

第5節 状況適合性と各状況における社会的迷惑の抑制

行動を決定する際に参考にすると考えられる基準は、多数ある。特に、公共空間のようなさまざまな集団や個人が集まる状況下では、その基準は複雑になるだろう。例えばゴッフマン(1980)は、お互いによく知らない人々が集まる公的な場において、対面的相互作用のあり方を決定するためのルールとして公共の秩序があり、そこでは人々は一定の公共作法に従うことが求められると述べている。また個人の行動は、このような周囲の他者や社会的な影響の有無といった他者を基準とした評価の他、自分にとって迷惑であるかどうかといった自己を基準とした評価によって影響を受けると考えられる。これに関連して、山岡(2009)は、個人の行動を制御する規範を自己制御規範と呼び、社会・集団・個人の3次元から捉えている。社会規範とは、自分が生活する社会の規則や価値観を取り込んだ規範

であり、法律、常識、マナーなどがそれにあたる。また、集団規範とは所属集団の価値観、合意、目標や評価基準を取り込んだ規範であり、個人規範は個人的な価値観や志向、理想像などを反映した規範である。これらの各次元の規範が相補的に機能しあって、その時々
の行動は選択されるとしている。ゴッフマンのいう公共の秩序とは、この社会規範に当
たる。また先述の行動に影響を及ぼす評価指標についてみると、他者を基準とする行動評価
指標は、社会規範と集団規範に対応し、自己を基準とする行動評価指標は個人規範に対応
するといえる。以上の社会、集団、個人の基準の中で、いずれの基準を重視するかによっ
て行動は決定されるが、異なる基準が採用されることで衝突・葛藤が生じ、社会的迷惑が
引き起こされると考えられる。ゴッフマン(1980)は、公共空間においては、人々はその都
度その状況に適合した行動をとるよう求められ、状況適合性の規則に従うと述べている。
しかし、いずれの規範に則った行動がふさわしいと判断されるかは、状況ごとに異なるこ
とが予想される。そのため、常に社会的に望ましい行動がとられるとは限らず、状況によ
っては社会的迷惑を引き起こす原因にもなると考えられる。そこで次に、状況適合性に着
目し、集団状況と個状況における社会的迷惑の抑制について、それぞれ検討する。

先述のように、公共空間における社会的迷惑は、他者との関係性を維持しようとする態
度に関連していると推測される。他者の迷惑になる行動はネガティブな評価を受け、結果
として他者からの受容が阻害されて社会適応の妨げになるだろう。そのために、「他者の迷
惑になることはしない」という規範意識が重視されていと考えられる。そして d [集団状
況] では、見知らぬ他者だけでなく身近な他者が自己の社会的迷惑の受け手になるため、
身近な他者との関係性の悪化を回避するために、社会的迷惑は抑制されると考えることが
できる。しかし、青年による社会的迷惑を対象とした研究では、必ずしもそのような結果
は得られておらず、集団状況では社会的迷惑が促進される場合もあることが指摘されてい
る。友人などと一緒にいる場合、社会規範に沿って行動することは必ずしも適応的である
とは言えず、対人関係から見ると逆に不適応的である場合がある。友人など相互作用の相
手がいる状況では、その相手と共有されるインフォーマルな規範からの逸脱は相互作用の
相手に与える悪印象や課題遂行への支障が懸念され、公衆道徳規範に沿った行動をす
ることはかえって対人関係の悪化につながる可能性がある(高木・村田, 2005)。授業中の私語
に関する研究では、私語の抑制は対人関係の維持・円滑化に対して少なからず否定的な影
響を及ぼしており(出口・吉田, 2005)、規範意識に従うことに伴うデメリットに敏感なも
のほど、即ち対人関係の悪化に対して敏感な者ほど、私語が促進される可能性が示唆されて

いる(石田他, 2000)。また私語はいけないと考えていても、クラスの皆は私語に寛容なようだからいだろうとする規範の過寛視が起こり、仲間からの期待に応える形で社会的迷惑が引き起こされることが示されている(卜部・佐々木, 1999)。すなわち、「社会的迷惑をすることこそが“善”である」という集団規範への準拠の結果として、社会的迷惑が生じるということがありうるのである。特に日本の青年は、成人より他者依存的であるが、関係や思惑を配慮し気を配る他者を同質的な他者に限定する傾向が極めて顕著である(高田・松本, 1995)。このため、特に青年では、身近な他者がいる状況においては行動適合性の評価にずれが生じやすいと考えられる。

一方、身近な他者がいない c [個状況] では、関係性維持の動機づけが作用せず、社会的迷惑が生じやすいと考えられる。現在の社会においては、見知らぬ他者と接触する機会は著しく増加し、日常的に一人も身近な他者が周囲に存在しない状況を経験することになる。周囲に身近な他者がいないということは配慮すべき他者がいないということであり、他者との関係性を維持するよう動機づけられず、社会的迷惑は抑制されなくなると考えられる。

以上のように、集団状況と個状況で社会的迷惑抑制の機序が異なることは、先行研究の結果からも支持されている。例えば高田・矢守(1998) は、高校生、大学生の乗車マナーについて検討している。「個の認識・主張」の弱さがマナーの悪い乗車行動に関連し、評価懸念が集団を基盤として生じる他者意識の弱い行動の中で行動頻度が比較的高い行動を促進するという結果から、高校生は集団内の他者(友人)の評価を懸念し、孤立を避けるために、他者の行動に同調しがちであり、そのような身近な他者への同調がマナー違反行動を引き起こすとしている。高田・矢守(1998) はこの結果を受け、乗車マナーの問題は、一部の乗客が他の一般乗客の中に閉鎖的な群れを形成する点に関連し、高校生の乗車行動の問題は、広く人々が公共の場で仲間内の群れを成す性向から派生する現象として捉えるべき一面を有するとしている。

これをふまえると、社会的迷惑には 2 つの側面があると考えられる。1 つは目的としての社会的迷惑であり、もう 1 つは手段としての社会的迷惑である。前者はその行動そのものをしてほしいという欲求から生じるものであるが、後者はしたいかどうかではなく、目的を達成したいという欲求から目的を達成する過程で生じるものである。自分は社会的迷惑(にあたる行動)をしたいとは思わないが、仲間たちが自分にその行動をすることを期待しているような場合、仲間と同調して関係性を維持しようとする。この場合、社会的迷惑行動は、

それをする事自体が目的ではなく、一つの手段に過ぎない。このように、青年の社会的迷惑は、特に仲間集団への適応のための手段としての側面があり、必ずしも個々の青年の問題としてだけで説明することはできない。社会的迷惑を抑制するためには、この2つの社会的迷惑を区別することが重要である。

青年の社会的迷惑について議論する際、「一人だとまじめ」である青年の特徴について言及されることが多々ある。山田(2009)は、その時々で「空気を読」み、場当たりに適応的な態度をとる状況志向ないし状況相対主義が現代の青年の特徴であるとしている。このような青年にとっては、善悪の判断も状況次第である。また公共マナーに関わる行動については、その状況を遂行者がどのように定義し、どのように行為選択を行うかに着目する必要があると指摘されている(稲永, 1999)。このように、青年による社会的迷惑にはそれぞれの青年がおかれた状況への適応という側面があると考えられながらも、これまでの社会的迷惑に対する言説には、他者に対する無配慮という曖昧な批判に終始している感がある。また先述のように、社会的迷惑は見知らぬ他者との間で問題になる行動であり、青年による社会的迷惑の根底には見知らぬ他者への無配慮な態度があると指摘されている。にもかかわらず、個状況における社会的迷惑についての検討があまり行われていないのは、生活全般における適応を脅かす問題ではないためである。しかし、社会的迷惑を抑制することは、公共空間において多くの人が快適に過ごすために必要な条件である考えることができる。以上のことから、公共空間における社会的迷惑については、社会的迷惑が起こる状況と、その状況で何が適合的であると判断されるのか、その判断についても考慮した上で検討する必要があるといえる。それによって社会的迷惑に関する知見を蓄積することで、公共空間における青年の行動制御についての示唆を得ることができるだろう。

第2章 本論文の目的と全体構成

第1節 本論文の目的

第1章を整理すると、公共空間において社会的迷惑が引き起こされる背景には3つのずれがあると推察される。1つ目は行動の生じる状況及び状況に対する個人の認識のずれ、2つ目はその状況においてふさわしい行動を決定する上でいずれの評価指標が重視されるかという状況適合性の基準のずれ、3つ目は基準である行動評価指標の個人間のずれである。これらのずれは独立したものではなく、公共空間での行動制御における一連の流れとして生じると考えられる(Figure 1-2)。

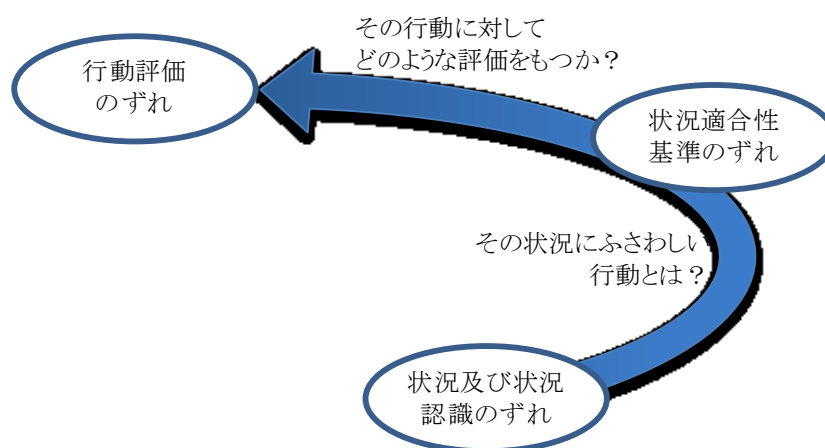


Figure 1-2 社会的迷惑に関わる3つのずれ

状況が社会的迷惑に及ぼす影響については、これまでに集団や組織の風土などによる影響が検討されている。しかし、公共空間における周囲の他者との関係性と状況適合性に着目した検討はほとんど行われていない。社会的迷惑に影響を及ぼす状況要因には、電車内の込み具合や利用時間といった影響も考えられるが、本論文では、公共空間に対する公私の意味づけに焦点をあて、状況設定を行う。具体的には、身近な他者(同性友人)の在・不在を基準として、集団状況及び個状況を設定する。

社会的迷惑の抑制に作用する要因は、これまで社会的迷惑を認知する側(認知者)からのアプローチ、社会的迷惑を行う側(遂行者)からのアプローチ、社会的迷惑が起こる状況要因からのアプローチの、3つのアプローチで検討されている(吉田・斎藤・北折, 2009)。行動評価指標については、先行研究では、認知者要因として社会的影響性、社会的合意性、社会認識、社会的公正等、遂行者要因として社会考慮、社会的スキル、思いやり、自己制

御等について、社会的迷惑に及ぼす影響が検討されている。本論文では、状況適合性の基準を認知者・遂行者の両側から捉える。さらに認知者・遂行者要因として、それぞれ他者を基準とした行動評価指標と自己を基準とした行動評価指標を変数として採用する。

これらの行動評価指標は、必ずしも常に社会的迷惑抑制に効果的ではなく、身近な他者の存在といった状況や、周囲の見知らぬ他者との関係性の認識といった状況認識によって、これらの行動評価指標が社会的迷惑に及ぼす影響は異なる。また特に、自己と他者との間に既存の関係がない個状況では、社会的迷惑が起こりやすいと予測され、個状況に焦点をあてて社会的迷惑の抑制要因を検討する必要がある。これは、その状況においてはどのような基準にもとづいて行動するべきかという、状況適合性の評価のずれに起因すると考えられるが、状況による調整効果について検討した研究はわずかである。状況及び状況認識による調整効果を考慮することで、社会的迷惑の問題をより明確に捉えることができるだろう。

以上のことから、本論文では、社会的迷惑の抑制について、認知者と遂行者のそれぞれの立場からみた要因、および状況認識に関わる要因の3つに焦点をあて、検討する(Figure 1-3)。これにより、他者との関係に焦点をあてて、個状況及び集団状況における社会的迷惑抑制の機序を解明することを目的とする。

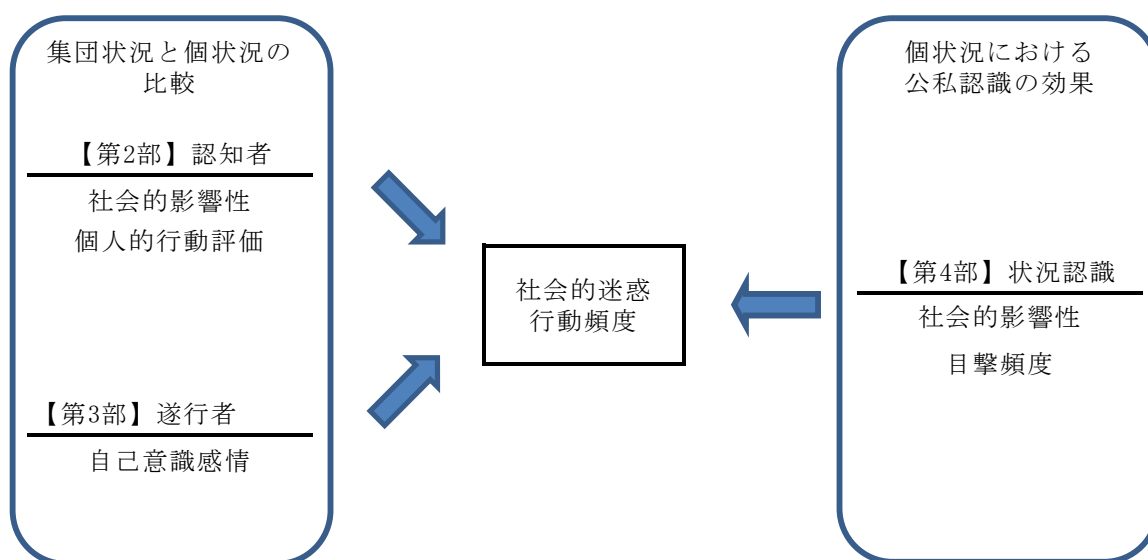


Figure 1-3 社会的迷惑に対するアプローチと本論文での検討要因の対応

第2節 本論文の全体構成

本論文の全体構成を Figure 1-4 に示す。

第1部第1章では、公共空間、特に電車利用場面での社会的迷惑の問題と現状について概観した。社会的迷惑の背景因として青年の規範意識に注目し、その根底に他者との関係維持の欲求があることを示した。また、社会的迷惑の生起状況について整理し、本論文の立場について述べた。第2章では、社会的迷惑の抑制について、認知者、遂行者、及び状況認識の、3つの観点からアプローチすることを述べた。

第2部、第3部では、個状況と集団状況の社会的迷惑の比較を行い、社会的迷惑の影響要因の状況による違いを検討する。まず第2部では、認知者の立場から社会的迷惑の抑制を検討する。第3章では、社会的影響性の認知が社会的迷惑に与える影響と、その影響に間接的に作用する調整変数の効果について、理論的検討を行う。第4章では、予備的検討として、立場と関係性による他者の迷惑認知の違いについて検討する(研究1)。第5章では、他者の迷惑認知による社会的迷惑の抑制と共感性の調整効果を検討する(研究2)。第6章では、他者の迷惑認知と個人的ネガティブ評価による社会的迷惑の抑制と自意識特性の調整効果について検討する(研究3)。第7章では、第2部で得られた知見から、総合的考察を行う。

第3部では、遂行者の立場から、社会的迷惑の抑制を検討する。第8章では、社会的迷惑の遂行時に喚起される罪悪感、恥意識とその影響について、理論的検討を行う。第9章では、社会的迷惑に対する罪悪感とその喚起要因について検討する(研究4)。第10章では、行動基準による罪悪感と恥意識の喚起の違いと、社会的迷惑の抑制効果を検討する(研究5)。第11章では、第3部で得られた知見から、総合的考察を行う。

第4部では、個状況に焦点をあて、その状況に対する認識が社会的迷惑に与える影響を検討する。第12章では、公共空間を公的な場と私的な場のいずれと捉えるかという公私認識のずれが、周囲の他者に対する無配慮な態度を生じさせる様子を概観し、公私認識が社会的迷惑に及ぼす影響について、理論的検討を行う。第13章では、青年が公共空間に対して持つ公私認識の特徴を、周囲の他者や社会に対する無関心な態度に着目して検討する(研究6)。第14章では、個状況において他者の迷惑認知等の外的評価指標が社会的迷惑に及ぼす影響と、公私認識による調整効果について検討する(研究7)。第15章では、第4部で得られた知見から、総合的考察を行う。

第5部では、第2~4部で得られた知見をもとに、公共空間における社会的迷惑抑制につ

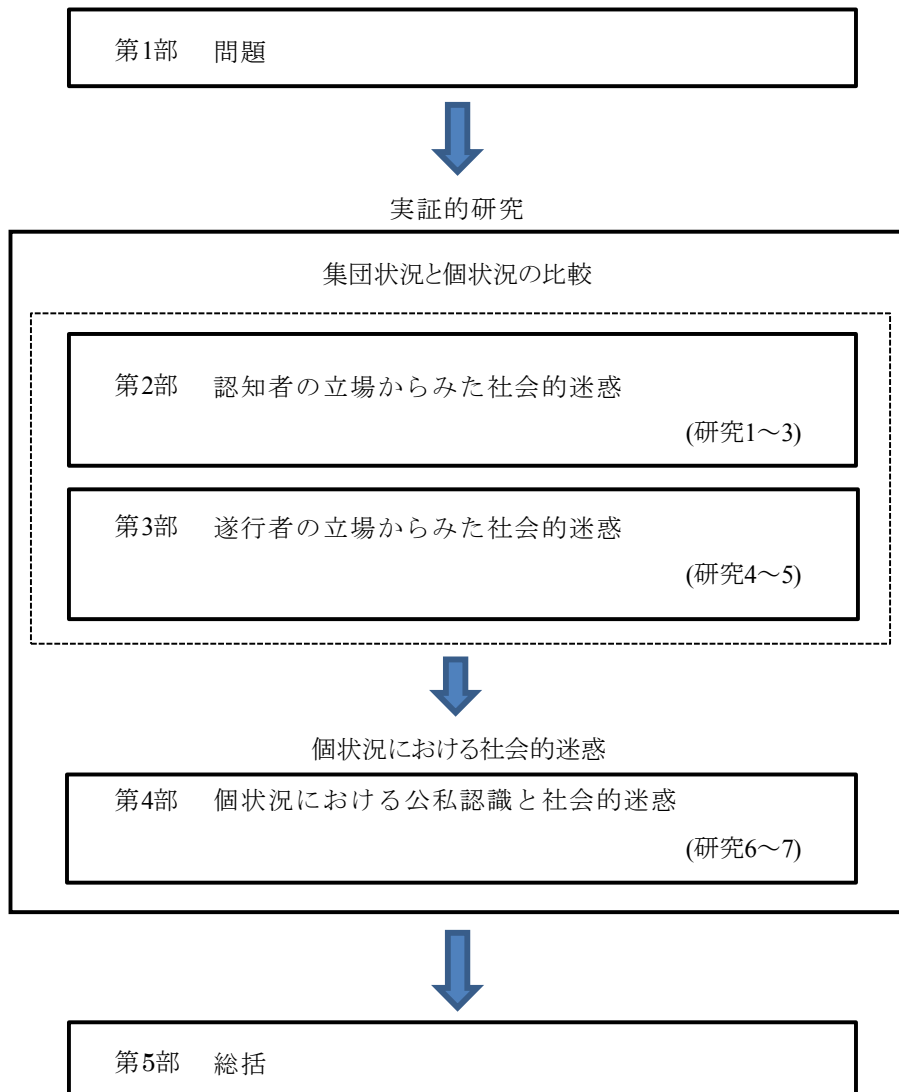


Figure 1-4 本論文の全体構成

いて総括する。第 16 章では、研究 1～7 の結果から、集団状況と個状況における社会的迷惑抑制の機序について考察する。第 17 章では、第 2～5 部で得られた知見から総合的考察を行う。

注)

ⁱ これは、電車が①多様な年代、性別の人々が日常的に利用する公的機関である、②街角などに比べて流動性が低く、他者と一定時間以上共有される空間である、といった理由のためである。乗車場面は、①学校や会社などとは異なり、多くの場合周囲にい

る人のほとんどが見知らぬ人である，②映画館やレストランなどに比べて狭く，顔を見ることができる距離である，③一定時間その空間に閉じ込められるため，回避がしにくいといった特徴があり，行動が迷惑であると認知されやすい，言い換えると迷惑行動が生じやすい場面であると考えられる。

- ii これまでの研究では，これらの行動は社会的迷惑“行為”とされることが多かったが，以下では社会的迷惑“行動”と呼んでいる。これは，本論文で扱う迷惑行動は，必ずしも遂行者の意図したものとはいえない行動を含むと考えられるためである(戸田・小林, 2007)。
- iii 一例として，阪神電鉄では，平成 20 年から阪神沿線の小学校に通う新 1 年生，幼稚園・保育園の卒園生などに，「電車に乗るときはマナーを守ろうね」をテーマにするオリジナル下敷きを配布。神戸電鉄では，平成 22 年 4 月から毎月 1 日・15 日に，沿線高等学校の生徒指導担当教諭らの協力の下，マナー向上運動を実施。西武電鉄では，平成 23 年 11 月に，沿線高等学校と合同マナーアップキャンペーンを実施し，協力校の生徒十数名がマナー向上の呼びかけと啓発グッズを配布。また福井県県民安全課では，平成 23 年 6 月に，県内の高等学校の生徒を対象に，登下校に利用する鉄道でのマナーアップ指導を実施。

第2部 認知者の立場からみた社会的迷惑

第3章 認知者の立場からみた社会的迷惑の抑制に関する理論的検討

第1部において、青年は他者に迷惑をかけないことを行動決定上の一つの指標にしていることが示唆された。このように、社会的迷惑に対する認知者の立場からの行動評価が公共空間における行動に影響を及ぼすと考えられ、他者が迷惑に感じていることに気づくことで、社会的迷惑は抑制されると考えられる。それと同時に、周囲の人々に迷惑をもたらしているという認識がなければ、その行動を抑制することはできないだろう。社会的迷惑を見て、迷惑であると認知できることが、社会的迷惑抑制のためには重要であると考えられる。そこで第4部では、社会的迷惑をみる側(認知者)の立場からみた社会的迷惑の抑制について検討する。

第1節 社会的影響性と他者が受ける迷惑の認知

先述のように、ある行動によって他者が迷惑するだろうという認知が社会的迷惑に影響を及ぼすと考えられるが、社会的迷惑が抑制されるためには、まず他者が迷惑を受けているということが適切に認知される必要がある。他者の迷惑認知については、先行研究においても検討されており、迷惑の受け手が誰であるかによって迷惑認知にギャップがあることが指摘されている。

まず、自己と他者との間のギャップについては、他者が感じる迷惑認知は、自分が感じる迷惑認知よりも高く評価される傾向があることが示されている(戸田・小林, 2005; 吉田他, 1999)。これについて斎藤(1999)は、社会的迷惑を抑制する上では、自分は迷惑に感じなくても、他者は迷惑に感じているかもしれない、社会的には迷惑であるかもしれないといった、社会考慮の視点が重要であるとしている。この社会考慮とは、複数の個人からなる社会というものを考えようとする態度であり、自分や身近な他者といった限られた対象への影響だけでなく、見知らぬ他者を含めた社会全体への影響を考慮する態度である。石田他(2000)は、ある行動に対して「迷惑である」と認知するためには、社会的影響性と社会的合意性のいずれかの視点を持っている必要があるとしている。社会的影響性とは、その行動が自分を含めた他者や社会全体に不快感や不利益を与えるだろうという認知である。また社会的合意性とは、自分が考えているのと同じように他者も考えているだろうという

認知である。社会的合意性が高い人は、自分が迷惑であると思わなければ他者にとっても迷惑ではないというように、自己中心的な視点をもつと考えられる。これは、社会的迷惑の問題の根底には、自分が迷惑だと感じなければ他者にも迷惑ではないとする認知者の態度があることを示唆している。このことから、社会的迷惑を抑制するためには、たとえ自分にとっては迷惑ではないとしても、迷惑だと感じる人がいるかもしれないと想像することが必要である。

また、遂行者との関係性によっても、迷惑認知にギャップが生じると考えられる。吉田他(1999)は、身近な他者による社会的迷惑は許せても、見知らぬ他者による社会的迷惑は許せないというように、行為者との関係性が迷惑認知に影響を及ぼすことを示している。このような身近な他者に対する許容的態度は、身近な他者による行動が社会への影響性を低く評価することにつながり、社会的迷惑が抑制されにくくなる可能性がある。しかし、遂行者との関係性によって生じる迷惑認知のギャップについてはこれまでに検討されておらず、推測に留まる。遂行者と認知者の関係性や立場を考慮した上で、青年自身の迷惑認知及び他者迷惑の認知を検討し、社会的迷惑に対する態度を明確に捉える必要があるといえる。

第2節 他者の迷惑認知による社会的迷惑の抑制効果

その一方で、大学生の授業中に見られる私語などの反規範的な行動について検討した小牧・岩淵(1997)は、これらの行動の背後に「してはいけない」とわかっているにもかかわらず「ついしてしまう」という態度があることを明らかにしている。また小池・吉田(2011)は社会考慮と公共空間で起こる社会的迷惑との関連を検討しているが、社会考慮の高低によって社会的迷惑の頻度に差はみられていない。これは、他者に迷惑をかけているという認識が実際に社会的迷惑を抑制するとは必ずしもいえないということを示唆している。では、なぜ他者が迷惑するだろうという社会的影響性の認知が実際の行動には結びつかないのだろう。これには、善悪の判断とは別の要因が関わっていることが予想される。ここでは、他者への共感性と自意識特性による影響を検討する。

共感性と社会的迷惑

公共場面での、まさに傍若無人といえる社会的迷惑が起こるのは、他人への気配り、相手へのいたわり、思いやりの心が欠けているためであるという見方は、多く受け入れられたものであるといえる(e.g. 薩日内, 2001)。このような他者への思いやりの心に関する個人

特性に、共感性がある。共感性は、向社会的行動を動機づけ、媒介する重要な内的変数である(Eisenberg & Mussen, 1989 菊池・二宮訳, 1991 ; 浜崎, 1985)。そのため、これまで共感性と向社会性、援助行動などとの関連について検討した研究は多い(e.g. 藤吉・田中, 2006 ; 桜井, 1986, 1988 ; 登張, 2000 ; 高木, 1976 ; 浜崎, 1985)。また共感性は、認知的要素と感情的要素からなる多次元的概念であるとする見方から、これまで多くの多次元尺度が作成されている(明田, 1999; Davis, 1983 ; 加藤・高木, 1980 ; 澤田・齊藤, 1995, 1996 ; 登張, 2003)。これら多次元共感性尺度の多くは、「共感的関心」「個人的苦痛」「視点取得」「ファンタジー」の4つの因子から構成されている。登張(2000)は、多次元視点に立った共感性研究を概観し、これらの下位因子がどのような変数と関連するのかを検討している。これによると、下位因子ごとに関連する変数は異なり、共感的関心、視点取得は向社会性と有意な正の相関関係にあることを示している。

石田他(2000)は、共感性や役割取得の高い人ほど、自分を含めた他者、社会全体にとって、その行動がどういう意味をもつかを考える視点をとりやすいと予想している。共感性の高い人は、他者の立場に立って他者の心を認知し、他者に共感的に関わり、他者の心を慮り、他者の苦痛を取り除こうとする傾向をもつことから、他者の迷惑認知に目を向けやすく、その行動に他者が迷惑を感じていることに気づくことで行動が抑制されると考えられるのである。社会的迷惑と共感性の関連を検討した研究には、小池・吉田(2005)、戸田(2006)などがある。友人や知人との間で生じる対人的迷惑行動を検討した小池・吉田(2005)では、行動によってばらつきがあるものの、友人との間で生じる社会的迷惑は共感性と負の相関にあることを示している。一方、公共場面における社会的迷惑行動の生起と共感性との関連を検討した戸田(2006)では、社会的迷惑行動と共感性には有意な相関はみられていない。このように、社会的迷惑に共感性が及ぼす影響については、一貫した結果は得られていない。戸田(2006)で共感性による影響がみられなかった原因の一つとして、小池・吉田では友人という身近な他者との間で生じる社会的迷惑を想定したのに対し、戸田(2006)では他者との関係性の影響が考慮されていなかったことが考えられる。

浜崎(1985)は、幼児のチップ分与行動をとりあげ、他者存在による共感性の作用の違いを検討している。これによると、共感性が低い幼児では、周囲に他者が存在する場合に、他者が存在しない場合に比べ、チップの分与数が有意に多くなることが示されている。また小池・吉田(2005)においても、情動的共感性の高い人は相手によって社会的迷惑の行動頻度が異なることが指摘されている。このように、公共場面における社会的迷惑に対する

共感性の影響は、周囲の他者の存在やその関係性によって左右されると考えられる。公共場面における人間関係は非常に複雑に入り組んでおり、一概に捉えることは困難である。しかし、周囲の他者との関係は、その場面で起こりうる社会的迷惑を抑制する上で重要な役割を果たすと推測される。

自意識特性と社会的迷惑

他者に見つめられたり鏡に映る自分を見たりするとき、私たちは自分自身に対して注意を向けやすくなる。自意識特性とは、このような自己への注意の向かいやすさに関する個人特性である(Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975)。自意識特性は、公的自意識特性と私的自意識特性とに分類される(e.g. Fenigstein et al, 1975; 押見, 1992)。公的自意識とは、他人からみられている自分、自分の外面的、対人的な側面を意識しやすい傾向である。また、私的自意識とは、自分の感情、態度、考えていることなど、他人には直接知ることのできない、内面的、私的な側面を意識しやすい傾向である。これらは弱い正の相関関係にあるが、それぞれ独自の行動効果をもつことが知られている(押見, 1990; 1992)。例えば、公的自意識の高い人は社会的基準を重視する傾向にあるのに対し、私的自意識の高い人は個人的基準を重視する傾向があることが指摘されている(Fenigstein, 1979)。

公的自意識が高い人は他者からの評価を気にしやすく、特にネガティブな評価を受けることを恐れる傾向をもつ(Fenigstein, 1979)。そのため自分に対して他者が迷惑を感じるような事態を回避しようとすると考えられ、他者が迷惑を感じているかどうかは行動を左右する重要な基準になるといえる。しかし公的自意識が低い人は、自分が他者からどのようにみられているのかを意識することは少ない。そのため他者がその行動を迷惑と感じるだろうと認知していてもそれを他者からのネガティブな評価に関連付けにくく、行動を抑制するかどうかには大きな影響を与えないことが予想される。これに対して、私的自意識は自己の態度に対する敏感さに関する個人的特性であるが、私的自意識の高い人は周囲の状況から影響を受けにくく、態度と行動の一貫性が高いことが知られている。そのため私的自意識が高い人では、迷惑認知やネガティブ認知が高いほど社会的迷惑は抑制されると考えられる。

公的自意識、私的自意識と社会的迷惑の関連については、出口(2004)、山形(2005)などがある。出口(2004)は、公的自意識が高い群と公的自意識が低く私的自意識が低い群で他者迷惑認知と社会的迷惑に有意な負の相関がみられており、公的自意識と私的自意識が交互作用をもちながら迷惑認知と社会的迷惑との関連に間接的に影響を及ぼすことを示唆して

いる。一方山形(2005)は、私的自意識高群では自己の信念や基準や価値観に従って行動が導出されるのに対して、公的自意識高群では状況依存的な行動が導出されて、マナー違反が増加することを示している。このように、自意識特性と社会的迷惑の関連については、社会的迷惑を抑制するという結果と促進する結果が示されており、その効果については検討の余地が残されている。

第3節 第2部の目的

第2部では、社会的迷惑の社会的影響性の指標として迷惑認知をとりあげ、社会的迷惑の抑制効果を検討する。特に、迷惑認知と社会的迷惑の関連に間接的に作用する調整要因と考えられる共感性と自意識特性の影響に重点を置き、社会的迷惑が引き起こされる背景因にあるわかっているけど「ついしてしまう」という態度について明らかにすることを目的とする。

第4章 認知者と遂行者の視点の違いによる迷惑認知の差(研究1)

第1節 本研究の目的

研究1では、遂行者—認知者という2つの立場と、社会的迷惑が身近な他者な他者—見知らぬ他者のいずれの他者との間で問題になるのかという2つの関係性から、4つの状況を設定し、これらの状況における迷惑認知の差を検討する。

第2節 方法

調査協力者

京阪神圏の4年制大学に通う大学生、大学院生に質問紙調査を実施し、262名から回答を得た。このうち回答に不備のなかった238名(18~24歳、平均年齢19.68歳、 $SD = 1.42$)を分析対象とした。男性は69名(平均年齢20.14歳、 $SD = 1.38$)、女性は169名(平均年齢19.49歳、 $SD = 1.40$)である。

実施方法

社会的迷惑の認知者、遂行者として、同性友人を想定させる質問紙A、見知らぬ他者を想定する質問紙Bの、2種類の質問紙を作成し、調査協力者に無作為に振り分けた。質問紙Aには121名(男性38名、女性83名)、質問紙Bには117名(男性31名、女性86名)が回答した。調査は、大学の講義開始前あるいは終了後に質問紙を配布し、集団的に実施、回収を行った。その他、一部の協力者に対しては、個別に質問紙を配布、回収を行った。調査実施時期は2005年9~10月である。

実施内容

社会的迷惑 高田・矢守(1998)の乗車行動に関する項目、斎藤(1999)、吉田他(1999)の社会的迷惑行為項目を参考に、電車利用場面で起こる社会的迷惑行動15項目を選定した(Table 2-1)。

他者迷惑認知 自分が各社会的迷惑をしたとき、他者が感じる不快の程度を推測し、「1: 全く気にならない」~「6: 非常に不快である」の中から最も当てはまるものを1つ選ぶよう求めた。このとき、質問紙Aでは「あなたと、あなたの同性の友人を、思い浮かべて下さい。」と同性の友人を想定するよう求め、質問紙Bでは「あなたと、あなたの知り合いでない、その場に居合わせた人を、思い浮かべて下さい。」と見知らぬ他者を想定するよう求めた。

Table2-1 電車利用場面における社会的迷惑項目

	本文中での表記
1 電車に不正乗車（無賃乗車，キセル）する	不正乗車
2 まだ降りる人がいるのに，先に乗り込もうとする	降りる人より先に乗り込む
3 かけ込み乗車をする	かけ込み乗車
4 電車内で，携帯電話をマナーモードにしない	携帯電話をマナーモードにしない
5 混雑した電車で，空席の前に立ったままている	空席の前に立つ
6 大きな荷物を置いて通路をふさぐ	大きな荷物で通路をふさぐ
7 電車内で物を食べたり飲んだりする	車内での飲食
8 座席に荷物を置いたり，足を広げて座ったりする	座席の占有
9 電車内で，声の大きさを気にせずおしゃべりをする	おしゃべり
10 電車に乗ったり降りたりする人がいるのに，入り口付近にいて動かない	乗降時に入り口付近で動かない
11 リュックを背負ったまま満員電車に乗る	満員電車のリュック
12 電車内や駅のホームにゴミを放置する	ゴミの放置
13 電車内でヘッドホンステレオの音漏れを気にせず音楽を聞く	ヘッドホンステレオの音漏れ
14 電車内で，携帯電話で通話する	携帯電話の通話
15 乗車時に，列に並ばずに割り込む	割り込み

自己迷惑認知 他者が各社会的迷惑をするのを見たときに自分が感じる不快の程度を、「1: 全く気にならない」～「6: 非常に不快である」の中から最も当てはまるものを1つ選ぶよう求めた。他者迷惑認知同様，質問紙 A では同性の友人を，質問紙 B では見知らぬ他者を想定して回答するよう求めた。

第3節 結果と考察

各社会的迷惑に対する迷惑認知

他者との関係性(身近な他者―見知らぬ他者)と男女の4群ごとに，自己の他者に対する迷惑認知の平均値を Figure 2-1 に，他者の自己に対する迷惑認知の平均値を Figure 2-2 に示した。各行動は，それぞれ4群を合計した全体の平均値の昇順に並んでいる。

他者の社会的迷惑に対する迷惑認知では，15 行動の中で「車内での飲食」「かけ込み乗車」で全体の平均値が低く，いずれの群も 3.50 前後に集中していた。その他の行動では，いずれの群でも平均値は 3.50 以上であり，特に「乗車時の割り込み」「ゴミの放置」などで全体の平均値は高かった。各群において「やや不快」「非常に不快」と答えた協力者の割合をみると，「車内での飲食」「かけ込み乗車」ではいずれの群でも4割に満たず，女性では身近な他者のこれらの行動に対して迷惑に感じている人は2割程度であった。見知らぬ他者に対しては，「乗車時の割りこみ」「ゴミの放置」「降りる人より先に乗り込む」「乗降

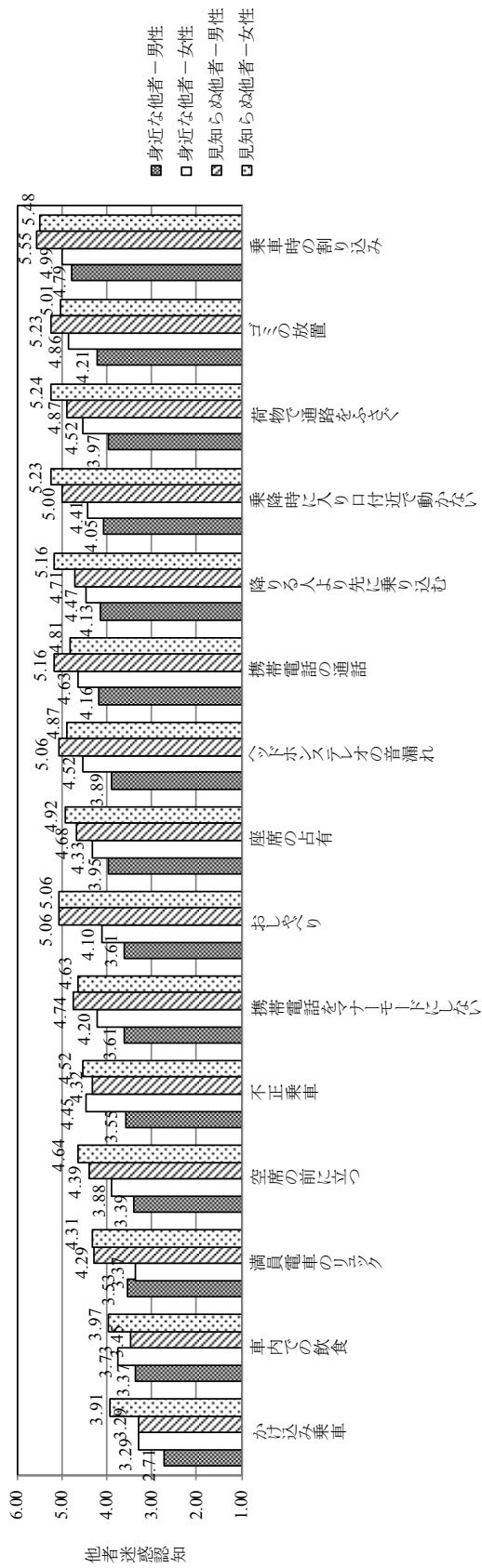


Figure 2-1 関係性及び性別ごとに見た各社会的迷惑に対する他者迷惑認知の平均値

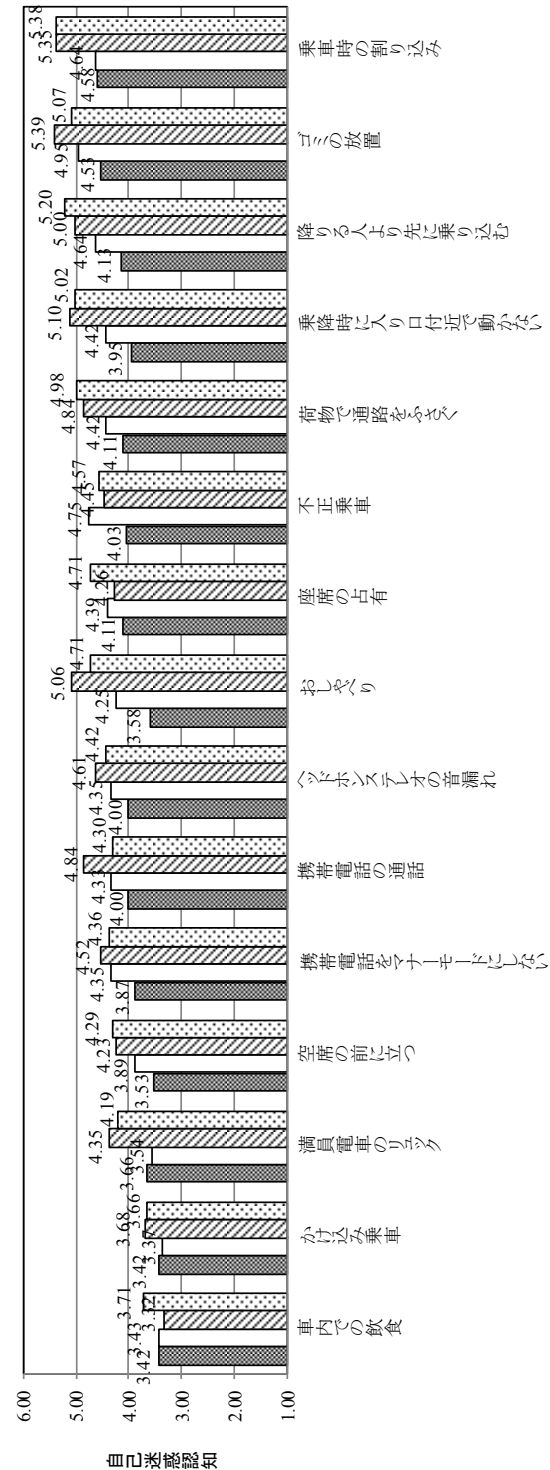


Figure 2-2 関係性及び性別ごとに見た各社会的迷惑に対する自己迷惑認知の平均値

時に入り口付近で動かない」では、協力者の7割以上が迷惑を感じていた。身近な他者に対しては、「乗車時の割り込み」「ゴミの放置」「不正乗車」などで迷惑を感じる人が多かった。以上のように、大学生は、今回とりあげた社会的迷惑の中では、乗車時の割り込みやゴミの放置については迷惑度が高いが、対して「車内での飲食」や「かけ込み乗車」について迷惑度が低いと考えているといえる。

他者迷惑認知においても、全体の平均値は「かけ込み乗車」「車内での飲食」で低く、「乗車時の割り込み」「ゴミの放置」で高かった。「かけ込み乗車」では、男性において身近な他者の迷惑認知は3.00を下回っており、「やや不快」「非常に不快」と答えた人は1割に止まった。このことから、自分がかけ込み乗車をすると友人が迷惑を感じるだろうと考えている男性大学生は多くないといえる。かけ込み乗車以外の行動については、自己迷惑認知と同様に、いずれの群もおおむね3.50を上回っていた。「やや不快」「非常に不快」と答えた割合は、「乗車時の割り込み」で最も高く、身近な他者で7割、見知らぬ他者では9割前後の大学生が、他者は迷惑に感じているだろうと考えているといえる。また、⑨ゴミの放置、②荷物で通路をふさぐ、「乗降時に入り口付近で動かない」「降りる人より先に乗り込む」「おしゃべり」については、7割以上の大学生が見知らぬ他者は迷惑を感じているだろうと考えていた。

各群における迷惑認知の差の検討

各社会的迷惑について、他者と自己(認知者)、男性と女性(性別)、身近な他者と見知らぬ他者(関係性)との間の、迷惑認知の差異を検討するため、認知者、関係性、性別の3要因分散分析を行った(Table 2-2)。

その結果、二次の交互作用は認められなかったが、「かけ込み乗車」($F = 9.38, p < .01$)、「大きな荷物で通路をふさぐ」($F = 2.83, p < .10$)で認知者と性別の交互作用が、「携帯電話をマナーモードにしない」($F = 8.19, p < .01$)、「座席の占有」($F = 5.94, p < .05$)、「ヘッドホンステレオの音漏れ」($F = 5.50, p < .05$)、「空席の前に立つ」($F = 3.05, p < .10$)で認知者と関係性の交互作用が、「携帯電話での通話」($F = 6.15, p < .05$)、「ゴミの放置」($F = 6.24, p < .05$)、「おしゃべり」($F = 6.37, p < .05$)、「携帯電話をマナーモードにしない」($F = 3.27, p < .10$)、「ヘッドホンステレオの音漏れ」($F = 3.57, p < .10$)で性別と関係性の交互作用がみられた。

また、「携帯電話での通話」($F = 13.26, p < .001$)、「不正乗車」($F = 6.49, p < .05$)、「乗車時の割り込み」($F = 14.03, p < .001$)、「ゴミの放置」($F = 4.17, p < .05$)で認知者の主効果が、

Table 2-2 各社会的迷惑に対する迷惑認知の3要因分散分析の結果

	F						多重比較
	認知者	性別	関係性	認知者 × 性別	認知者 × 関係性	性別 × 関係性	
1 不正乗車	6.49 *	5.33 *	1.71	.47	2.58	2.39	Ot < Se* M < W*
2 降りる人より先に乗り込む	1.81	6.38 *	20.77 ***	.06	.18	.11	M < W* Cl < St***
3 かけ込み乗車	5.22 *	2.25	5.33 *	9.38 **	2.52	.01	OtM < OtW**SeM** Cl < St*
4 携帯電話をマナーモードにしない	.07	1.18	8.84 **	.26	8.19 **	3.27 †	ClOt < ClSe†StOt*** zStSe < StOt* CIM < CIW* < StM**
5 空席の前に立つ	.96	2.50	14.90 ***	.67	3.05 †	.52	ClSe < StSe* StSe†ClOt*** < StOt
6 大きな荷物で通路をふさぐ	.92	5.04 *	22.70 ***	2.83 †	1.48	.33	SeM < OtM* < OtW** Cl < St***
7 車内での飲食	2.58	3.04 †	.45	1.48	.12	.50	M < W†
8 座席の占有	1.40	4.09 *	7.26 **	.10	5.94 *	.00	StSe*ClOt*** < StOt M < W*
9 おしゃべり	.34	1.76	52.00 ***	.19	1.61	6.37 *	CIM < CIW** CIMW < StMW***
10 乗降時に入り口付近で動かない	.52	2.49	31.53 ***	.43	.00	1.15	Cl < St***
11 満員電車のリュック	.39	.28	15.21 ***	.17	.92	.02	Cl < St***
12 ゴミの放置	4.17 *	.71	11.24 **	1.09	.39	6.24 *	CIM < StM**CIW* Ot < Se*
13 ヘッドホンステレオの音漏れ	7.29 **	.66	9.41 **	.59	5.50 *	3.57 †	StSe**ClOt*** < StOt CIM < StM**StW*
14 携帯電話の通話	13.26 ***	.02	8.80 **	.88	1.12	6.15 *	CIM < CIW†StM** StW < StM† Se < Ot***
15 乗車時の割り込み	14.03 ***	.13	22.27 ***	.03	1.46	.26	Se < Ot*** Cl < St***

注) 二次の交互作用は認められなかったため、結果はTableから省いた。*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$
 多重比較の表記：認知者Se(Self)-Ot(Others), 関係性Cl(Close person)-St(Stranger),
 性別M(Man)-W(Woman)

「不正乗車」($F = 5.33, p < .05$), 「座席の占有」($F = 4.09, p < .05$), 「降りる人より先に乗り込む」($F = 6.38, p < .05$), 「車内での飲食」($F = 3.04, p < .10$)で性別の主効果が, 「大きな荷物で通路をふさぐ」($F = 22.70, p < .001$), 「乗降時に入り口付近で動かない」($F = 31.53, p < .001$), 「乗車時の割り込み」($F = 22.27, p < .001$), 「満員電車のリュック」($F = 15.21, p < .001$), 「かけ込み乗車」($F = 5.33, p < .05$), 「降りる人より先に乗り込む」($F = 20.77, p < .001$)で関係性の主効果がみられた。このことから, これらの項目について単純主効果の検定及

び多重比較(Bonferroni 法)を行った。

自己迷惑認知と他者迷惑認知の差異

まず携帯電話の車内通話，乗車時の割り込みについては，他者が自分の行動に対して感じる迷惑認知の程度は，自分が他者の行動に対して感じるものよりも高いと考えていた。これに対して不正乗車，ゴミの放置では，自分の方がより迷惑を感じていると考えていた。このように，今回の結果からは，社会的迷惑によって，自己迷惑認知が他者迷惑認知よりも有意に高いものと低いものがあるといえる。他者との関係性との交互作用がみられた 4 項目では，見知らぬ他者との間で自己よりも他者迷惑認知が高いという結果であった。この結果は，吉田他(1999)の結果に一致しないが，吉田らは他者を一般的他者と想定しており，そのために他者が感じる迷惑認知がより強いとする傾向がみられたのかもしれない。このことから，社会的迷惑に対して，大学生と他者のどちらの方がより迷惑を感じているかを一概にいうことはできない。しかし，行動によっては，その行動に対して自分が感じている迷惑と，自分がその行動をしたときに他者が感じるであろうと想像する迷惑の程度は，異なると考えられる。

男性と女性の迷惑認知の差異

不正乗車，座席の占有，車内での飲食，降りる人より先に乗り込もうとすること，という行動については，認知者や関係性に関わらず，女性は男性よりも高い迷惑認知を示した。認知者による差については，荷物で通路をふさぐこと，かけ込み乗車において，他者迷惑認知に差がみられ，女性は男性よりも，他者はより迷惑を感じていると認識していた。また，身近な他者についてみると，騒音に関する迷惑，ゴミの放置においても男女差がみられ，女性は男性よりも迷惑認知が高い傾向がみられた。以上の結果から，男性は女性よりも社会的迷惑に対する迷惑認知が低く，特に身近な他者との間では，その傾向がよくみられるといえる。しかし，携帯電話の通話では，見知らぬ他者との間で，男性の方が女性よりも迷惑認知が高いという結果がみられた。また，日本民営鉄道協会による社会的迷惑ランキング(2000～2011 年度)では，男女で迷惑に感じる行動に違いがあることが示されていることから，相手が知らない人である場合には，行動によっては男性も女性同様あるいはそれ以上の迷惑を示すと考えられる。

身近な他者と見知らぬ他者の迷惑認知の差異

乗降時に入口付近にいる，乗車時の割り込み，かけ込み乗車，降りる人よりも先に乗り込む等の乗降時の迷惑，荷物で通路をふさぐ，満員電車でのリュック等の荷物による迷惑，

混雑時に空席の前に立つといった行動で、身近な他者と見知らぬ他者の間に有意な差がみられた。これらの行動に対して、大学生は、自分が認知者である場合は、身近な他者よりも見知らぬ他者に対してより迷惑を感じていた。また、自分が遂行者である場合は、見知らぬ他者は身近な他者よりも迷惑を感じているであろうと考えていた。このことから、これらの行動は、身近な他者との間ではあまり迷惑ではないが、見知らぬ他者との間で生じたときは重大な迷惑とみなされると思われる。このような結果がみられた原因として、身近な他者に対しては、関係性の維持という点から大目にみよう、または大目にみてくれるであろうという心理がはたらき、相対的に見知らぬ他者に対する迷惑認知が高くなったということが考えられる。

この傾向には、男性と女性の間で違いがみられた。男性は、携帯電話での通話、携帯電話をマナーモードにしないこと、おしゃべり、ヘッドホンステレオの音漏れ等の騒音に関する迷惑、ゴミの放置といった行動で、身近な他者よりも見知らぬ他者に対して迷惑を感じており、見知らぬ他者は身近な他者よりも迷惑を感じているであろうと考えていた。これに対して女性では、これらの行動について、身近な他者と見知らぬ他者との間に有意な差はみられなかった。このことから、このような騒音に関する迷惑やゴミの放置については、女性は身近な他者でも見知らぬ他者でも差はないと考えているが、男性は身近な他者の社会的迷惑に対してあまり迷惑を感じず、身近な他者もまた自分の社会的迷惑に対して迷惑を感じないだろうと考えていることがうかがえた。

第5章 他者の迷惑認知と共感性による社会的迷惑の抑制効果(研究2)

第1節 研究2の目的

研究2では、他者の迷惑認知の社会的迷惑に対する影響と、共感性の調整効果について検討する。先述のように、共感性と社会的迷惑との関連を検討した研究では、共感性と社会的迷惑は弱い関連が見られるに留まり、社会的迷惑は共感性や社会的スキルとは別の個人特性や状況の影響を強く受けるとする指摘(戸田, 2006)と、共感性が高い人は相手の迷惑認知に敏感に反応して行動を制御するとする指摘(小池, 2004; 小池・吉田, 2005)があり、その影響については一致した見解は得られていない。本研究では、集団一個状況の2状況において、他者の迷惑認知、共感性と社会的迷惑の関連を検討し、他者の迷惑認知と共感性の直接的及び間接的な影響をとらえる。なお本研究では、共感性のうち特に他者志向的な共感性因子である共感的関心と視点取得をとりあげる。

第2節 方法

調査協力者

京阪神圏に住む大学生・大学院生を対象に質問紙調査を依頼し、回答に不備があったもの、国外出身者等を除いた409名を調査対象とした。また普段の電車の利用頻度についてたずね(ほとんど毎日/週に2, 3日/月に数日/ほとんど使用しない)、電車をほとんど利用しないと答えた67名を除いた342名(18~24歳, 平均年齢19.62歳, $SD = 1.51$)を分析対象とした。男性145名(平均年齢19.93歳, $SD = 1.59$), 女性197名(平均年齢19.39歳, $SD = 1.40$)である。

実施方法

大学の講義開始前あるいは終了後に無記名式の質問紙を配布し、集団的に実施、回収が行われた。その他、知人を介して、個別に質問紙を配布、回収を行った。また、社会的迷惑行動頻度において、同性友人がいる状況を想定させる質問紙A [集団状況], 見知った人がいない状況を想定する質問紙B [個状況] の、2種類の質問紙を用意し、調査協力者に無作為に振り分けた。質問紙Aには176名(男性73名, 女性103名), 質問紙Bには166名(男性72名, 女性94名)が回答した。質問紙回収後, [集団状況] を1, [個状況] を0とするダミー変数を作成し, 分析に用いた。調査実施時期は2005年11月~2006年10月である。

実施内容

社会的迷惑 研究1で用いた社会的迷惑のうち、個状況では生じない「おしゃべり」を除く14の社会的迷惑を使用した。

社会的迷惑行動頻度 各社会的迷惑について、普段自分はどの程度の頻度でしているか回答するよう求めた。質問紙Aでは友人たちと一緒に電車に乗り込んだ場面を、質問紙Bでは一人で電車に乗り込み、周囲に知人が一人もいない場面を想定するよう求めた。回答形式は、「1：全くしたことがない」～「4：いつもする」の4段階である。

他者迷惑認知 その場に居合わせた自分以外の人が、各社会的迷惑に対して感じている不快や迷惑の程度を推測し、回答するよう求めた。回答形式は、「1：全く感じない」～「6：とても感じる」の6段階である。

共感性 登張 (2003)の多次元共感性質問紙を用いた。この尺度は、他者の状況や感情体験に対して自分も同じように感じ、他者志向の暖かい気持ちをもつ傾向である「共感的関心」13項目、他者の苦痛に対して、自分が不安になってしまい、他者の状況に対応した行動をとることができない傾向である「個人的苦痛」6項目、小説や映画などに登場する架空の他者に感情移入する傾向である「ファンタジー」6項目、他者の気持ちや状況を想像する傾向である「気持ちの想像」5項目の、4つの下位尺度からなる。本研究では、そのうち共感性の感情的側面にあたる「共感的関心」と認知的側面にあたる「気持ちの想像」を用いた。回答形式は、「1：全くあてはまらない」～「5：非常にあてはまる」の5段階である。

第3節 結果と考察

各変数の得点の算出

社会的迷惑 各状況における社会的迷惑行動頻度、他者迷惑認知について、それぞれ主成分分析を行った。14項目のうち、いずれにおいても因子負荷量が低かった不正乗車に関する1項目を削除した(Table 2-3)。残りの13項目を採用し、固有値の落ち込みから1因子とするのが適当であると判断された。これらの項目について、内的整合性を検討するために、Cronbachの α 係数を求めた。その結果、社会的迷惑行動頻度は、個状況で $\alpha = .66$ 、集団状況で $\alpha = .65$ とやや低かったが、分析には十分耐えうると判断された。これらの項目平均値を算出し、これを各状況の社会的迷惑行動頻度得点とした。また、他者迷惑認知は $\alpha = .82$ と十分な値を示し、これらの項目平均値を他者迷惑認知得点とした。社会的迷惑行動

Table 2-3 社会的迷惑行動の行動頻度、他者迷惑認知の主成分分析の結果

	行動頻度		他者迷惑認知
	集団状況	個状況	
2 降りる人より先に乗り込む	.44	.41	.57
3 かけ込み乗車	.13	.44	.42
4 携帯電話をマナーモードにしない	.27	.32	.55
5 空席の前に立つ	.40	.34	.55
6 大きな荷物で通路をふさぐ	.57	.64	.70
7 車内での飲食	.43	.34	.47
8 座席の占有	.59	.49	.66
9 乗降時に入り口付近で動かない	.65	.49	.65
10 満員電車のリュック	.50	.60	.49
11 ゴミの放置	.51	.25	.58
12 ヘッドホンステレオの音漏れ	.46	.51	.66
13 携帯電話の通話	.27	.47	.60
14 乗車時の割り込み	.41	.41	.62
削除 不正乗車	.18	.11	.30
寄与率	20.78	20.46	34.13

頻度得点が高いほど、普段社会的迷惑をする頻度が高く、他者迷惑認知得点が高いほど他者が感じている迷惑の程度を高く認知しているといえる。

共感性 共感的関心と気持ちの想像それぞれについて、項目平均値を求め、各得点とした。Cronbachの α 係数は、共感的関心 $\alpha = .87$ 、気持ちの想像 $\alpha = .74$ であり、内的整合性は十分であった。共感的関心得点が高いほど他者の情動体験、気持ちに対して他者志向的な関心を寄せる傾向が高く、気持ちの想像が高いほど他者の立場から物事をみる傾向が高いといえる。

共感的関心、気持ちの想像、他者迷惑認知、社会的迷惑行動頻度の各得点の男女別にみた平均値、SDを、Table 2-4に示した。分散分析により性差の検討を行った結果、共感的関心と気持ちの想像で有意な差がみられ、女性は男性よりも他者に共感的な関心を向ける傾向があり、他者の立場から物事を捉えようとする傾向が高いといえた。また集団状況での社会的迷惑行動頻度に有意差傾向がみられ、友人と一緒にいる集団状況では、男性は女性よりも社会的迷惑をよく行う傾向があると考えられた。

各変数間の相関係数

各変数間の相関係数を算出し、Table 2-5に示した。男女ともに、共感的関心と気持ちの想像は弱い正の相関がみられた。他者迷惑認知については、男性では共感的関心、気持ち

Table 2-4 男女別にみた各変数の基礎統計量と分散分析の結果

	男性		女性		F	
	M	SD	M	SD		
共感的関心	3.70	.57	3.86	.50	7.90 **	
気持ちの想像	3.15	.71	3.31	.65	4.64 *	
他者迷惑認知	4.85	.60	4.87	.55	.11 n.s.	
社会的迷惑行動頻度	集団状況	1.81	.36	1.73	.28	.64 n.s.
	個状況	1.77	.30	1.81	.33	2.87 †

注) 男性 $n = 145$ (集団 $n = 73$, 個 $n = 72$)** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$ 女性 $n = 197$ (集団 $n = 103$, 個 $n = 94$)

Table 2-5 男女ごとにみた各変数間の相関係数

		気持ちの想像	他者迷惑認知	社会的迷惑行動頻度	
				集団状況	個状況
男性	共感的関心	.36 ***	.34 ***	-.01	.01
	気持ちの想像		.19 *	-.03	-.21 †
	他者迷惑認知			-.19	-.26 *
女性	共感的関心	.46 ***	.12 †	-.04	-.19 †
	気持ちの想像		.06	-.10	-.11
	他者迷惑認知			-.21 *	-.14

注) 男性(集団 $n = 73$, 個人 $n = 72$) 女性(集団 $n = 103$, 個人 $n = 94$)*** $p < .001$ * $p < .05$ † $p < .10$

の想像はともに正の弱い相関を示し、共感性が高いほど他者迷惑認知が高かった。しかし女性では、共感的関心に正の有意傾向がみられるにとどまった。社会的迷惑行動頻度については、男性では個状況で他者迷惑認知と負の有意な相関が、気持ちの想像とは負の有意傾向がみられた。女性では集団状況で他者迷惑認知と負の相関がみられ、個状況では共感的関心と負の有意傾向がみられた。

階層的重回帰分析による社会的迷惑行動頻度の関連要因の検討

社会的迷惑行動頻度に影響を及ぼす要因と、共感性による他者迷惑認知の影響の違いを検討するため、状況、他者迷惑認知を独立変数、社会的迷惑行動頻度を従属変数、共感的関心、気持ちの想像を調整変数とする階層的重回帰分析を、Cohen et al. (2003)に従って行った。まず多重共線性を回避するため、全1次変数を男女別に平均値を0、SDを1に標準化し、分析に用いた。今回は、男女別に重回帰分析を行うため、男女別に標準化した。各独立変数の標準化された値の積を算出し、各交互作用項とした。状況、他者迷惑認知、共感的関心、気持ちの想像の1次項、及び各交互作用項を独立変数として男女別にステップワイズ法により投入し、変数選定を行なった。

男性 他者迷惑認知の主効果と、他者迷惑認知、共感的関心の1次の交互作用項のみが有意であった($R = .28, R^2 = .08$, 調整済 $R^2 = .06, p < .05$)。そのため、社会的迷惑行動頻度を従属変数、共感的関心、他者迷惑認知、及びこれらの交互作用項を独立変数とする階層的重回帰分析(強制投入法)を行なった。これは、独立変数を段階的に投入し、そのstepにおける決定係数 R^2 の変化量 ΔR^2 に対する F 値が有意である場合に、投入項は有意であると判断するものである。ここでは、第1stepに共感的関心と他者迷惑認知の主効果を、第2stepにこれらの交互作用項を投入した。その結果をTable 2-6に示した。第1stepにおいてのみ、 R^2 の有意な変化がみられ (step 1 $\Delta R^2 = .06, F(1, 142) = 4.33, p < .05$; step 2 $\Delta R^2 = .02, F(1, 141) = 3.33, n.s.$)、他者迷惑認知で負の有意な効果が示された($\beta = -.26, p < .01$)。このことから男性では、他者迷惑認知が高いほど社会的迷惑は抑制されると考えられる。共感性の高さと身近な他者の在・不在といった状況による違いは、社会的迷惑の抑制に影響するとはいえないという結果であった。また独立変数間に有意な相関がみられたが、VIFは2.00未満であり、多重共線性の影響はないと考えられた。

Table 2-6 社会的迷惑行動頻度を従属変数とする重回帰分析結果 (男性)

step	1		2	
	B	β	B	β
共感的関心	.09	.09	.06	.06
他者迷惑認知	-.25	-.26 **	-.22	-.22 *
他者迷惑認知×共感的関心			.15	.15
R	.24		.28	
R^2	.06		.08	
調整済み R^2	.04 *		.06	

** $p < .01$ * $p < .05$

女性 ステップワイズによる重回帰分析の結果、他者迷惑認知の主効果のみが有意であった($R = .18, R^2 = .03$, 調整済 $R^2 = .03, \Delta R^2 = .03, F(1, 195) = 6.28, p < .05$)。その結果をTable 2-7に示した。他者迷惑認知は社会的迷惑行動頻度に負の影響を与えており($\beta = -.18, p < .05$)、女性においても他者迷惑認知が高いほど社会的迷惑は抑制されるが、共感性の高さは社会的迷惑に影響するとはいえない。また、身近な他者の在・不在によっても社会的迷惑行動頻度は異なり、周囲に身近な他者がいない場合、身近な他者がいる時よりも社会的迷惑の頻度が高くなるといえる。

以上の結果は、共感性は公共場面における社会的迷惑に影響を与えるとはいえないことを示している。これは、公共場面で生じる社会的迷惑は共感性(他者への思いやり)の欠如

Table 2-7 社会的迷惑行動頻度を従属変数とする重回帰分析結果（女性）

step	1	
	<i>B</i>	β
他者迷惑認知	-.18	-.18 *
<i>R</i>	.18	
<i>R</i> ²	.03	
調整済み <i>R</i> ²	.03 *	

* $p < .05$

からくるとする一般的見解を支持するものではなく、社会的迷惑は共感性とは別の個人特性や状況の影響を強く受けるとする戸田(2006)の推測を裏付ける結果であるといえるだろう。また小池(2004)、小池・吉田(2005)の共感性が高い人は相手の迷惑認知に敏感に反応して行動を制御するという結果は、共感性と他者迷惑認知には交互作用があることを示唆しているが、本研究では有意な交互作用は認められず、共感性の高低によって、他者の迷惑への気づきが社会的迷惑を抑制する効果に違いがあるとはいえなかった。

また、身近な他者の在・不在による影響については、女性でのみ有意な結果が得られ、周囲に身近な他者がいることで社会的迷惑が抑制されると考えられた。この結果は、公共場で社会的迷惑が生じるのは身近な他者による監視の目がないことによるとする吉田他(1999)の指摘を一部支持するものであった。

また女性でのみ状況による違いがみられたが、その原因として男性と女性の志向性の違いがあると考えられる。発達心理学や人格心理学では、男性が「個の確立」を重視するのに対し、女性は「関係性の維持」を重視するという、方向性の違いがあることが指摘されている。例えば Gilligan(1982)は、男性と女性の道徳性は質的に異なっており、男性の道徳性が分離志向の強い「正義の道徳」であるのに対し、女性の道徳性は関係性志向の強い「配慮と責任の道徳」であるとしている。また伊藤(1993, 1998)は、男性は個人志向性優位であり、女性は社会志向性優位であるとしている。つまり、女性が身近な他者との関係を良好に保つために、今回とりあげた一般に迷惑であるとされる行動を抑制するのに対し、男性は他者との関係の維持よりも自らの判断によって行動を制御するために、このような違いがみられたと考えられる。

第6章 他者の迷惑認知と自己のネガティブ評価による社会的迷惑の抑制効果 (研究3)

第1節 研究3の目的

研究2において、他者の迷惑認知は社会的迷惑行動頻度に有意な影響を与えていることが示された。しかし、その影響はごく弱いものであった。高木(2006)は、自己の迷惑認知と他者の迷惑認知が公共場面における社会的迷惑に与える影響を検討し、自己の迷惑認知は社会的迷惑を抑制するが、他者迷惑認知は関連がみられないか、ごく弱い正の影響がみられるに止まることを示している。これは、たとえ社会的には迷惑だとわかっている、個人的な評価がその社会的迷惑の評価に優先される可能性を示唆している。そこで研究3では、他者の迷惑認知と自己のネガティブ評価が社会的迷惑に与える影響について検討する。

また今回は、他者の迷惑認知と個人のネガティブ認知の調整要因として、自意識特性を取り上げる。自意識特性の調整効果については出口(2004)が検討しているが、状況による影響は考慮されておらず、状況ごとの公的自意識、私的自意識の影響の違いについても明らかにする必要がある。そこで本研究では、Figure 2-3 に示すモデルを設定し、検証する。

公共空間の特徴をふまえると、他者からの評価が考慮される集団状況では、ネガティブな評価を回避しようとするため、他者迷惑認知が高いほど社会的迷惑は抑制されると考えられる。これに対して、他者からの評価が考慮されない個状況では、ネガティブな評価は回避される必要はなく、他者迷惑認知の高い行動であっても起こりやすいだろう。このような個状況では、社会全体の基準である他者迷惑認知より、自分にとって不快であるかどうかという個人の基準の方が社会的迷惑の抑制に影響しやすいと考えられる。自意識特性による調整効果については、まず、公的自意識の高い人では他者迷惑認知は社会的迷惑を

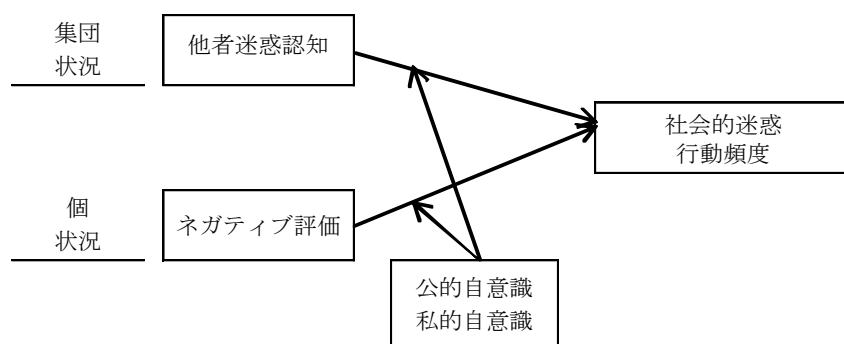


Figure 2-3 社会的迷惑の抑制モデル

抑制するが、公的自意識の低い人では他者迷惑認知は行動に影響しないと考えられる。また、私的自意識の高い人では他者迷惑認知とネガティブ評価は社会的迷惑を抑制するが、私的自意識の低い人では他者迷惑認知、ネガティブ評価はともに行動には影響しないと考えられる。この社会的迷惑抑制モデルを検討することで、集団状況と個状況での自他の行動評価が行動に与える影響と自意識特性による間接的な影響について明らかにすることを研究3の目的とする。

第2節 方法

調査協力者

京阪神圏に住む大学生・大学院生を対象に無記名の質問紙調査を行った。欠損値のない18～24歳の409名を有効回答とした。普段の電車の利用頻度についてたずね（ほとんど毎日／週に2, 3日／月に数日／ほとんど使用しない）、電車をほとんど利用しないと答えた67名を除いた342名（18～24歳、平均年齢19.62歳、 $SD = 1.51$ ）を分析対象とした。男性145名（平均年齢19.93歳、 $SD = 1.59$ ）、女性197名（平均年齢19.39歳、 $SD = 1.40$ ）である。

実施方法

研究2と同様に、調査協力者には質問紙A〔集団状況〕、B〔個状況〕の2種類の質問紙が無作為に割り当てられ、質問紙Aには176名（男性73名、女性103名）、質問紙Bには166名（男性72名、女性94名）が回答した。大学の講義開始前あるいは終了後に質問紙を配布し、集団的に実施、回収が行われた。その他、知人を介して、個別に質問紙を配布、回収を行った。調査実施時期は2005年11月～2006年10月である。

実施内容

状況の設定 周囲に身近な他者がいるかいないかという状況による違いが及ぼす影響をみるために、社会的迷惑行動頻度の質問において、質問紙A〔集団状況〕では同性友人がいる状況を、質問紙B〔個状況〕では見知った人がいない状況を想定するよう設定した。〔集団状況〕を1、〔個状況〕を0とするダミー変数を作成し、分析に用いた。その他の質問についてはA、Bとも共通である。

社会的迷惑 研究1で用いた15の社会的迷惑のうち、不正乗車とおしゃべりを除く13項目について、社会的迷惑行動頻度と他者迷惑認知についてたずねた。

社会的迷惑行動頻度 各社会的迷惑について、普段自分はどの程度の頻度でしているか、

「1：全くしたことがない」～「4：いつもする」の4段階で回答するよう求めた。質問紙 A では友人たちと一緒に電車に乗り込んだ場面を、質問紙 B では一人で電車に乗り込み、周囲に知人が一人もいない場面を想定するよう設定した。

他者迷惑認知 その場に居合わせた自分以外の人が、各社会的迷惑に対して感じている不快や迷惑の程度を推測し、「1：全く感じない」～「6：とても感じる」の6段階で回答するよう求めた。

自己のネガティブ評価 各社会的迷惑について、自分ほどの程度みっともないと感じるかを、「1：全く感じない」～「6：とても感じる」の6段階で回答するよう求めた。

自意識特性 Fenigstein, Scheier, & Buss (1975)の自意識尺度を参考に作成された、菅原 (1984)の自意識尺度 (21 項目)を用いた。「公的自意識」(11 項目)、「私的自意識」(10 項目)の2つの下位尺度からなる。公的自意識は、自己の外的、対人的側面に注意を向ける程度を測定し、私的自意識は自分の内面に注意を向ける程度を測定する。「1：全くあてはまらない」～「7：非常にあてはまる」の7段階で回答するよう求めた。

第3節 結果

各変数の得点の算出

社会的迷惑 各社会的迷惑行動頻度、他者迷惑認知、ネガティブ評価について、Cronbachの α 係数を算出した。その結果、集団状況の社会的迷惑行動頻度.65、個状況の社会的迷惑行動頻度.66、他者迷惑認知.82、ネガティブ評価.83であった。社会的迷惑行動頻度、他者迷惑認知、ネガティブ評価の項目平均値を求め、各得点として用いた。

自意識特性 公的自意識と私的自意識それぞれについて、項目平均値を求め、各得点とした。 α 係数は、公的自意識で $\alpha = .89$ 、私的自意識で $\alpha = .86$ であった。

各変数の平均値、SDと分散分析結果

状況別にみた各変数の平均値、SDと、状況の平均値差の分散分析結果を Table 2-8 に示した。いずれも状況による有意な差は見られなかった。

状況別にみた各変数間の相関係数

各変数間の相関係数を、状況別に Table 2-9 に示した。両状況でほぼ同様の相関がみられ、社会的迷惑行動頻度と他者迷惑認知、ネガティブ評価に弱い負の相関が、公的自意識と私的自意識に弱い正の相関がみられた。他者迷惑認知とネガティブ評価には強い正の相関がみられ、個人的な評価と社会的影響性の評価は類似した傾向を持つと考えられた。また、

Table 2-8 状況別にみた各変数の基礎統計量と分散分析の結果

	集団状況		個状況		F
	平均	SD	平均	SD	
他者迷惑認知	4.82	.59	4.91	.55	2.00 <i>n.s.</i>
ネガティブ評価	4.50	.73	4.52	.68	.03 <i>n.s.</i>
社会的迷惑行動頻度	1.76	.32	1.80	.32	1.08 <i>n.s.</i>
公的自意識	5.25	.86	5.24	.71	.00 <i>n.s.</i>
私的自意識	4.94	.89	4.99	.84	.29 <i>n.s.</i>

注) 集団状況 $n = 176$, 個状況 $n = 166$

Table 2-9 各変数間の相関係数

	社会的迷惑 行動頻度	他者迷惑認知	ネガティブ評価	公的自意識	私的自意識
社会的迷惑行動頻度		-.20 **	-.28 ***	-.06	-.02
他者迷惑認知	-.19 **		.64 ***	.04	.11
ネガティブ評価	-.26 ***	.70 ***		-.13 *	.06
公的自意識	.04	.03	.04		.19 **
私的自意識	-.08	.00	.02	.37 ***	

注) 右上: 集団状況 $n = 176$, 左下: 個状況 $n = 166$ *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

集団状況でのみ公的自意識とネガティブ評価に負の相関がみられたが、ごく弱いものであった。

階層的重回帰分析による社会的迷惑行動頻度の関連要因と自意識による調整効果の検討

他者迷惑認知, ネガティブ評価, 公的自意識, 私的自意識を独立変数, 社会的迷惑行動頻度を従属変数とする階層的重回帰分析を, Cohen et al. (2003)に従って行った。まず多重共線性を回避するため, 全1次変数を状況別に平均値を0, SDを1に標準化し, 分析に用いた。今回は, 状況ごとに重回帰分析を行うため, 状況別に標準化した。他者迷惑認知と公的自意識, 私的自意識の積, 及びネガティブ評価と公的自意識, 私的自意識の積を算出し, 各交互作用項とした。他者迷惑認知, ネガティブ評価, 公的自意識, 私的自意識の1次項, 及び各交互作用項を独立変数として状況別にステップワイズ法により投入し, 変数選定を行なった。その結果, 両状況とも, ネガティブ評価の主効果と, 他者迷惑認知, 公的自意識, 私的自意識の2次交互作用項のみが有意であった(集団状況 $R = .33, R^2 = .11$, 調整済 $R^2 = .10, p < .05$, 個状況 $R = .36, R^2 = .13$, 調整済 $R^2 = .12, p < .01$)。集団状況ではネガティブ評価($\beta = -.28, p < .001$), 2次交互作用項($\beta = -.18, p < .05$)の順に, 個状況では2次交互作用項($\beta = -.26, p < .01$), ネガティブ評価($\beta = -.20, p < .01$)の順に投入された。

このことから次に, 社会的迷惑行動頻度を従属変数, 他者迷惑認知, ネガティブ評価,

公的自意識, 私的自意識, 及び, 他者迷惑認知と公的自意識, 私的自意識の交互作用項を独立変数とする階層的重回帰分析を, 状況別に行った。ステップワイズ法による重回帰分析の際, 状況ごとに変数の投入順に違いがみられたことから, 階層重回帰分析では状況ごとに投入順を変更した。集団状況では, 第1 step にネガティブ評価, 第2 step に他者迷惑認知, 公的自意識, 私的自意識, 第3 step に他者迷惑認知, 公的自意識, 私的自意識の1次交互作用項, 第4 step に2次交互作用項を投入した。個状況では, 第1 step に他者迷惑認知, 公的自意識, 私的自意識, 第2 step は他者迷惑認知, 公的自意識, 私的自意識の1次交互作用項, 第3 step は2次交互作用項, 第4 step にネガティブ評価を投入した。また, 2次交互作用項に含まれる要因の主効果, 1次交互作用項が除外されるのを避けるため, 全step で強制投入法を用いた。なお, 多重共線性の指標である VIF はいずれも 2.50 未満であり, 多重共線性の影響はないと判断した。

集団状況 集団状況における重回帰分析の結果を, Table 2-10 に示した。有意であったのは第1 step のみであり, それ以降の step では R^2 に有意な変化は見られなかった(step 1 $\Delta R^2 = .08, F(1, 174) = 15.20, p < .001$; step 2 $\Delta R^2 = .01, F(3, 171) = .65, n.s.$; step 3 $\Delta R^2 = .02, F(3, 168) = .98, n.s.$; step 4 $\Delta R^2 = .01, F(1, 167) = 2.33, n.s.$)。ネガティブ評価は有意な負の影響を示し($\beta = -.28, p < .001$), ネガティブ評価が高いほど行動は抑制されることが示された。

Table 2-10 集団状況における社会的迷惑行動頻度を従属変数とする重回帰分析結果 (強制投入法)

step	1		2		3		4	
	B	β	B	β	B	β	B	β
ネガティブ評価	-.28	-.28 ***	-.29	-.29 **	-.29	-.29 **	-.29	-.29 **
他者迷惑認知			-.02	-.02	-.04	-.04	-.02	-.02
公的自意識			-.10	-.10	-.07	-.07	-.05	-.05
私的自意識			.02	.02	.00	.00	.01	.01
他者迷惑認知×公的自意識					-.08	-.09	.01	.01
他者迷惑認知×私的自意識					.11	.10	.07	.06
公的自意識×私的自意識					.00	.00	.03	.04
他者迷惑認知×公的自意識×私的自意識							-.11	-.17
R	.28		.30		.33		.34	
R^2	.08		.09		.11		.12	
調整済み R^2	.08	***	.07		.07		.08	

*** $p < .001$ ** $p < .01$

個状況 個状況における重回帰分析の結果を, Table 2-11 に示した。第1 step, 第3 step, 第4 step で R^2 の変化量が有意であった (step 1 $\Delta R^2 = .05, F(3, 162) = 2.76, p < .05$; step 2 ΔR^2

Table 2-11 個状況における社会的迷惑行動頻度を従属変数とする重回帰分析結果（強制投入法）

モデル	1		2		3		4	
	B	β	B	β	B	β	B	β
他者迷惑認知	-.20	-.20 *	-.20	-.20 *	-.12	-.12	.05	.05
公的自意識	.08	.08	.09	.09	.05	.05	.05	.05
私的自意識	-.11	-.11	-.12	-.12	-.12	-.12	-.12	-.12
他者迷惑認知×公的自意識			.07	.07	.09	.09	.08	.08
他者迷惑認知×私的自意識			-.09	-.10	-.03	-.03	-.05	-.06
公的自意識×私的自意識			.05	.06	.08	.10	.07	.09
他者迷惑認知×公的自意識×私的自意識					-.24	-.28 **	-.23	-.27 **
ネガティブ評価							-.24	-.24 *
R	.22		.25		.36		.39	
R ²	.05		.06		.13		.15	
調整済み R ²	.03 *		.03		.09 **		.11 *	

** $p < .01$ * $p < .05$

= .01, $F(3, 159) = .74, n.s.$; step 3 $\Delta R^2 = .07, F(1, 158) = 11.82, p < .01$; step 4 $\Delta R^2 = .03, F(1, 157) = 5.06, p < .05$ 。標準化係数では、ネガティブ評価が有意な負の影響を示し ($\beta = -.24, p < .05$)、ネガティブ評価が高いほど行動は抑制されることが示された。また他者迷惑認知・公的自意識・私的自意識の交互作用が有意であった ($\beta = -.27, p < .01$) ことから、公的自意識と私的自意識の高低によって、他者迷惑認知が社会的迷惑行動頻度に及ぼす影響は異なると考えられた。そこで、Cohen et al. (2003)に従って、公的自意識と私的自意識がそれぞれ平均値±1SDの値をとるときの他者迷惑認知の単回帰直線を求めた。公的自意識と私的自意識が共に+1SDの値をとる群を公的自意識高・私的自意識高群(公H*私H)、公的自意識が+1SD、私的自意識が-1SDの値をとる群を公的自意識高・私的自意識低群(公H*私L)、公的自意識が-1SD、私的自意識が+1SDの値をとる群を公的自意識低・私的自意識高群(公L*私H)公的自意識と私的自意識が共に-1SDの値をとる群を公的自意識低・私的自意識低群(公L*私L)として、各群における他者迷惑認知と一般許容度の単回帰直線を図示した(Figure 2-4)。

その結果、公的自意識高・私的自意識高群($\beta = -.29, p < .05$)、公的自意識低・私的自意識低群($\beta = -.41, p < .01$)では、他者迷惑認知の有意な影響がみられ、他者迷惑認知が高いほど行動は抑制されることが示された。一方で、公的自意識高・私的自意識低群($\beta = .23, n.s.$)、公的自意識低・私的自意識高群($\beta = .01, n.s.$)では有意な影響はみられず、他者迷惑認知が行動を抑制するとはいえなかった。また、公的自意識の単純傾斜を算出した結果、他者迷惑

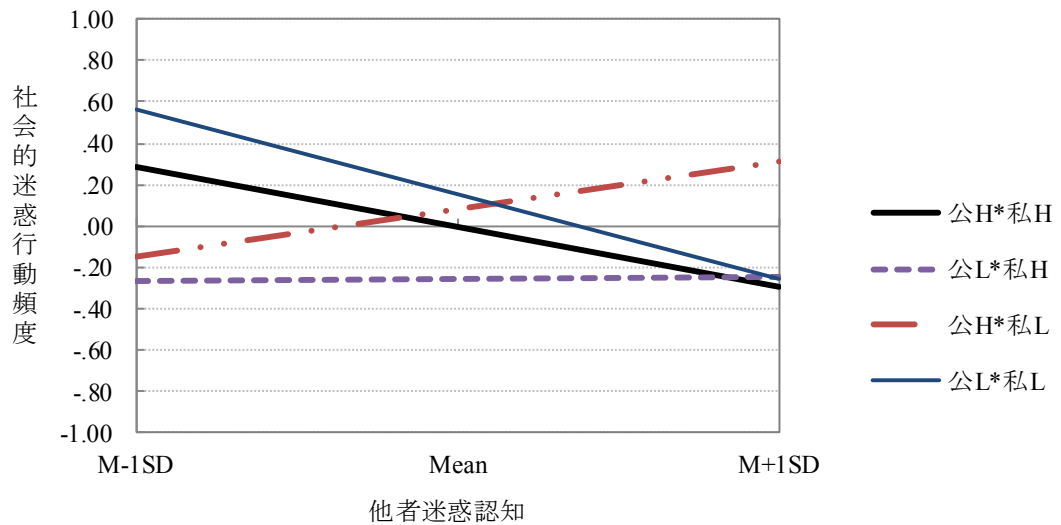


Figure 2-4 公的・私的自意識高低4群ごとにみた他者迷惑認知の単回帰直線(個状況)

認知低・私的自意識高群($\beta = .28, p < .05$), 他者迷惑認知高・私的自意識低群($\beta = .28, p < .05$)では公的自意識が低いほど, また他者迷惑認知低・私的自意識低群($\beta = -.36, p < .05$)では公的自意識が高いほど社会的迷惑は抑制されたが, 他者迷惑認知高・私的自意識高群($\beta = -.02, n.s.$)では有意な影響は見られなかった。同様に私的自意識の単純傾斜を算出した結果, 他者迷惑認知高・公的自意識高群($\beta = -.30, p < .05$), 他者迷惑認知低・公的自意識低群 ($\beta = -.42, p < .05$) では私的自意識が高いほど社会的迷惑は抑制されていたが, 社会的迷惑低・公的自意識高群($\beta = .22, n.s.$), 社会的迷惑高・公的自意識低群 ($\beta = .01, n.s.$)では私的自意識による有意な影響は見られなかった。

第4節 考察

状況による社会的迷惑抑制要因の違い

集団—個状況の2状況ごとで重回帰分析を行った。その結果, 自己のネガティブ評価は両状況で, 他者迷惑認知は個状況のみで社会的迷惑を抑制していた。これは, 青年は集団になると社会考慮の態度は行動には反映されないことを示唆している。高木・村田(2005)は, 仲間集団の中では適応の手段として社会的迷惑が用いられるとして, 青年の社会的迷惑の偽悪的な側面を指摘しているが, 今回の結果はその指摘に符合するものといえるだろう。しかし, 集団状況と個状況では社会的迷惑の頻度に有意な差はなく, 必ずしも集団状況で集団を形成することで社会的迷惑が引き起こされる(矢守・高田, 1998; 高木・村田,

2005)とはいえなかった。集団状況ではネガティブ評価が社会的迷惑を抑制しており、集団であっても自分がみっともないと感じる場合には、社会的迷惑は抑制されるといえる。またネガティブ評価は個状況でも社会的迷惑を抑制していたが、その効果は他者迷惑認知よりも弱く、一人でいる場合には個人的基準よりも社会的基準が優先されると考えられる。しかし、一人でいる場合には周囲の迷惑を考慮した行動をとると考えられ、個々の青年は良心的であるといえるだろう。この結果は、青年の社会的迷惑は必ずしも個々の青年の問題としてだけ扱うことはできないことを示している。

しかし、他者迷惑認知と社会的迷惑の関連には公的自意識と私的自意識による調整効果が見られ、他者迷惑認知による社会的迷惑の抑制効果は限定的なものであると考えられる。このことから、以下に個状況における他者迷惑認知の社会的迷惑抑制効果について詳しくみていく。

他者迷惑認知の社会的迷惑抑制と公的自意識、私的自意識による調整効果

まず、公的自意識と私的自意識がともに高い、またはともに低い人では、他者迷惑認知が社会的迷惑を抑制していることが示された。これは逆にいうと、影響性が低いと認知される場合には社会的迷惑は高い頻度でおこることを示している。公的自意識と私的自意識の単純傾斜の結果からは、他者迷惑認知が低い場合、公的自意識と私的自意識がともに低い人は公的自意識が低く私的自意識が高い人と公的自意識が高く私的自意識が低い人よりも、また公的自意識と私的自意識がともに高い人は公的自意識が低く私的自意識が高い人よりも社会的迷惑の頻度が有意に高くなっている。つまり、これらの群の人々においては、社会的迷惑を抑制するためには、いかに他者迷惑認知を高めるかが課題であるといえる。

次に、公的自意識が低く私的自意識が高い人では、他者迷惑認知は社会的迷惑に影響するとはいえなかった。しかしこの群の社会的迷惑の頻度をみると、他者迷惑認知の高さに関わらず、一貫して社会的迷惑の頻度が低いことがわかる。この群に属する人々は、自分の意見や態度に注目しやすく周囲の状況や評価に左右される傾向が低いいため、社会的な影響性の高さよりも自分の評価を中心に行動を制御すると考えられる。そのため、社会的基準である他者迷惑認知による行動抑制効果がみられなかったと考えられ、他者迷惑認知が高まっても低まっても社会的迷惑に大きな影響はないといえる。

以上 3 群の結果は、出口(2004)の結果に一致するものである。しかし公的自意識が高く私的自意識が低い人では他者迷惑認知は社会的迷惑に影響するとはいえず、この群についてのみ異なる結果が得られた。これらの人々は、自分の態度に注目する傾向が低く周囲の

状況に影響されやすいと考えられるが、特に他者迷惑認知が高い場合に注目すると、公的自意識が高く私的自意識が低い人は他の3群よりも有意に社会的迷惑の頻度が高い。これは、公的自意識が高い場合には他者迷惑認知は行動を抑制するとする予測に反する結果である。また他者迷惑認知が高い場合、私的自意識が高い、もしくは公的自意識が低ければ社会的迷惑行動頻度は一貫して低いという結果であった。これはつまり、他者迷惑認知が高い場合、私的自意識が高いこと、公的自意識が低いことは行動の抑止力になることを示している。

このような予測に反する結果が得られた理由として、公的自意識が高い人は他者からの評価を気にする傾向が高いが、個状況では周囲に関係のある他者がいないために他者迷惑認知の高い行動をしても個人評価の低下にはつながらないという状況判断によるのかもしれない。また社会的影響性の認知である他者迷惑認知の他にも、いろいろな周囲の状況による影響をうけるため、他者迷惑認知が行動制御に占める割合が低いのかもかもしれない。一方で、たとえ公的自意識が高くても、私的自意識が高い場合には、社会考慮など自分の態度が注目され、ブレーキとしての他者迷惑認知が作用している可能性がある。

また私的自意識が高い場合、他者迷惑認知は社会的迷惑を抑制すると予測されたが、公的自意識の高低によってその効果は異なっていた。他者迷惑認知の高さに関わらず社会的迷惑の頻度が低いという結果は、他者迷惑認知に限らず、ルールや規範意識との関連による影響とも考えられる。本研究では規範意識については検討しておらず推測にとどまるが、私的自意識と規範意識との関連などについても検討する必要があるだろう。

第7章 第2部の総合的考察

研究2, 3から、他者が迷惑していると気づくことで、社会的迷惑は抑制されることが示唆された。この結果から、社会的迷惑にあたる行動をすると他者の迷惑になるという認知を強めることによって社会的迷惑を抑制する効果がまずは期待される。公共場面の社会的迷惑の背景には、他者が迷惑を感じていること自体に遂行者が気づいていないこと、あるいは迷惑を低く見積もっていることが原因の一つであると考えられ、他者が受ける迷惑への気づきを喚起することが必要である。本研究でとりあげた社会的迷惑については、駅や車内にあるマナー改善を呼びかけるポスターはもちろん、新聞の投書やテレビといったメディアでも、迷惑や批判の声を知ることができる。これは、大学生といった青年を含め、多くの人々に何が一般に迷惑であると考えられているかという共通認識をもたらすだろう。

また研究1においては、いくつかの社会的迷惑で、見知らぬ他者よりも身近な他者との間に生じる他者迷惑認知は低く認知されるという結果が得られ、同じ行動であっても、他者との関係性によって、他者迷惑認知の程度が異なることが示唆された。身近な他者がいる場合、意識は身近な他者に向けられ、見知らぬ他者には意識が向きにくくなる。そのため、自分ないし身近な他者の行動が周囲にもたらす影響そのものが、身近な他者がいない場合に比べて低く認知され、結果として社会的迷惑の抑制力が弱くなり、行動が生じやすくなると考えられる。その一方で、これらの見知らぬ他者による社会的迷惑は、周囲の他者により大きな迷惑を感じさせるだろう。この場合、身近な他者がいる場面では、身近な他者がいない場面よりも社会的迷惑の頻度が高くなると考えられる。しかし、研究3では集団状況と個状況の間に社会的迷惑の行動頻度の差は認められなかった。また、社会的迷惑行動頻度の状況、性別、年代による差を検討した谷(2007)においても、状況によって行動頻度に差がみられた社会的迷惑はわずかであった。これは、状況によって異なる要因が相補的に社会的迷惑に影響するためと考えられる。

研究2では社会的迷惑の抑制要因として他者への思いやりの態度である共感性の影響を検討したが、有意な影響はみられず、共感性が高い人は社会的迷惑の頻度が低いとする小池(2004)らの指摘には一致しなかった。その理由として、社会的迷惑の種類の違いがあげられる。小池(2004)らが検討した対人的社会的迷惑は、借金、時間を気にせず電話をかけるといった特定の受け手がいる社会的迷惑である。一方、本研究で用いた公共場面における社会的迷惑は、特定の受け手が存在しない行動であるといえる。このような行動の性質

の違いが、共感性による影響の違いを生じさせたと考えられる。また澤田(1992)は、日本社会では、家族、友人などの「ウチ」の人間に対しては容易に共感することができるが、見知らぬ他者である「ソト」の人間に対しては共感することが困難であるとしている。本研究では、身近な他者ではなく広い一般的他者の迷惑認知による効果を検討しており、そのために共感性が作用しにくかったことが考えられる。また研究1では、他者との関係性によって迷惑の認知に差があることが示されており、一般的他者から期待される行動と身近な他者から期待される行動は異なることが推測される。身近な他者がいる場面では、身近な他者の期待する行動にあわせた行動が求められるだろう。今後、それぞれの場面で期待されるだろう行動の違い、特に他者の迷惑認知と身近な他者からの期待との違いを考慮することが必要だろう。

また、研究2, 3 でみられた他者の迷惑認知の影響は弱いものであり、状況によって抑制効果に違いがみられるなど、限定的なものであった。研究3では、集団状況では他者の迷惑認知には有意な抑制効果がみられず、「迷惑だとわかっているけどもする」という態度が示された。最も問題であると考えられたのは、他者迷惑認知が高くても社会的迷惑をするという結果の得られた公的自意識が高く私的自意識が低い人々について、いかに社会的迷惑を抑制するかという点である。公的自意識が高いことが社会的迷惑抑制を妨げるのだとすれば、周囲の状況に左右されやすい人々であるといえる。状況認識を変えるよう働きかけをすることも有効かもしれない。本研究では集団一個状況というあくまで外的な要因として状況を取り上げており、個々の人々がその状況に対して持つ認識については検討していない。状況認識が社会的迷惑に与える影響については、第4部で検討を行う。

一方、状況に関わらず社会的迷惑を抑制するという意味で、社会的迷惑に対する自己のネガティブ評価は、他者迷惑認知以上に社会的迷惑抑制に効果的であるといえる。特に集団状況では、他者迷惑認知に代わる抑制要因として重要である。現代の青年は、上の年代に比べ、社会的迷惑に対するネガティブな評価が低いことが指摘されているが(谷, 2007), 「迷惑であるといわれているから迷惑なのであろう」という理解にとどまる場合、実際の社会的迷惑の抑制には結びついていないことが考えられる。このことから、社会的迷惑を嫌なもの、不快なものであるとする実感を高めるよう働きかける必要があるだろう。

第3部 遂行者の立場からみた社会的迷惑

第8章 遂行者の立場からみた社会的迷惑の抑制に関する理論的検討

規範やルールから外れた行動をしたとき、人々は後ろめたさを感じたり、他者の目を意識して恥じらいを感じたりする。同様に、社会的迷惑の遂行者である自己をモニタリングすることは、自己またはその行動に対する評価を意識させる。また、迷惑や不快といった負の評価は、後ろめたさや恥じらい等の苦痛な情動を伴うため、このような情動の喚起が予測されるかどうかは、行動制御に影響を及ぼすと考えられる。第3部では、社会的迷惑をする側(遂行者)の立場からみた社会的迷惑の抑制について検討する。ここでは、違反者である自己を対象として客観視し、意識化することによって喚起される罪悪感と恥意識に焦点をあてる。

第1節 罪悪感と恥意識

罪悪感と恥意識は、自己を対象としてモニタリングし、それが他者や社会からの評価にからむときに生じる自意識的感情である(遠藤, 2009)。これらの感情は集団や社会への適応が問われる危機的場面で生じやすく(薊, 2008)、恥意識と罪悪感を予期することによって、それを喚起させるような逸脱行動や不適応行動を抑制する効果があると考えられる。

まず罪悪感とは、後悔、良心の呵責、“悪いことをしてしまった”ことへの失望を意味する(Tangney, 1995)感情であり、罪悪感が生じるためには、「何が悪いのか」が内面化されていることが前提になるといえる。罪悪感は道徳的逸脱によって生じ、必ずしも他者の存在を必要としない私的な感情であり(薊, 2008)、実際に規範に背かずとも、それを欲するだけでも喚起されるとする見方もある(e.g. 横田, 1999)。このように罪悪感には、社会的行動を制御し、謝罪や補償行動を生じさせる、規範準拠機能および個人と対人間に役立つ機能(有光, 2001a)があると考えられる。その反面、石川・内山(2002)は、青年では罪悪感が適切に喚起されておらず、それが社会場面での青年の反社会的行動が増加している原因の一つであると指摘している。このことから、青年に罪悪感をいかに喚起させるかが逸脱や問題行動に対処する上での課題の一つであるといえる。

また恥意識は、他者の存在を前提とした公的な感情であり(薊, 2008)、重要な他者への適合の失敗によって喚起される(Keltner & Buswell, 1996)。罪悪感が内的な基準からの逸脱に

よって喚起されるのに対し、恥意識は仲間集団等の外的な基準に逸脱した際に喚起されると考えられる。Benedict (1946, 長谷川訳, 1972)は、欧米の文化を罪の文化、日本の文化を恥の文化と呼び、日本では罪悪感よりも恥意識が行動制御の基盤として重要であるとしている。また井上(1977)は、日本人の社会規範は世間に準拠して恥ずかしくない行動をすることを基本としており、「世間の物笑いにならぬ」よう世間と自分の間に生じるずれを微調整しながら生きてきたとしている。このように恥意識は、日本人の公共空間における行動制御に密接に関連してきたと考えられる。

以上のように、罪悪感是自己を基準とする行動評価指標の1つであり、恥意識は他者を基準とする行動評価指標の1つであるといえる。また恥意識は強い苦痛を伴う感情であり、恥意識が喚起されると自己を無価値で非難されるべきものとして捉え、逃避行動を生じさせるとされる(薊, 2008)。罪悪感は、恥意識に比べると弱いものの、同様に苦痛を伴う情動反応であり、抑うつ・不安、対人不安、社会的活動障害と負の相関をもつことが示されている(有光, 2001a; 有光・今田, 1999)。そのため、恥意識や罪悪感を喚起するような行動は、その苦痛を回避するために抑制されると考えられる。このことから、恥意識、罪悪感は、問題行動の生起や抑制の過程を検討する上で欠かすことのできない重要な要因であるといえる。

第2節 罪悪感、恥意識と社会的迷惑の関連

日本において恥意識、罪悪感と社会的迷惑の関連を検討した研究では、社会的迷惑は罪悪感よりも恥意識と関連を示す結果が多く得られている。例えば松井(2004)は、日本、アメリカ、トルコの大学生の社会的迷惑に対する意識の比較研究を行い、社会的迷惑に対する意識はアメリカでは「悪い」という意識と関係が深いのに対し、日本の大学生では「恥ずかしい」という意識と深く関係していることを示している。また有光(2002b)は、恥意識、罪悪感と他害行動、犯罪行動、軽逸脱行動、向社会的行動との関連を検討している。それによると、罪悪感是他害行動や犯罪行動を抑制し、向社会的行動を促進するが、軽逸脱行動とは有意な関連はみられていない。恥意識については、性に関する恥意識が軽逸脱行動を抑制し、気恥ずかしさが向社会的行動を抑制するという結果が示されている。さらに菅原他(2006)は、公共空間での社会的迷惑に対して感じる恥意識、罪悪感と行動経験との関連を検討している。その結果、罪悪感では行動経験と有意な関連が認められなかったが、恥意識は社会的迷惑を抑制することが示されている。また中村(2010)は、自らを省みた時

に生じる自分恥，社会一般の常識やルールと一致しないときに生じる他人恥，仲間集団と自分の考えにずれがあるときに喚起される仲間恥について，社会的迷惑や逸脱行動との関連を検討。自分恥，他人恥と電車内での社会的迷惑に負の弱い相関がみられている。

その一方で，恥意識については，第1部で述べたような適応的な社会的迷惑を引き起こす原因になりうるとする指摘がある。例えば Tangney & Dearing(2002)は，罪悪感とは道徳的行動を促進するが，恥意識は逸脱行動を促進することを示している。また永房(2008)は，みんなと違うのは恥ずかしいから悪いとわかっているにもかかわらずやってしまうというように，恥意識は仲間への協調という形で違反行動を促進しうるとしている。以上のように，一概に恥意識と罪悪感とは社会的迷惑を抑制するとはいえず，社会的迷惑に及ぼす影響については一貫した知見が得られていないのが現状である。

第3節 状況による罪悪感，恥意識と社会的迷惑抑制効果の違い

以上のように，恥意識と罪悪感とは周囲の他者からの逸脱，不適応を示す指標であり，公共空間における行動制御に影響を及ぼすと考えられる。しかし，恥意識に着目すると，「旅の恥はかきすて」といわれるように，状況によって社会的迷惑に及ぼす影響が異なることが予測される。これは，恥意識は公的な感情であり，自己を評価する他者の存在を前提としているためである。ある場面での行動に対する身近な他者からのネガティブな評価は，その他の生活領域全般に影響するため，周囲に身近な他者がいる場合には社会適応的な行動が制御されるだろう。しかし見知らぬ他者は，その後深く関わることなく生活領域全般での評価者にはなりにくい。そのため，周囲に身近な他者がいない場合，見知らぬ他者がいたとしても行動が制御されにくいだろう。このように，恥意識の影響は他者からの評価に左右され，周囲に身近な他者がいる場合と，見知らぬ他者ばかりの中にいる場合とでは，社会的迷惑に対する影響は異なると考えられる。

これに対して罪悪感とは，他者の存在に左右されない私的な感情であることが示されている。そのため他者評価に左右されることは少なく，このような周囲の状況によって社会的迷惑に対する影響は比較的小さいと考えられる。以上のことを踏まえると，集団状況と個体状況では，罪悪感と恥意識はそれぞれ社会的迷惑の抑制に異なる効果を示すと考えられる。しかし，罪悪感と恥意識が社会的迷惑に及ぼす影響の状況による違いについては，これまで検討されておらず，検討が必要である。

第4節 第3部の目的

第3部では、社会的迷惑によって喚起される情動である罪悪感、恥意識を遂行者側からの行動評価指標としてとりあげる。また、これらの情動の喚起に関連する要因と、集団状況及び個状況における社会的迷惑の抑制効果について検討する。これによって、罪悪感と恥意識が社会的迷惑に及ぼす影響の状況による違いを明らかにし、社会的迷惑抑制のためのアプローチに示唆を得ることを本研究の目的とする。

第9章 罪悪感の喚起に関連する要因の検討(研究4)

第1節 本研究の目的

電車利用場面などの公共空間で起こる社会的迷惑は、法律などによって規定されるルールとは異なり、他者に直接危害を加えたり罰を伴ったりするわけではない、慣習的なマナーに属するものである。これらのマナーへの違反は、道徳的な善悪ではなく、慣習的、あるいは個人的な問題として捉えられることが多く、その基準や根拠は非常に曖昧である。そのため社会の中で共通認識を持ちにくく、一般的に各自の良識に任されるものであり、罪悪感が喚起されにくい行動であると考えられる。また石川・内山(2002)は、社会場面での青年の反社会的行動の増加の一因として罪悪感が適切に喚起していないことをあげており、社会的迷惑の抑制のためには、罪悪感が適切に喚起される必要がある。そこで研究4では、罪悪感の喚起に関わる要因として共感性、自意識特性をとりあげる。

1)共感性による影響

Hoffman(1998)は、罪悪感とは他者への配慮と他者視点から違反行動を捉えるという両側面が機能して喚起すると指摘している。このため、罪悪感と共感性の関係については多くの研究がなされ、正の相関関係を持つことが示されている(e.g. 有光, 2002a; 石川・内山, 2001, 2002; 藤吉・田中, 2006)。しかし、認知的共感性要因である役割取得能力と情動的共感性とでは、それが対人場面であるか規則場面であるかによって罪悪感との関連が異なることも指摘されている(石川・内山, 2002)。このことから、罪悪感と共感性の関連について検討する際には、罪悪感が喚起される状況と共感性の多次元性を考慮する必要があるといえる。

2)自意識特性による影響

自己への注意の高まりは、自己や他者が望ましいとする理想的な自己と現実の自己の比較を生じさせると考えられる。即ち、自己に注意が向かうことで社会的に望ましくない行動をする自己の姿に対する気づきが促進され、罪悪感が喚起されやすくなることが予想される。このような傾向の違いから、社会的迷惑や違反行動を行ったときに喚起される情動的反応が公的自意識と私的自意識の高低によって異なることが予想される。即ち、公的自意識の高い人は他者がそんな自分をどのように評価するかにより関心を持つのに対し、私的自意識の高い人は基準から逸脱した自分とその行動そのものにより感心を持つと考えられる。これは、公的自意識よりも私的自意識が高いほど自らの違反に対してより罪悪感を喚起しやすいことを示唆している。しかし、自意識的情動である罪悪感と自意識との関連

を検討した研究では、公的自意識と私的自意識のいずれも罪悪感と正の相関を持つことが示されている(e.g. 有光, 2001b, 2002, 2006; 有光・今田, 1999)。

以上のように、罪悪感と共感性、自意識特性との関連についてはすでに多くの先行研究において指摘されている。しかし、これらの研究の多くは対人場面や規則場面における罪悪感を扱ったものであり、慣習的で見知らぬ他者との間で問題になる社会的迷惑について検討したものはあまりみられない。このことから、罪悪感喚起に共感性、自意識特性が与える影響について検討し、これまでの知見と同じ結果がえられるかを検証する。

第2節 方法

調査協力者

京阪神圏に住む大学生・大学院生を対象に無記名の質問紙調査を行い、回答に不備のなかった341名(18～24歳、平均年齢19.62歳、 $SD = 1.51$)を分析対象とした。男性145名(平均年齢19.93歳、 $SD = 1.59$)、女性196名(平均年齢19.39歳、 $SD = 1.40$)である。

実施方法

大学の講義開始前あるいは終了後に質問紙を配布し、集団的に実施、回収が行われた。その他、知人を介して、個別に質問紙を配布、回収を行った。調査実施時期は2005年11月～2006年10月である。

実施内容

社会的迷惑 研究2で用いた電車利用場面における社会的迷惑15項目を使用した。

罪悪感 各社会的迷惑について、それらの行動を自分が行った場合にどの程度後ろめたいと感じるかをたずねた。「1：全く感じない」～「6：とても感じる」の6段階で回答するよう求めた。

共感性 登張 (2003)の多次元共感性質問紙をもちいた。「共感的関心」13項目、「個人的苦痛」6項目、「ファンタジー」6項目、「気持ちの想像」5項目である。「1：全くあてはまらない」～「5：非常にあてはまる」の5段階で回答するよう求めた。

自意識特性 菅原 (1984)の自意識尺度 (21項目)を用いた。この尺度は、自己の外的、対人的側面に注意を向ける程度である「公的自意識」11項目、自分の内面に注意を向ける程度である「私的自意識」10項目の、2つの下位尺度からなる。「1：全くあてはまらない」～「7：非常にあてはまる」の7段階で回答するよう求めた。

第3節 結果と考察

各変数の得点の算出

罪悪感 因子構造を確認するために固有値を1に設定し、主成分分析を行ったところ、第一主成分から第二主成分にかけて固有値の大幅な落ちこみがみられた。このことから、罪悪感は一因子構造と捉えるのが妥当と判断された。因子数を1に設定し、主成分分析を行った結果を Table 3-1 に示す。次に、信頼性を確認するために Cronbach の α 係数を算出した。その結果 $\alpha = .86$ であり、十分な内的整合性が認められた。

Table 3-1 社会的迷惑に対する罪悪感の主成分分析結果

		F1	h^2
9	おしゃべり	.71	.50
8	座席の占有	.69	.48
10	乗降時に入り口付近で動かない	.69	.47
6	荷物で通路をふさぐ	.65	.43
2	降りる人より先に乗り込む	.61	.37
15	乗車時の割り込み	.60	.37
12	ゴミの放置	.60	.36
13	ヘッドホンステレオの音漏れ	.59	.34
14	携帯電話の通話	.58	.33
5	空席の前に立つ	.55	.30
7	車内での飲食	.54	.29
4	携帯電話をマナーモードにしない	.53	.28
3	かけ込み乗車	.53	.28
11	満員電車のリュック	.50	.25
1	不正乗車	.43	.19
寄与率		34.92	

注) 数字は項目の提示順

共感性 各下位尺度の α 係数を求めたところ、共感的関心 $\alpha = .87$ 、個人的苦痛 $\alpha = .69$ 、ファンタジー $\alpha = .82$ 、気持ちの想像 $\alpha = .74$ であった。個人的苦痛がやや低い値であったが、分析には耐えうると判断された。

自意識特性 各下位尺度の α 係数を求めたところ、それぞれ公的自意識 $\alpha = .89$ 、私的自意識 $\alpha = .86$ であり、十分な内的整合性が認められた。

以上、罪悪感、共感性、自意識特性の下位尺度それぞれについて項目平均値を求めて各得点とし、分析を行った。

各変数の得点と男女差の検討

男女別にみた各変数の得点の平均値、SD を Table 3-2 に示した。各変数について、 t 検定により男女差の検討を行った結果、共感的関心、個人的苦痛、気持ちの想像、私的自意

Table 3-2 男女ごとにみた各変数の基礎統計量とt検定の結果

	男性		女性		t	
	平均値	SD	平均値	SD		
共感性	共感的関心	3.70	.57	3.86	.51	2.81 **
	個人的苦痛	2.84	.64	3.05	.58	3.27 **
	ファンタジー	2.98	.84	3.07	.81	1.03 n.s.
	気持ちの想像	3.15	.71	3.31	.65	2.12 *
自己意識	公的自己意識	5.16	.85	5.31	.74	1.69 †
	私的自己意識	4.85	.95	5.05	.79	2.09 *
罪悪感		4.62	.76	4.83	.60	2.79 **

注) 男性 $n = 145$, 女性 $n = 196$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

識、罪悪感で有意な差が、公的自意識で有意な傾向がみられた。いずれも男性より女性で得点が有意に高かった。

このことから、女性は他者の感情体験に対して他者志向的な感情的反応を持ちやすい一方で、他者の苦痛に対しては自分中心の感情反応を持ちやすく、他者の立場に立って他者の気持ちを想像しようとする傾向が高いといえる。また女性は男性より思考や態度といった自己の内的側面と他者から見られる自己の外的側面の双方に対して意識を向けやすく、公共場面における社会的迷惑に対して罪悪感を喚起されやすいといえる。先行研究においても男性よりも女性の方が公的、自意識が高く、罪悪感を喚起しやすいことが示されており、今回の結果はそれに一致するものである。共感性においても同様に女性でより高いという結果が示されている(明田, 1999)。共感性のうち、ファンタジーでのみ男性と女性に差はみられなかったが、これは他の3因子と異なり、ファンタジーが実在の他者でなく物語などの架空の他者に対する感情移入を測定するものであるためと考えられる。

各変数間の相関係数

男女別に各変数間の相関係数を求め、その結果を Table 3-3 に示した。

Table 3-3 男女別にみた各変数間の相関係数

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
共感性	(1) 共感的関心	.03	.37 ***	.36 ***	.08	.21 *	.30 ***
	(2) 個人的苦痛	.04		-.05	.11	-.10	.19 *
	(3) ファンタジー	.45 ***	.15 *		.26 **	.10	.31 ***
	(4) 気持ちの想像	.46 ***	-.02	.31 ***		.13	.48 ***
自己意識	(5) 公的自己意識	.18 *	.10	.20 **	.03		.18 *
	(6) 私的自己意識	.28 ***	-.17 *	.25 **	.50 ***	.34 ***	.15
(7) 罪悪感	.25 ***	-.02	.16 *	.10	.02	.03	

注) 右上が男性、左下が女性の相関係数。

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

共感性と自意識の関連

まず共感性の下位因子間の関連では、男性では共感的関心はファンタジー、気持ちの想像と、ファンタジーは気持ちの想像との間に有意な正の相関がみられた。女性では、共感的関心はファンタジー、気持ちの想像と、個人的苦痛はファンタジーと、ファンタジーは気持ちの想像と有意な正の相関がみられた。個人的苦痛とファンタジーの関連に男女で違いがみられたのを除き、男女でほぼ同様の関連であった。登張(2003)による共感性下位尺度間の相関の検討では、男子大学生では個人的苦痛を除く全ての尺度間で有意な相関が得られており、女子大学生では個人的苦痛 - 気持ちの想像の間で無相関であった以外は有意な相関が得られており、今回の結果はこれにほぼ一致した結果といえるだろう。個人的苦痛は、他者の苦痛などに対して、他者にではなく自己に焦点が向けられる(動揺、混乱、どうしていいかわからない等)自己中心的な共感性であり、その他の他者志向的な3因子とは性質が異なるために有意な相関が得られなかったと考えられる。

公的自意識と私的自意識では、男女ともに正の相関が得られた。公的自意識と私的自意識については、これまでも一貫して小～中程度の正の相関がみられており(e.g. 池田・押見, 1999; 菅原, 1984; 押見・渡辺・石川, 1986)、本研究の結果もこれに一致する。

共感性と自意識の関連については、男性では共感的関心はファンタジー、気持ちの想像と私的自意識との間に有意な正の相関がみられた。女性では、共感的関心、ファンタジーと公的自意識との間に、共感的関心、ファンタジー、気持ちの想像と私的自意識との間に有意な正の相関がみられた。また個人的苦痛は私的自意識と有意な負の相関がみられた。私的自意識と共感性については、先行研究でも正の相関が報告されている(中江・古賀・平田・山口・坂井・押見, 1999)。また角田(1994)は、共感性類型と自意識との関連を検討し、感情の共有経験の高い群は私的自意識が有意に高いという結果をみだしている。この結果から他者の感情を共有し意識するためには、それを感じる自己の感情状態についての認知も必要であると指摘しており、今回の結果はそれを一部支持するものであるといえる。一方個人的苦痛では男性で無相関、女性で負の弱い相関が得られた。これは、私的自意識の高い人は自己の内面に意識を向けやすく、自らの感情状態を他者の感情に巻き込まれることなく正確に把握することができたためと考えられる。

公的自意識と共感性の関連については、男性では全ての共感性において有意な相関はえられず、女性では共感的関心、ファンタジーとのみ弱い正の相関がえられるにとどまった。中江他(1999)は、公的自意識は共感性の視点移入因子との間に負の有意な相関があること、

視点共存因子とは無相関であることを見出している。この結果から、公的自意識の高い人が持つ他者への関心は自己中心的であり、彼らにとって他者が他者自身を見つめることはさほど重要なことではないのだろうと指摘している。今回の結果は、この指摘に一部一致するものである。女性でのみ一部有意な正の相関がみられたことについては、他者との関係性を志向する女性においては、他者への関心の高さや架空の物事に自己を移入する傾向が公的な存在としての自己の有様に直接関わるのかもしれない。

罪悪感と共感性、自己意識特性の関連

罪悪感と共感性の関連では、男性では全ての共感性尺度で有意な正の相関がみられた。一方女性では、共感的関心とファンタジーとの間でのみ有意な正の相関がみられた。このことから、男女とも、他者の感情体験に対して自分も同じように感じとったり、架空の他者に感情移入したりする傾向が高いほど罪悪感を喚起しやすい傾向があるといえる。さらに男性では、他者の苦痛や感情状態に巻き込まれやすいほど、また他者の視点に立ってその気持ちや状況を想像しようとする傾向が高いほど罪悪感を喚起しやすいといえる。また、いずれも男性の方が相関係数は大きく、これらの結果は罪悪感と共感性の関連は男性よりも女性でより強いという予測に反するものである。女性は「関係性の維持」を重視する傾向があると先述したが、公共場面で出会う一般的他者は関係性を維持すべき対象である身近な他者ではないため、このような結果が得られたと考えられる。

公的自意識、私的自意識では、男女とも罪悪感と有意な相関はみられなかった。有光(2001b)は罪悪感と諸性格特性との関連を検討し、公的自意識、私的自意識は罪悪感と有意な正の相関を持つことを示しているが、本研究の結果はそれに一致しなかった。先述のように、公的自意識の高い人は、自己中心的な性質を持つことが指摘されている(e.g. 中江他, 1999; 押見・坂井, 2002)。押見・坂井(2002)は、被験者に自分の額に“E”の文字を描かせ、外部観察者からEと見えるように描くか、自分から見てEと見える(外部観察者からは左右が逆転して見える)ように描くかを検証する実験を行っている。その結果、公的自意識の高い人は低い人よりも自分から見てEと見えるように文字を描く傾向があった。このことから押見・坂井(2002)は、公的自意識の高い人は自己中心的反応をより強く現わす傾向があるとしている。この研究では評価懸念による違いはみられなかったが、評価懸念が低い場面では非自己中心的反応を、高い場面では自己中心的反応を示す可能性を指摘している。このことから、対人場面といった評価懸念を引き起こしやすい場面に対して、本研究で用いたような公共場面は評価懸念を引き起こしにくいいため、罪悪感と公的自意識との関連が

みられなかったことが考えられる。

私的自意識と罪悪感に有意な相関を見出した有光(2001)は、私的自意識が高い人は自己内省しやすく自分についてのより明瞭な知識を持つため、自分の行動の失敗に注意が向かいやすく、罪悪感を経験しやすいと考察している。本研究で用いた社会的迷惑では、その行動をすることによって失敗したとは感じられにくいのかもしれない。そのため今回私的自意識と罪悪感に有意な相関がみられなかったことが考えられる。

第10章 罪悪感、恥意識による社会的迷惑の抑制効果(研究5)

第1節 本研究の目的

研究5では、罪悪感と恥意識が社会的迷惑に与える影響と、その状況による違いを検討する。罪悪感と恥意識は何らかの基準に基づいて自己を評価的に捉えた結果喚起される感情であり(薊, 2008), 恥意識と罪悪感のいずれが喚起されるかは、個人がどのような基準に注目したかによって決定されると考えられる。菅原他(2006)は、公共場面において「個人が自らの行動を制御する場合に、重視する目標や手がかり」となる行動基準を、「自分本位」「仲間的セケン」「地域的セケン」「他者配慮」「公共利益」の5つに整理している。これらの基準は必ずしも道徳的価値を含むものではなく、個人が重視する準拠集団の広さとその中での人間関係に着目したものである。菅原らは、準拠集団が仲間集団などに狭く特定化していくほどその他大勢のスタンダードや利益から乖離し、社会的迷惑を促進すると論じている。そこで次に、恥意識と罪悪感の喚起に関連する要因として、行動基準に注目する。

佐々木・菅原・丹野(2005)は、恥意識の喚起の程度は評価する他者との心理的距離によって異なり、逆U字の関係がみられることを示している。これは、恥意識には個人と中間的な心理的距離にある仲間的セケンや地域的セケンにおける行動基準が影響するが、無関係な他者などを行動基準とする他者配慮、公共利益はあまり影響しないことを示唆している。また罪悪感、他者を害したり規範から逸脱したりすることで喚起されることから、他者配慮、公共利益などの行動基準から影響をうけると考えられる。その一方で、罪悪感が高い人は他者への共感的関心が高い傾向にある(有光, 2006)ことから、周囲の人々との協調も重視すると考えられ、地域的セケンや仲間的セケンとも関連が予測される。

また先述のように、恥意識は他者の存在を前提とした公的な感情であり、その影響は他者からの評価に左右される。そのため恥意識は、周囲に身近な他者がいる場合と、見知らぬ他者ばかりの中にいる場合とでは、社会的迷惑に対する影響は異なると考えられる。これに対して他者の存在に左右されない私的な感情である罪悪感、他者評価に左右されることは少なく、このような周囲の状況によって社会的迷惑に対する影響は比較的小さいと考えられる。

そこで、社会的迷惑に対する罪悪感、恥意識の喚起がいずれの行動基準に左右されるのか、またその罪悪感と恥意識が社会的迷惑の抑制に及ぼす影響が状況によってどのように異なるのか、Figure 3-1 に示すモデルを設定し、検討を行う。これによって、各行動基準と

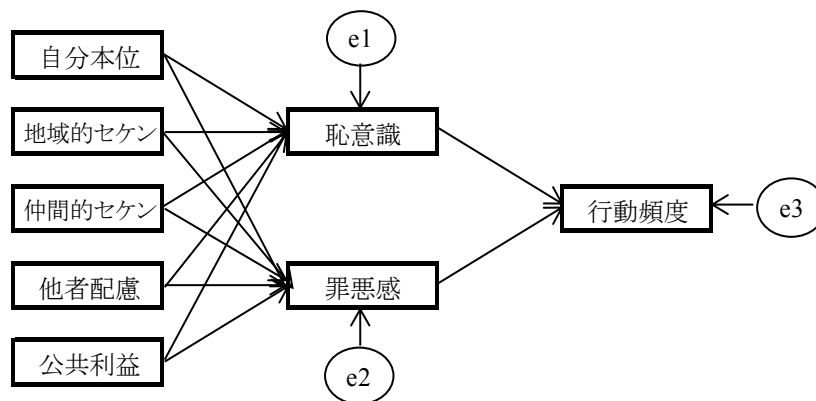


Figure 3-1 罪悪感、恥意識喚起と社会的迷惑の抑制モデル

社会的迷惑に対する罪悪感、恥意識の喚起との関連から、どのような行動基準への注目を促すことが社会的迷惑の抑制に有効であるのかを検討する。

第2節 方法

調査協力者

京阪神圏の4年制大学で心理学の授業を受講している大学生に質問紙調査を依頼し、104名から回答を得た。そのうち回答に不備のなかった92名(18~22歳、平均年齢19.43歳、 $SD = .94$)を分析対象とした。男性57名(平均年齢19.39歳、 $SD = 1.00$)、女性35名(平均年齢19.51歳、 $SD = .85$)である。

実施方法

研究1と同様に、同性友人がいる状況を想定させる質問紙A [集団状況]、見知った人がいない状況を想定する質問紙B [個状況]の、2種類の質問紙を用意し、調査協力者に無作為に振り分けた。質問紙Aには46名(男性26名、女性20名)、質問紙Bには46名(男性31名、女性15名)が回答した。授業時間中に質問紙を配布し、集団的に実施、回収が行われた。調査実施時期は2010年12月である

実施内容

社会的迷惑 研究2で用いた電車利用場面における14の社会的迷惑のうち、個集団では生じない「おしゃべり」を除く14項目を使用した。

社会的迷惑行動頻度 各社会的迷惑について、普段自分がどの程度の頻度でしているかをたずねた。「1:全くしたことがない」~「4:いつもする」の4段階で回答を求めた。

罪悪感 各社会的迷惑について、自分がしたときにどの程度後ろめたいと感じるかをと

ずねた。「1：全く感じない」～「6：とても感じる」の6段階で回答するよう求めた。

恥意識 各社会的迷惑について、自分がしたときにどの程度みっともないと感じるかをたずねた。「1：全く感じない」～「6：とても感じる」の6段階で回答するよう求めた。

行動基準尺度 菅原他(2006)による「自分本位」「仲間的セケン」「地域的セケン」「他者配慮」「公共利益」の各4項目、計20項目である。各項目について、自分にあてはまる程度を「1：全くあてはまらない」～「6：よくあてはまる」の6段階で回答するよう求めた。

第3節 結果と考察

各変数得点の算出

各変数の内的信頼性を確認するため、Cronbachの α 係数を算出した。その結果、社会的迷惑行動頻度は集団状況 $\alpha = .70$ 、個状況 $\alpha = .75$ 、恥意識は $\alpha = .88$ 、罪悪感 $\alpha = .90$ であった。行動基準尺度については、菅原他(2006)の5因子について α 係数を求めたところ、4因子で.70未満と低い値であった。そのため行動基準尺度についてのみ因子分析(最尤法, promax回転)を行った。因子負荷量が.35未満である等問題のみられた3項目を削除し、固有値の落ち込みから4因子と判断した。その結果をTable 3-4に示す。第1因子は地域的セケン、他者配慮、公共利益に属する5項目からなる無関係な他者を含めた周囲の人々への気遣いを示す行動基準の因子であり、「他者配慮」($\alpha = .72$)とした。第2因子は自分本位の7項目からなる自己中心的な行動基準の因子であり、「自己中心」($\alpha = .70$)とした。第3因子は仲間的セケンに属する3項目からなる仲間への配慮を示す行動基準の因子であり、「仲間配慮」($\alpha = .73$)とした。第4因子は地域的セケンに属する2項目からなる世間体の懸念を示す行動基準の因子であり、「世間体」($\alpha = .68$)とした。世間体で α 係数が.70未満であったことから、今後の分析では世間体を除く3因子のみを用いることとした。それぞれの項目得点の平均値を算出し、これを各変数得点として分析に使用した。

基礎統計

各変数得点の平均値、SDを、Table 3-5に状況別に示した。ニュートラル・ポイントは社会的迷惑行動頻度で2.50、その他の変数で3.50である。それぞれ状況によって平均値に差がみられるかを一元配置分散分析により検討した結果、いずれも有意差はみられなかった。

相関分析

各変数得点間の相関分析の結果をTable 3-6に示した。まず社会的迷惑行動頻度では、集

Table 3-4 行動基準尺度の因子分析結果(最尤法, promax回転)

	F1	F2	F3	F4	h^2
他者配慮($\alpha=.72$)					
1 世間から笑われるようなことだけはしたくない(地)	.83	.06	.08	-.02	.61
2 みんなで話し合っただけ決めたことは守らなければならない(公)	.66	-.14	-.29	.09	.53
3 周りから変な人と思われないように気をつけている(地)	.58	.15	.17	.16	.50
4 大勢の人がいる場所では、お互い同士もっと気を遣うべきだ(他)	.43	-.01	-.35	.26	.47
5 自分が誰かの迷惑になっていないか、常に気を遣う(他)	.39	-.12	.19	-.09	.31
自己中心($\alpha=.70$)					
6 法律に違反さえしなければ、あとは個人の自由だ(自)	-.02	.77	.11	.02	.49
7 お金さえ払えば、何をしても許される(自)	-.13	.67	-.12	.20	.40
8 何をしようが自の勝手だと思う(自)	.10	.48	-.24	-.19	.38
9 どんな人に対してでも、人権を尊重する(公)*	.07	-.45	-.06	.06	.31
10 人に怒られなければ、何をしてもよいと思う(自)	.08	.39	.03	-.12	.22
11 見知らぬ人に対してでも、相手の立場になって考える(他)*	.03	-.39	.07	-.13	.21
12 悪いことでも、みんなで一緒にやれば平気でできてしまう(仲)	.18	.38	.18	-.10	.31
仲間配慮($\alpha=.73$)					
13 友だちのみんながやっていることに乗り遅れたくない(仲)	-.05	-.01	.87	.15	.54
14 仲間がみんなやっているのに、自分だけやらないのは恥ずかしい(仲)	-.09	-.05	.65	.09	.45
15 友だちがみんな悪いことをしているのに、自分だけ裏切れない(仲)	.34	.02	.57	-.20	.50
世間体($\alpha=.68$)					
16 警察につかまったら、恥ずかしくて世の中に顔向けできない(地)	.07	.04	.04	.98	.56
17 何か問題を起こして、近所のうわさになるのは嫌だ(地)	.18	-.12	.31	.43	.45
削 他人に迷惑がかかりそうなら、身勝手な行動は慎む(他)					
削 仲間と考えが違ったりしても、それぞれの意見を大切にする(公)					
削 多数の人の意見だけでなく、少数の意見にも耳をかたむけるべきだ(公)					
	因子間相関	F1	-.13	.20	.38
		F2		.15	-.24
		F3			-.11
	累積負荷量		44.92		

注) 地: 地域的セケン 仲: 仲間的セケン 自: 自分本位 他: 他者配慮 公: 公共利益

*は逆転項目

Table 3-5 状況別にみた各変数の基礎統計量と、分散分析の結果

	集団状況		個状況		F
	平均値	SD	平均値	SD	
社会的迷惑行動頻度	1.81	.32	1.81	.38	.00 n.s.
恥意識	4.58	.76	4.52	.79	.15 n.s.
罪悪感	4.35	.85	4.41	.96	.10 n.s.
行動基準 他者配慮	3.87	.65	3.82	.65	.15 n.s.
自己中心	2.41	.63	2.57	.66	1.44 n.s.
仲間配慮	2.64	.88	2.85	.86	1.34 n.s.

注) 集団状況 $n = 46$ 、個状況 $n = 46$

Table 3-6 各変数間の相関係数

	迷惑行動頻度		罪悪感	他者配慮	自己中心	仲間配慮
	集団状況	個状況				
恥意識	-.53 ***	-.37 *	.71 ***	.22 *	-.41 ***	.00
罪悪感	-.52 ***	-.47 **	——	.29 **	-.43 ***	.04
行動基準						
他者配慮	-.23	-.05	——	——	-.07	.23 *
自己中心	.27 †	.33 *	——	——	——	.09
仲間配慮	-.14	.09	——	——	——	——

注) 社会的迷惑行動頻度: 集団 $n = 46$ 、個 $n = 46$ *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$
 その他の変数 $n = 92$

団状況、個状況ともに恥意識、罪悪感と負の有意な相関がみられた。また個状況では自己中心と正の有意な相関が、集団状況では正の有意傾向がみられた。また恥意識と罪悪感の間には強い正の相関がみられた。恥意識、罪悪感は共に他者配慮と正の、自己中心と負の有意な相関を示した。行動基準尺度内では、他者配慮と仲間配慮に正の有意な相関がみられたが、自己中心とはいずれも有意な相関はみられなかった。

状況による恥意識、罪悪感の社会的迷惑に対する抑制効果の違い

Figure 3-1 に示した社会的迷惑抑制プロセスのモデルをもとに、状況別に共分散構造分析を行った。集団状況におけるパスを Figure 3-2 に、個状況におけるパスを Figure 3-3 に示した。実線は 5%水準で有意であったパス、破線は 10%水準で有意傾向であったパス、値は標準化されたパス係数である。

集団状況では、恥意識、罪悪感とも、社会的迷惑行動頻度に負の有意な影響がみられた。これに対して個状況では、罪悪感は社会的迷惑行動頻度に有意な負の影響を与えていたが、恥意識では有意な影響はみられなかった。共分散構造分析に先立って行った相関分析では、社会的迷惑行動頻度は集団状況、個状況とも、恥意識と罪悪感は負の関連を示していた。しかし、共分散構造分析を行った結果、両状況で社会的迷惑を抑制していたのは罪悪感のみであり、恥意識は、個状況では社会的迷惑に影響するとはいえなかった。その一方で、集団状況についてみると、罪悪感に比べて恥意識がより社会的迷惑を抑制していた。この結果は、恥意識と罪悪感は、そのどちらかが常に社会的迷惑に優位に影響し抑制しているのではなく、状況によって恥意識と罪悪感が相互に補完しあって社会的迷惑を抑制することを示唆している。これは身近な他者がいるかどうかという状況の違いによって恥意識、罪悪感の社会的迷惑に対する影響が異なるという本研究の予測を支持するものであった。

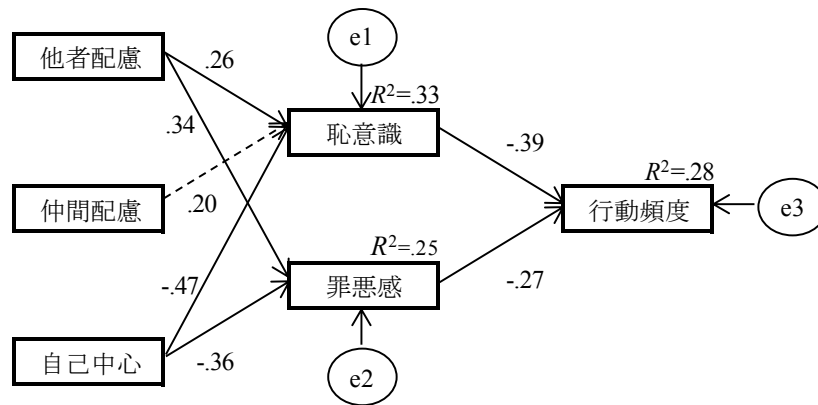


Figure 3-2 集団状況におけるパス

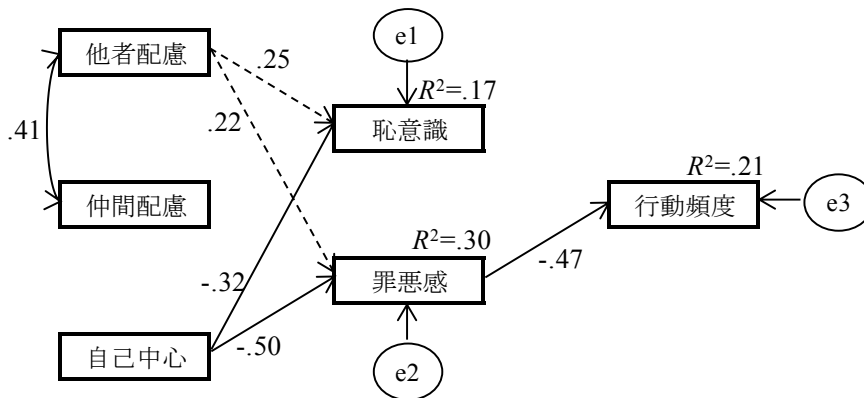


Figure 3-3 個状況におけるパス

恥意識・罪悪感の喚起に行動基準が与える影響

集団状況では、行動基準では他者配慮が恥意識、罪悪感に正の有意な影響を、自己中心は負の有意な影響を与えていた。仲間配慮は恥意識にのみ正の影響を示したが、有意傾向に留まった。個状況については、行動基準では自己中心でのみ恥意識、罪悪感に有意な負の影響がみられた。他者配慮は集団状況と同様、恥意識、罪悪感に正の影響を示したが、いずれも有意傾向であり、仲間配慮は恥意識、罪悪感ともに有意な関連はみられなかった。

本研究で得られた3つの行動基準のうち、恥意識、罪悪感に安定した影響がみられたのは自己中心であり、集団状況、個状況の両状況で恥意識、罪悪感の喚起を抑制していた。他者配慮については、両状況で恥意識、罪悪感の喚起を促進していたが、個状況では有意傾向に留まった。また仲間配慮は、集団状況で恥意識の喚起を促進する傾向がみられたものの、個状況では恥意識、罪悪感のいずれにも影響していなかった。このことから個状況では、他者を中心とした行動基準が恥意識、罪悪感の喚起、ひいては社会的迷惑の抑制に

効果があるとはいえず、社会的迷惑の抑制のためにはいかに自己中心傾向を抑制するかが重要であることが示唆された。

第11章 第3部の総合的考察

第8章で述べたように、これまでの研究では恥意識と罪悪感の社会的迷惑に対する影響について一致した知見が得られていなかった。しかし研究5の結果からは、状況による影響を考慮することでこれらの結果の不一致を説明することができる。

恥意識についてみると、評価する他者がいる状況でのみ社会的迷惑を抑制するという予測に一致した結果である。恥意識は日本人の行動決定の指針とみなされてきたが、その影響は公共空間での社会的迷惑には必ずしもあてはまらないようである。この結果は、社会的迷惑の背景因として社会的状況の変化があるという吉田他(1999)の指摘を支持するものといえるだろう。また罪悪感に注目すると、集団状況に比べて個状況でやや標準化係数が高かった。これは、集団状況よりも個状況で罪悪感による社会的迷惑抑制の効果が高いことを示唆している。しかしこれは、集団状況では罪悪感の抑制効果がやや抑えられる傾向にあると捉えることもできる。

このような結果が得られた原因として、社会的迷惑の適応的側面があると考えられる。友人など相互作用の相手がいる状況では、その相手と共有されるインフォーマルな規範からの逸脱は相互作用の相手に与える悪印象や課題遂行への支障が懸念され、公衆道徳規範に沿った行動をすることは対人関係の悪化につながる可能性がある(高木・村田, 2005)。授業中の私語に関する研究では、たとえ私語はいけないと考えていても、クラスの皆は私語に寛容なようだからいいだろうと、仲間からの期待に応える形で社会的迷惑が引き起こされることが示されている(卜部・佐々木, 1999)。研究5においても、身近な友人と一緒にいることで、罪悪感を抱きながらも仲間集団への適応のための手段として社会的迷惑が行われた可能性がある。しかし、今回の結果からこの知見を検証することはできず、推測に留まる。罪悪感と適応のための社会的迷惑との関連については、今後検討する必要があるだろう。

罪悪感喚起に関わる要因については、研究4において、共感性が高いほど罪悪感を喚起しやすいという結果が得られた。またこれらの関連には男性と女性で違いがみられ、社会的迷惑に対する情動的反応を検討する際には男女による違いを考慮する必要があることが示唆された。公共場面における社会的迷惑は、主に見ず知らずの一般的他者との間で問題になる行動であり、これまで検討されてきた対人場面での罪悪感や明確な規則を破ることによる罪悪感とは性質を異にしているといえる。共感性について澤田(1992)は、日本社会

では家族、友人などの「ウチ」の人間に対しては容易に共感することができるが、見知らぬ他者である「ソト」の人間に対しては共感することが困難であるとしている。電車に乗りあわせた他者は「ソト」の人間であり、その気持ちに配慮すべき対象であるとは認識されにくかったために弱い相関にとどまったことが考えられる。本研究と同様、共感性と罪悪感の関連を検討した藤吉・田中(2006)においても、公衆道徳違反行動に対する罪悪感と共感性の相関は弱いものであり、マナー違反等の行動については他者の立場に立つことで罪悪感を喚起することが難しいことが示唆される。しかし、同じ公共場面であっても、友人や家族などの身近な他者が周囲にいるような集団場面では別の影響が推測される。集団場面では関係性の維持が課題となるため、周囲の他者の快・不快といった内的状態に対する関心が高まると考えられる。さらに身近な他者の不快は関係性の維持に支障をきたすため、社会的迷惑はより回避されるべきものと認識されるだろう。このため、集団場面ではより罪悪感と共感性が強く関連するかもしれない。単独場面と集団場面での社会的迷惑に対する罪悪感の喚起の違いの検討は、今後の課題である。

また罪悪感と自意識特性に有意な関連が見られなかったことから、公共場面での社会的迷惑は失敗という認識を生みにくいことが考えられた。これは、公共場面は自己への注意が向かいにくい場であるためであるとも考えられ、状況による自己覚知の程度などにも注目する必要があるといえる。

また研究5では、罪悪感と恥意識の喚起に影響する要因として、公共場面における行動基準をとりあげた。しかし因子分析の結果、菅原他(2006)の「自分本位」「仲間のセケン」「地域的セケン」「他者配慮」「公共利益」の5つの基準は抽出されず、得られた4因子のうち3因子を分析に用いた。この他者配慮、仲間配慮、自己中心の3つの基準は、それぞれ社会、集団、個人の大きな基準に相当すると考えられる。このうち、集団、個の両状況で有効な影響がみられたのは個人基準にあたる自己中心のみであり、社会的迷惑が引き起こされる背景には、他者にかまわず自分のしたいようにするという自己中心的な態度があることが示唆された。しかし本研究では、個人が重視する準拠集団の広さとその中で他者との心理的距離による行動基準の影響を十分に検討することができなかった。より詳細な行動基準を設定し、行動基準が恥意識と罪悪感の喚起を通して社会的迷惑の抑制に与える影響について検討することが必要である。

第4部 個状況における公私認識と社会的迷惑

第12章 公私認識と他者に対する無配慮的態度に関する理論的検討

他者と共有される空間である公共空間では、周囲にいる他者に配慮した行動をとることが求められる。その一方で、共在する他者との間に既存の関係性がなく、関係性を維持する必要のない個状況は、「私的な場」とみなされやすく、他者配慮的な態度は喚起されにくいと推測される。本論文では、個状況では他者配慮的態度は社会的迷惑に影響を及ぼさないという予測を第1部でたて、集団状況と個状況とを対比して社会的迷惑の抑制要因を第2, 3部において検討してきた。その結果、集団状況において関係配慮的態度が見られるに限らず、個状況においても他者迷惑認知や罪悪感といった他者配慮的態度が社会的迷惑を抑制することが示唆された。このように、状況ごとに関連要因に違いがみられ、集団状況と個状況とでは社会的迷惑の抑制機序が異なることが考えられた。これらの結果は、個状況において、既存の関係性がないことによって他者配慮的態度が行動に影響を及ぼさないとする予測を指示しない。また、個状況における社会的迷惑についてはこれまでほとんど着目されることはなく、その背景要因や抑制に関わる機序は明らかになっていない。そこで第4部では、公共空間の中の個状況における社会的迷惑に焦点をあてる。

第1節 公共空間に対する公私認識

個状況における社会的迷惑の抑制に関連して、渋谷(1979)は、既存の関係がない状況においては、無関係な他者を意識させることで個人の行動を制御することができる」と述べている。この指摘は、共在する見知らぬ他者の有意味性を認識することが、その状況における行動制御に影響を及ぼすことを示唆している。これは、見知らぬ他者に配慮を示すべきか否かという状況についての認識に関連し、その認識のずれが社会的迷惑をはじめとする問題行動を引き起こしていると考えられる。例えば鈴木(1999)は、本来公的であるはずの空間にいるにもかかわらず、私的な場にいるのとは違う公的な関係に組み込まれることなのだという認識の脱落が、問題行動の背景にあると指摘している。また山田(2009)は、家族や友人が形作る私的空間に対し、コンテクストを共有しない人が大勢いる公的空間では、それなりの緊張感を持たざるをえないのが従来の常識であったとしている。しかし、私的空間でこそ気を遣い合うものであって、それを越えたところでは配慮する必要はないとす

るのが新しい常識であり、「私的な場では配慮を交し合うものの、公的な場では放縦の極みという公私の反転」が起こっていると述べている。このように、公的な場への私の表出などの公私認識のずれが、社会的迷惑の原因の一つとしてあると考えられる。

公共空間を公的な場と捉えるか私的な場と捉えるかは、その状況に大きく依存している。公共空間における問題について述べる場合、公共空間という言葉は他者との関わりを含めた意味で用いられることが多い。例えばゴッフマン(1980)は「コミュニティの成員が自由に出入りできる場」を公共の場と呼んでいるが、これは公共空間を見知らぬ他者を含めた周囲との関わりに着目した狭義の定義といえる。これに対して「他の人の迷惑にならないような場で、会員とか招待されたもののみが集まる」場のように、見知らぬ他者との間で関わりが持たれない空間は私的な場と呼んでいる。これと同様に、鈴木(1999)は「人と人が互いに他者として関係しあわねばならない空間」を「公的空間」、「他人に迷惑をかけなければ自分の好みにもとづいて何をしてもいいし、人と関わりを持たないという選択をすることもできる空間」を「私的空間」と呼んでいる。このように周囲の他者との関係に着目すると、公共空間は、外の人間を含む公的な場と、身内の人間だけで構成される私的な場に分類することができる。そして公共空間において、周囲の他者に配慮すべき公的な場とみなすか、周囲の他者に配慮する必要のない私的な場とみなすかは、どのように振る舞うべきかという判断を左右すると考えられる。本研究では、このような公共空間に対する公私の認識を公私認識と呼ぶ。

状況についての公私認識は、周囲の他者に配慮する必要があるか否かに関わる認識であり、社会場面で公的存在として振る舞うべきか、私的な存在として振る舞うべきかという判断に影響するものであると考えられる。また、公共であるはずの空間を私的空間と認識することは、そこでの振る舞いが他者に与える影響の過小評価につながり、社会的迷惑を容認する態度につながる可能性がある。このように、その状況をどのような場であると捉えるかという認識のずれは、どのような行動が状況適合的であるかという評価のずれを生じさせると考えられる。青年において、この状況認識がずれているために、社会的迷惑が引き起こされるという指摘がある。このことから、個状況における社会的迷惑について検討する上では、その状況に対する公私認識を考慮する必要があるといえる。

第2節 青年の公共空間に対する公私認識のずれ

第1部で述べたように、青年は公共空間や見知らぬ他者に対して無関心な態度を示す特

徴をもつことが指摘されている。例えば高田・松本(1995)は、日本の青年は関係や思惑を配慮し気を配る他者を同質的な他者に限定する傾向が極めて顕著であると指摘している。また久世らは、現代青年の私的な生活と利益を重視しようとする生活の構えである私生活主義的態度について検討している(久世・和田・鄭・浅野・後藤・二宮・宮沢・宗方・内山・平石・大野, 1988; 和田・久世, 1990)。これによると、青年は社会事象に無関心で、特に自分の感覚や実感を重視する傾向があることが示されている。このような特徴をもつ青年にとっては、渋谷(1979)が指摘するように無関係な他者に意識を向けて行動を制御することは容易なことではないかもしれない。このような青年の態度は、公共空間に対する認識にも表れており、個状況における青年の社会的迷惑の背景には、状況に対する公私認識のずれがあるという指摘がある。例えば山田(2009)は、「電車の中という空間は私のなかでは社会ではない」という女子高生の言葉を引き、若者たちの間では、他者との共有空間を私的な空間であると認識し、そこで起こる迷惑行動が気にならない、何をしてもかまわないとする傍若無人な態度がみられることを指摘している。また斉藤・高橋・岩佐(2001)は公共空間での私的行為について行為の可能性をたずねるアンケートを行っている。その結果から、他人のマナー違反への許容度は即ち他人に対する無関心であるとし、関わりのある他者だけでなく、その場に居合わせた見知らぬ他者を含む幅広い他者を認識できる空間構成が必要としている。

その一方で、公共空間で示される無配慮的な態度には適応的な側面があることも指摘されている。ゴッフマン(1980)は、既存の社会関係をもっていない人々が居合わせる状況においては、相手の存在を認識しながらも特別な関心を持たないことを表す「儀礼的無関心」を示すことが、暗黙のルールであるとしている。また佐藤(2001)は、電車内で音楽を聴いたり携帯電話を使用したりして、周囲とは最大限に無関与にふるまうことで、人々は公共空間のような見知らぬ人々と居合わせる一過的な状況を少しでも快適に、当たり障りなくやり過ごそうとしているとしている。このように、周囲に対して無関心にふるまうことは、公共空間においては状況に合致したコミュニケーション形態であるとも考えられている。

しかし、青年の公共空間に対する私的認識が、周囲の他者や社会に対する無関心・無配慮の表れであるのか、それとも他者配慮的な適応的態度の表れであるのかについては、明らかにされていない。また、公私認識と社会的迷惑との関連についても実証的な検討はほとんど行われていない。このことから、公共空間に対する公私認識の関連要因を検討して公共空間の私的認識が起こる背景を明らかにし、公私認識が社会的迷惑に及ぼす影響につ

いて知見を蓄積する必要があるといえる。

第3節 本研究における公私認識の測定と関連要因

公共空間における社会的迷惑について、公私認識に着目して検討した研究は少ない。例えば山形らは、日常生活の中での行動に公私の社会認識が与える影響を重視し、公私識別尺度を作成して道徳性や自意識特性などとの関連を検討している(山形, 2004, 2005, 2006; 山形・中嶋, 2002)。しかし、山形らが検討しているのは、行動についての公私識別であり、状況の公私については検討されていない。

状況についての公私認識と個人の意識や行動に関連すると考えられる研究に、プライバシーに関する研究がある。プライバシーとは、「自己あるいは個人が属する集団への他人による接近に対して選択的な統制を行使している状態」(岩田, 1987)である。このようなプライバシーを確保しようとする志向であるプライバシー志向性については、岩田(1987)、吉田・溝上(1996)によって検討されており、抑うつや協調性などのパーソナリティ特性と関連することが示されている。なお、プライバシーは、もともとは個人情報の保護という観点から登場した法律上の用語であるが、一般的には「個人が他人の干渉を受けない権利あるいは個人が孤立する権利」と誤った理解がなされているという指摘がある(平松, 1983)。このような私生活主義やプライバシー志向性が高い人は、公共空間を私的なものとみなす傾向が高いと予測される。

青年の公共空間に対する公私認識については、これまでほとんど検討されていないが、その状況を私的な場であるとする認識に関連する研究にプライベート空間研究がある。プライベート空間とは、「社会的役割から離れて、他者の目を気にせずに自由に振る舞える自分固有の領域(時間や空間)」(泊・吉田, 1998a, p.78)であり、泊・吉田(1998a,b)は、プライベート空間は、緊張解消、課題への集中、自己内省のできる、自分一人で専有できる「専有空間」、親しい人と率直なコミュニケーションができる、時間や空間を共有できる「共有空間」、気分転換、情緒的解放、自己変身のできる他者への気兼ねがいらぬ「自己解放空間」に構造化している。泊・吉田(1999)は、プライベート空間は物理的空間に固定されず、個人がその状況を自分自身の固有の領域であるとみなす場合、それは広い意味でプライベート空間であるとしていることから、本研究では、所与の公共空間に対してこの7つの機能のいずれか、あるいはいずれも持つと認識している場合には私的認識を、これらの機能を持たないと認識している場合には公的認識を持つと捉えることにする。

第4節 第4部の目的

第4部では、第一に、公共空間の個状況に対する青年の公私認識と、公私認識と周囲の他者や社会事象に対する関心等との関連、および社会的迷惑に対する意識との関連を検討し、公私認識の特徴を捉えることを目的とする。また第二に、青年の公共空間に対する公私認識が社会的迷惑の生起に与える影響を検討し、個状況における社会的迷惑の抑制機序を明らかにする。これにより、これまで着目されてこなかった個状況における社会的迷惑についての知見を得ることができるだろう。

第13章 青年の公共空間に対する公私認識とその関連要因(研究6)

第1節 本研究の目的

本研究では、青年が公共空間に対してどのような認識をもつのかを検討するため、電車利用場面に対する公私認識を、プライベート空間機能尺度(泊・吉田, 1999)を用いて検証する。また、公共空間における公私認識に関連する要因として、自己と共存する他者との関わり(研究6-1)と社会的視点(研究6-2)に着目し、青年の公私認識の特徴を明らかにする。

まず研究6-1では、周囲の他者に意識を向けやすい傾向である他者意識と、公的な存在としての自己を意識することによる社会不安傾向について取り上げる。他者意識は、他者への注意、関心、意識などの強さに関わる状態、性格特性であり(辻, 1987, 1989, 1993)、外面に表れた特徴への注意や関心を示す外的他者意識、他者の内面に注意を向ける内的他者意識、他者について考えたり空想をめぐらせたりしながら、その空想的イメージに注意を向ける空想的他者意識からなる(辻, 1993)。これらの他者意識については、内的他者意識が高いほど視点取得と同情の、空想的他者意識が高いほど視点取得の傾向が高いことが示されている(辻, 1989)。また他者意識が高い人は、他者の感情をより強く認知することが示されている(南山・吉岡・向山・辻・梅本, 1988; 向山・南山・吉岡・辻・梅本, 1988; 辻・南山・吉岡・向山・梅本, 1988; 吉岡・向山・南山・辻・梅本, 1988)。このことから、これらの他者意識が高いほど公的な存在としての自己が意識され、公共空間に対して公的認識を持ちやすいと考えられる。

また社会不安は、社会場面で喚起される不安であり、他者から注目されることに対する不安を特徴とする。主に人前でのパフォーマンス状況と他者との交流状況の2つの状況で喚起されるが(金井・笹川・陳・鈴木・嶋田・坂野, 2004)、本研究では、周囲の他者と直接の交流が持たれない個状況について検討することから、社会状況において他者から注目される不安をとりあげる。この社会状況における社会不安は、周囲の他者からの視線を過剰に意識することで不安が喚起されるため、公共空間に対して公的認識をもつほど社会不安が高くなるが、公共空間を私的な場とみなすことで周囲の視線が遮断され、社会不安は喚起されにくくなると考えられることから、公共空間に対して私的認識をもつほど社会不安が低くなると予測される。

次に研究6-2では、社会事象に対する無関心な態度と、行動を制御する際の基準の選好について取り上げる。社会事象に対する無関心な態度については、久世らは、私生活主義

的態度尺度を作成し(久世・和田・鄭・浅野・後藤・二宮・宮沢・宗方・内山・平石・大野, 1988), 現代青年の私的な生活と利益を重視しようとする生活の構えを捉えている。この尺度は、「規範意識」「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」「自分の感覚や実感の重視」の3下位尺度からなり、このうち「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」は、公的な存在ではなく私的な存在としての自己を重視する傾向を測定するものである。そのため、公共空間に対して公的認識をもつ場合は社会的事象に関心が高く、私的認識をもつ場合には社会的事象に関心が低いと予測される。また、行動基準の選好については、準拠集団の広さとその中で人間関係に着目した行動基準尺度(菅原・永房・佐々木・藤澤・薊, 2006)である。これは、個人が行動制御の際に社会・他者・自己のいずれの目標・手がかりを重視するかを捉えるものである。そのため、公的認識をもつ場合には周囲の他者や社会に対する配慮的な観点から行動を制御し、私的認識をもつ場合には自己中心的な観点から行動を制御すると予測される。公共空間に対する公私認識と、これらの社会事象に対する無関心な態度および行動基準選好との関連を検討することで、社会・他者・自己のいずれに対する関心が公私認識に影響を及ぼすのかを明らかにすることができるだろう。

また研究 6-2 では、社会的迷惑に対する意識との関連についても取り上げる。公私認識と社会的迷惑に対する意識の関連については、他人に対する無関心が他人のマナー違反への許容的態度を生じさせており、そのため見知らぬ他者を含む幅広い他者を認識できる空間構成の必要性が指摘されている(齊藤・高橋・岩佐, 2001)。この指摘は、公共空間を私的な場と認識している場合、周囲で生じている事象に対して注意が向きにくく、社会的迷惑を意識化する傾向が低くなることを示唆している。このことから、公共空間に対する公私認識と社会的迷惑の意識化の程度の関連を検討し、公私認識が社会的迷惑に対する意識とどのように関連しているのかを検証する。

第2節 方法

調査協力者

京阪神圏の4年制大学および専門学校で、心理学の講義を受講している学生に、無記名式の質問紙を依頼した。回答者のうち、分析対象は18~23歳とし、日本国外出身者、電車欠損値多数のものは除外した。また、電車を「ほとんど使用しない」と回答したのも、分析対象からは除外した。

研究 6-1 回答者 300 名のうち、276 名(18~22 歳, 平均年齢 18.86 歳, $SD = 1.03$)を分析

対象とした。男性 41 名(平均年齢 18.63 歳, $SD = .829$), 女性 235 名(平均年齢 18.90 歳, $SD = 1.06$)である。調査時期は 2012 年 7 月である。

研究 6-2 156 名のうち, 143 名(18~22 歳, 平均年齢 18.92 歳, $SD = .96$)を分析対象とした。男性 52 名(平均年齢 19.31 歳, $SD = 1.09$), 女性 91 名(平均年齢 18.70 歳, $SD = .80$)である。実施時期は 2012 年 12 月~2013 年 7 月である。

実施方法

講義開始前あるいは終了後に質問紙を配布し, 集団的に実施, 回収を行った。その際, 回答は強制ではないこと, 成績に影響することはないこと等を口頭及び文書により確認した。

実施内容

共通項目 1) フェイスシート 性別, 年齢, 出身地, 電車利用頻度等をたずねた。 2) 電車利用場面の公私認識 泊・吉田(1998)のプライベート空間機能尺度を使用した。「専有空間」3 項目, 「共有空間」1 項目, 「自己解放空間」3 項目の計 7 項目である(Table4-1)。電車車両内の空間や電車内で過ごしている時間を普段どのよう感じているか, 各項目についてあてはまる程度を「1: 全くあてはまらない」~「5: 非常にあてはまる」の 5 段階でたずねた。各値が高いほど, 電車利用場面を私的認識, 低いほど公的認識しているとする。

研究 6-1 3) 他者意識 他者意識尺度(辻, 1993)を使用した。「内的他者意識」7 項目, 「外的他者意識」4 項目, 「空想的他者意識」4 項目の, 3 下位尺度からなる(計 15 項目)。各項目について自分にあてはまる程度を, 「1: 全くあてはまらない」~「5: 非常にあてはまる」の 5 段階でたずねた。 4) 社会不安 Mattick & Clarke (1998)による SPS (Social Phobia Scale)の日本語版である, 金井他(2004)の「他人から見られることに対する不安」尺度(20 項目)を使用した。各項目について自分にあてはまる程度を, 「1: 全くあてはまらない」~「5: 非常にあてはまる」の 5 段階でたずねた。

研究 6-2 5) 行動基準 菅原他(2006)による行動基準尺度(20 項目)を使用した。各項目について自分にあてはまる程度を「1: 全くあてはまらない」~「5: 非常にあてはまる」の 5 段階でたずねた。 6) 社会的無関心 和田・久世(1990)の私生活主義尺度のうち, 「身近な事象への関心・社会的な事象への無関心」尺度 11 項目を使用した。各項目について自分にあてはまる程度を, 「1: 全くあてはまらない」~「5: 非常にあてはまる」の 5 段階でたずねた。 7) 社会的迷惑の意識化 研究 1 で用いた社会的迷惑のうち, 不正乗車を除いた 14 項目 について, 普段どの程度気になっているかを, 「1: 全く気にならない」~「6: と

Table 4-1 公共空間の公私認識(泊・吉田(1999b)によるプライベート機能尺度項目)

質問項目	本文中での表記
1 ゆっくり休息できる時間や空間である	緊張解消
2 課題や考え事など、何かに集中できる時間や空間である	課題への集中
3 自分を見つめなおしたり、混乱した状況や気持ちを整理する時間や空間である	自己内省
4 親しい人と共有する時間や空間である	率直なコミュニケーション
5 気分転換できる時間や空間である	気分転換
6 日常性から開放される時間や空間である	情緒的解放
7 普段の自分とは別の自分を表現できる時間や空間である	自己変身

でも気になる」の6段階でたずねた。

第3節 結果と考察

公共空間に対する公私認識の構造

研究 6-1, 6-2 で得られた公私認識各項目の度数分布を Figure 4-1 に示した。各項目について、「非常にあてはまる」「あてはまる」と回答した人を公的認識群, 「全くあてはまらない」「あてはまらない」と回答した人を私的認識群, 「どちらでもない」と回答した人を中立群とした。共有空間認識および自己解放空間認識3項目では, 公的認識が過半数を占めていた。課題への集中においてのみ, 公的認識よりも私的認識が多くみられた。

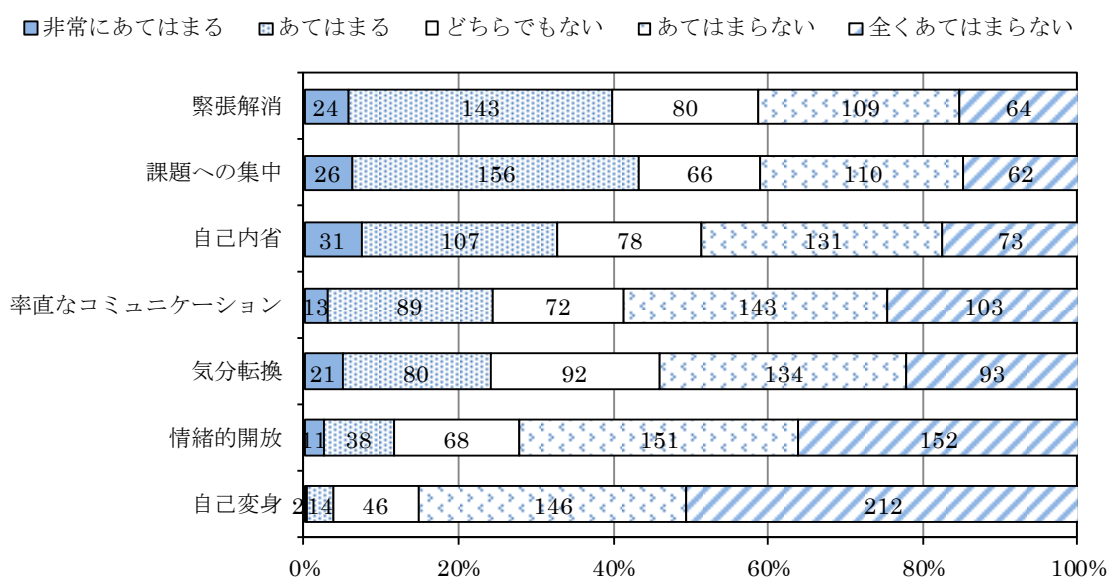


Figure 4-1 電車利用場面に対する公私認識各項目の度数分布 (N)

公私認識各項目について、各群の分布の差を検討するため、 X^2 検定を行った結果、すべての項目で有意差がみられた(緊張解消 $X^2(2) = 38.70, p < .001$, 課題への集中 $X^2(2) = 59.03, p < .001$, 自己内省 $X^2(2) = 56.74, p < .001$, 率直なコミュニケーション $X^2(2) = 123.60, p < .001$, 気分転換 $X^2(2) = 81.39, p < .001$, 情緒的解放 $X^2(2) = 285.96, p < .001$, 自己変身 $X^2(2) = 512.40, p < .001$)。残差分析の結果、率直なコミュニケーション、気分転換、情緒的解放、自己変身では、公的認識を持つ人が有意に多く($p < .01$)、私的認識を持つ人が有意に少なかった($p < .01$)。これに対して緊張解消、課題への集中では、私的認識を持つ人が有意に多く(緊張解消 $p < .05$, 課題への集中 $p < .01$)、公的認識を持つ人も多い傾向がみられた($p < .10$)。また自己内省では、公的認識を持つ人は有意に多かったが($p < .01$)、私的認識では有意差はみられなかった。このように、いずれの項目でも公的認識群が多くみられ、青年は概して電車利用場面を公的な場であるとする認識を持つと考えられた。また共有空間認識と自己解放空間認識については、私的認識をもつ人は少なかったが、専有空間認識については、私的認識をもつ人が期待値と同程度あるいはそれよりも多くみられた。この結果から、青年は電車利用場面を自分のしたいように振る舞う場ではないと認識しており、同時に周囲から切り離された一人だけの空間であると見なす青年も少なくないことが示唆された。

変数得点の算出および基礎集計

各変数の信頼性を確認するため、Cronbach の α 係数を算出したところ、公私認識はそれぞれ専有空間認識 $\alpha = .77$, 自己解放空間認識 $\alpha = .73$ だった。他者意識は内的他者意識 $\alpha = .85$, 外的他者意識 $\alpha = .69$, 空想的他者意識 $\alpha = .81$, 社会不安は $\alpha = .88$ であった。行動基準は自分本位 $\alpha = .61$, 中間的セケン $\alpha = .66$, 地域的セケン $\alpha = .62$, 公共利益は $\alpha = .57$, 他者配慮は $\alpha = .31$, 社会無関心は $\alpha = .58$, 迷惑意識化は $\alpha = .84$ であった。

各変数の項目得点平均値を算出して各変数得点とし、研究 1 と研究 2 の平均値、 SD と各変数間の相関係数をそれぞれ Table 4-2, Table 4-3 に示した。青年の他者意識については、辻(1989)ⁱ と本研究のデータの差を t 検定により検討した。その結果、今回のデータは 20 年前の調査に比べて他者意識が高かった(内的他者意識 $t' = 3.37, p < .001$, 空想的他者意識 $t' = 8.84, p < .001$, 外的他者意識 $t' = 5.00, p < .001$)。このことから、現代の大学生は他者を意識する傾向が 20 年前に比べて高まっていると考えられた。

また、研究 6-1 と研究 6-2 で、公私認識 3 変数の差がないことを確認するため、分散分析を行った。その結果、共有空間認識でのみ有意差がみられ、研究 6-1 の方が研究 6-2 よりも共有空間認識が高かった(専有空間 $F(1) = .75, n.s.$; 共有空間 $F(1) = 18.62, p < .001$;

Table 4-2 各変数の平均値, *SD*と相関係数(研究6-1)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
公私認識								
(1) 専有空間	2.89	1.00						
(2) 共有空間	2.62	1.14	.40 **					
(3) 自己解放空間	2.08	.83	.56 **	.41 **				
他者意識								
(4) 内的他者意識	3.47	.73	.17 **	.07	.04			
(5) 空想的他者意識	3.44	.83	.23 **	.17 **	.14 *	.57 **		
(6) 外的他者意識	3.42	.79	.04	.04	.04	.38 **	.51 **	
(7) 社会不安	2.65	.63	.15 *	-.08	.09	.36 **	.35 **	.42 **

** $p < .01$ * $p < .05$ Table 4-3 各変数の平均値, *SD*と相関係数(研究6-2)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)
公私認識											
(1) 専有空間	2.80	1.00									
(2) 共有空間	2.11	1.13	.25 **								
(3) 自己解放空間	2.11	.84	.68 **	.35 **							
行動基準											
(4) 他者配慮	3.70	.60	.09	.06	.00						
(5) 仲間的セケン	2.87	.79	-.03	.11	.04	.16 †					
(6) 自分本位	2.30	.71	-.09	.01	-.08	-.20 *	.02				
(7) 公共利益	3.74	.59	.12	.06	-.04	.49 **	-.11	-.12			
(8) 地域的セケン	3.58	.78	.08	.01	.01	.45 **	.32 **	-.18 *	.26 **		
(9) 社会的無関心	3.15	.41	-.20 *	-.15 †	-.16 †	-.11	.12	.48 **	-.14 †	.11	
(10) 迷惑意識化	4.75	.72	-.04	.02	-.09	.31 **	.01	-.21 *	.31 **	.27 **	-.10

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

自己解放空間 $F(1) = .10, n.s.$)。このことから、共有空間認識については、研究 6-1 と研究 6-2 の集団の同質性に若干の問題があると考えられたが、参考として共有空間認識についても分析を行った。

各変数間の相関係数

まず、研究 6-1, 6-2 とともに、専有空間認識と自己解放空間認識の間に中程度の正の相関が、専有空間認識と共有空間認識、自己解放空間認識と共有空間認識との間に弱い正の相関がみられた。次に研究 6-1 では、専有空間認識については、内的他者意識、外的他者意識、社会不安との間に弱い有意な正の相関がみられ、他者の内外面を意識し、社会不安を感じているほど電車利用場面を専有空間であると認識する傾向があった。また共有空間認識、

自己解放空間認識については、空想的他者意識と弱い正の相関がみられ、他者について考える傾向が高いほど電車利用場面を共有され自己解放できる空間であると認識するといえた。また研究 6-2 では、専有空間認識と社会的無関心との間に弱い有意な負の相関がみられた。また、共有空間認識、自己解放空間認識においても社会的無関心と負の有意傾向がみられ、社会な事象に無関心なほど専有空間認識が低く、共有空間認識、自己解放空間認識が低い傾向があった。いずれの空間認識においても、行動基準と有意な相関はみられなかった。迷惑意識化については、いずれの空間認識とも有意な相関はみられなかったが、他者配慮、公共利益、地域的セケンと有意な正の相関が、自分本位と有意な負の相関がみられ、他者配慮的で公共利益と地域内での関係性に配慮した行動基準を重視するほど社会的迷惑を気にする傾向が高く、自分本位的に行動制御する傾向が高いほど社会的迷惑を気にしないと考えられた。

公私認識 2 下位尺度を統制した偏相関係数

相関分析の結果で、公私認識尺度間に弱いあるいは中程度の有意な相関がみられたことから、公私認識 2 下位尺度を統制した偏相関係数を算出した(Table 4-4)。その結果、研究 1 では、他者意識は専有空間認識とのみ弱い正の有意な関連がみられ、他者の内面を意識し、他者について考えたり空想したりする傾向が高いほど電車利用場面を専有できる空間であると認識していた。また社会不安については専有空間認識と弱い正の関連が、共有空間認

Table 4-4 公私認識2下位尺度を統制した偏相関係数(括弧内は調整変数)

	専有空間 (共有/自己解放)	共有空間 (専有/自己解放)	自己解放空間 (専有/共有)
研究1 他者意識			
内的他者意識	.17 **	.01	-.06
空想的他者意識	.16 **	.09	-.01
外的他者意識	.02	.03	.01
社会不安	.16 **	-.16 **	.04
研究2 行動基準			
他者配慮	.12	.06	-.10
仲間のセケン	-.08	.11	.05
自分本位	-.05	.04	-.04
公共利益	.19 *	.08	-.18 *
地域的セケン	.11	.01	-.07
社会的無関心	-.12	-.10	-.01
迷惑意識化	.03	.05	-.10

** $p < .01$, * $p < .05$

識と弱い負の関連がみられ、社会不安が高いほど電車利用場面を専有できる空間であり共有空間ではないと認識していた。自己解放空間認識については、いずれも有意な関連はみられなかった。研究2では、公私空間認識と社会的無関心、迷惑意識化との間に有意な関連は見られなかった。また、専有空間認識と公共利益の間に有意な正の関連が、自己解放空間認識との間に有意な負の関連がみられ、公共利益を行動基準として重視する傾向が高いほど電車利用場面を専有できる空間であるが自己解放的な空間ではないと認識していた。

以上の結果からは、青年が公共空間を共有空間、または自己解放空間とみなす態度は顕著にはみられなかった。その中で私的認識が比較的多く見られたのが、専有空間認識である。専有空間認識は他者意識や社会的関心と有意な関連が見られ、公共空間を占有できる空間であるとする認識は他者や社会を意識した上で生じると考えられる。これは、公共空間を私的な場であると認識する傾向は周囲への無関心の表れというより、他者を意識した上で周囲から距離を置こうとする、自己を防衛するための慎重な態度であると解釈できる。行動基準では、公共空間を専有できる空間であると認識しているほど公共利益に配慮した行動制御が選好されることが示された。この結果もまた、私的認識が社会に対する無関心な態度ではなく、社会に配慮した態度に関連することを示唆している。また社会不安については、専有空間認識と共有空間認識と有意な関連がみられ、社会不安が高く社会状況で他者の視線を気にして不安を感じる傾向が高いほど、公共空間を他者とのコミュニケーションが持たれない、一人で専有できる空間であると認識していた。これは、他者とその視線を意識することで生じる不安を、自分ひとりだけの空間を構成することで回避しようとする防衛的態度の表れであるとも考えられる。しかし、自己解放空間認識については、公共利益と負の関連がみられるに留まり、他者や社会的事象に対する無関心な態度とは明らかな関連は示されなかった。

注)

- ⁱ 辻 (1989) における大学生の他者意識の平均値及び *SD* は以下の通り(男性/女性)。
内的他者意識 $M = 22.71$ ($SD = 4.59$)/ $M = 22.62$ ($SD = 4.84$), 外的他者意識 $M = 12.35$ ($SD = 2.96$)/ $M = 12.09$ ($SD = 2.63$), 空想的他者意識 $M = 11.62$ ($SD = 3.01$)/ $M = 10.55$ ($SD = 2.75$)。本研究のデータとの比較にあたって、男女合計の各平均値, *SD* を算出した。

第 14 章 社会的迷惑の抑制要因と公私認識の調整効果の検討(研究 7)

第 1 節 本研究の目的

研究 7 では、電車利用場面における社会的迷惑に対する外的評価指標として、日常的に社会的迷惑が見られる頻度である目撃頻度、他者が迷惑であると感じると思われる程度である他者迷惑認知、一般にその行動が許されると感じる程度である一般許容度を設定し、これらが社会的迷惑の生起に及ぼす影響を検討する。また、公私認識によって各外的評価指標の影響がどのように異なるのかを検討し、公私認識がその状況でふさわしい行動の判断にどのような影響し、社会的迷惑の抑制に与える影響について検討する。以上の検討を通して、公共空間の個状況において社会的迷惑が引き起こされる機序について考察する。

第 2 節 方法

調査協力者

京阪神圏の 4 年制大学で、心理学の講義を受講している学生に質問紙調査を行い、201 名から回答を得た。そのうち、回答に欠損が多数あるなど、問題のあった 9 名のデータを除き、18~22 歳の 192 名（男性 20 名，女性 172 名，平均年齢 18.78 歳， $SD = 1.01$ ）を分析対象とした。

実施方法

講義終了後に無記名式の質問紙を配布し、集団的に実施、回収した。その際、回答は強制ではなく、途中で止めることもできること等を、文書および口頭で確認した。調査時期は 2012 年 7 月である。

実施内容

フェイスシート 性別，年齢，携帯電話の所有，電車の利用頻度等についてたずねた。

電車利用場面の公私認識 プライベート空間機能尺度(泊・吉田, 1998b)の項目を用い，電車車両内の空間や電車内で過ごしている時間を普段どのように感じているかを 5 段階（「1：全くあてはまらない」～「5：非常にあてはまる」）でたずねた。専有空間 3 項目(緊張解消，自己内省，課題への集中)，共有空間 1 項目(率直なコミュニケーション)，自己解放空間 3 項目(気分転換，情緒的解放，自己変身)である。各値が高いほど，電車利用場面を私的認識，低いほど公的認識しているとする。

社会的迷惑 研究 1 で用いた社会的迷惑のうち，「不正乗車」「おしゃべり」を除く 13

項目について、行動頻度と外的評価指標をたずねた。

行動頻度 各社会的迷惑について、一人で電車を利用し、周囲に見知った人がいない状況で、普段どの程度の頻度で各行動を行っているかを回答するよう求めた。回答形式は「1：全くしたことがない」～「4：いつもする」の4段階である。

行動の外的評価指標 各社会的迷惑に対する外的評価の指標として、以下の質問を行った。

目撃頻度 各社会的迷惑を普段どの程度の頻度で目撃するかを、「1：全く見かけない」～「6：非常によく見かける」の6段階で回答するよう求めた。

他者迷惑認知 各社会的迷惑について、自分以外の他者はどの程度不快や迷惑を感じているかを推測し、「1：全く感じない」～「6：とても感じる」の6段階で回答するよう求めた。

一般許容度 各社会的迷惑について、一般にどの程度許容されているかを推測し、「1：全く許容されていない」～「6：完全に許容されている」の6段階で回答するよう求めた。

社会的望ましさ Pauthus (1991)のバランス型社会的望ましさ反応尺度を参考に作成された、谷(2008)のバランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版(24項目)を用いた。「自己欺瞞」「印象操作」の各12項目からなり、自己欺瞞は本当にそれが自分の自己像であると信じて無意識的に望ましく回答しようとする傾向を、印象操作は意図的に真実の自己像をゆがめようとする傾向を測定する。「1：全くあてはまらない」～「5：非常にあてはまる」の5段階で回答するよう求めた。

第3節 結果と考察

各変数の得点の算出と相関係数

各変数の信頼性を確認するため、Cronbachの α 係数を算出したところ、公私認識はそれぞれ専有空間認識 $\alpha = .78$ 、自己解放空間認識 $\alpha = .80$ 、社会的迷惑はそれぞれ社会的迷惑行動頻度 $\alpha = .49$ 、目撃頻度 $\alpha = .78$ 、他者迷惑認知 $\alpha = .87$ 、一般許容度 $\alpha = .86$ であった。社会的迷惑行動頻度の値がやや低かったが分析には耐えうると判断した。変数の項目得点平均値を算出して各変数得点とした。各変数の平均値、SDと各変数間の相関係数をTable 4-5に示した。

専有空間認識と自己解放空間認識の間には強い正の相関が、専有空間認識、自己解放空間認識と共有空間認識の間には中程度の正の相関がみられ、両認識は密接に関連していることが示された。また公私認識と社会的迷惑行動頻度、行動の外的評価指標には、有意な

Table 4-5 各変数得点の平均値, *SD*, *n* と相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
				<i>N</i> =186~192	<i>N</i> =186~192	<i>N</i> =186~192	<i>N</i> =180~184	<i>N</i> =183~185	<i>N</i> =185	<i>N</i> =183~184
公私認識										
(1) 専有空間	2.87	.97	192							
(2) 共有空間	2.52	1.11	192	.34 ***						
(3) 自己解放空間	2.08	.81	192	.56 ***	.34 ***					
(4) 行動頻度	1.72	.27	186	.08	.19 *	.11				
外的評価指標										
(5) 目撃頻度	4.16	.56	189	.00	-.09	-.08	.24 **			
(6) 他者迷惑認知	4.81	.72	188	-.06	.09	-.08	-.18 *	.08		
(7) 一般許容度	2.79	.67	186	.02	-.05	.00	.14	.03	-.29 ***	
社会的望ましさ										
自己欺瞞	2.44	.45	187	.03	-.01	.10	-.15 *	-.12	.03	-.07
印象操作	2.89	.49	188	.10	.13	.08	-.21 **	-.02	.02	-.12

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

相関はみられず、公的か私的かという状況に対する認識が直接行動に影響するとはいえなかった。しかし、社会的望ましさの指標として実施した自己欺瞞、印象操作と社会的迷惑行動頻度の間には弱い正の有意な相関がみられ、この回答が社会的望ましさの影響を受けていることが示唆された。このことから、社会的迷惑行動頻度については社会的望ましさ尺度による修正を行う必要があるといえる。

階層的重回帰分析による社会的迷惑行動頻度の関連要因と公私認識による調整効果の検討
 行動の外的評価指標が社会的迷惑行動頻度に及ぼす影響とその公私認識による違いを検討するため、目撃頻度、他者迷惑認知、一般許容度を独立変数、社会的迷惑行動頻度を従属変数、公私認識を調整変数とする階層的重回帰分析を、Cohen et al. (2003)に従って行った。また、社会的迷惑行動頻度に対する社会的望ましさの影響を統制するために、自己欺瞞と印象操作も併せて投入した。この自己欺瞞と印象操作の影響については、今回考察は行わない。なお、先述の公私認識の分布の検討から、公共空間認識と自己解放空間認識は公的認識への偏りが大きく、調整変数として採用するには適当でないと判断した。そのため本研究では、専有空間認識についてのみ重回帰分析を行った。

まず、多重共線性を回避するため、全1次変数を平均値0、*SD*を1に標準化し、分析に用いた。専有空間認識と目撃頻度、他者迷惑認知、一般許容度の積を算出し、各交互作用

項とした。目撃頻度，他者迷惑認知，一般許容度，専有空間認識の1次項，及び各交互作用項を独立変数としてステップワイズ法により投入し，変数の選定を行った。その結果，印象操作，目撃頻度の主効果，他者迷惑認知および一般許容度の交互作用項が有意であった。

このため，次に step1 で印象操作を，step2 で目撃頻度，他者迷惑認知，一般許容度，専有空間認識を，step3 で他者迷惑認知と専有空間認識，一般許容度と専有空間認識の交互作用項を，強制投入法により投入した。その結果，各 step で R^2 に有意な変化がみられ(step1 $\Delta R^2 = .04$, $F(1,174) = 7.62$, $p < .01$; step2 $\Delta R^2 = .10$, $F(4,170) = 5.00$, $p < .01$; step3 $\Delta R^2 = .07$, $F(2, 168) = 7.89$, $p < .01$)，step3 では他者迷惑認知と専有空間認識，一般許容度と専有空間認識の交互作用，および印象操作，目撃頻度，他者迷惑認知の主効果が有意であった (Table 4-6)。なお，多重共線性の指標である VIF は，全分析を通していずれも 2.00 未満であり，多重共線性の影響はないと判断した。

Table 4-6 社会的迷惑行動頻度を従属変数とする重回帰分析結果 (強制投入法)

step	1		2		3	
	B	β	B	β	B	β
印象操作	-.22	-.21 **	-.20	-.19 **	-.21	-.20 **
目撃頻度			.25	.26 ***	.27	.28 ***
他者迷惑認知			-.17	-.16 *	-.21	-.20 **
一般許容度			.07	.07	.05	.05
専有空間認識			.06	.06	.03	.03
他者迷惑認知*専有空間認識					-.34	-.33 ***
一般許容度*専有空間認識					-.16	-.18 *
R^2	.04		.14		.22	
調整済み R^2	.04		.12		.18	
ΔF	7.62 **		5.00 **		7.89 **	

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

目撃頻度が社会的迷惑行動頻度に与える影響 以上の結果から目撃頻度は， $\beta = .28$ と弱い効果ではあるが，社会的迷惑行動頻度に一貫して影響しており，社会的迷惑を頻繁に目撃するほど社会的迷惑を引き起こしやすくなることが示された。今回得られたデータでは，社会的迷惑の目撃頻度は必ずしも高くはないが，平均値はニュートラルポイントを上回っており，日常的に社会的迷惑は目撃されているといえる。社会的迷惑は一般的に望ましくない行動であるが，北折・吉田(2000)は，たとえ望ましくない行動であっても，実際にそ

の行動をとる人がいるような場合、それがその場に適合的な行動であるとする記述的規範が形成され、これは社会一般にルールとして存在する命令的規範よりも行動に影響しやすいことを示している。本研究においても、周囲の他者が社会的迷惑をとる姿を目撃することによって、社会的迷惑が適合的な行動であると認識されるようになり、社会的迷惑が促進されるようになったと考えられる。またこの結果は、社会的迷惑を目撃することで行動が促進され、さらに社会的迷惑の目撃頻度が上昇するという負の循環が起こっていることを示唆している。

他者迷惑認知・一般許容度が社会的迷惑行動頻度に及ぼす影響と専有空間認識の調整効果 他者迷惑認知と一般許容度では専有空間認識との交互作用がみられたことから、電車利用場面を専有できる空間と専有できない空間のいずれと認識するかによって、他者迷惑認知と一般許容度が社会的迷惑に及ぼす影響は異なると考えられた。そこで、Cohen et al. (2003)に従って、専有空間認識が±1SD の値をとるときの他者迷惑認知と一般許容度の単回帰直線を求めた。専有空間認識が+1SD の値をとる群を私的認識群、-1SD の値をとる群を公的認識群として、各群における他者迷惑認知と一般許容度の単回帰直線を図示した。

まず、各群における他者迷惑認知の単回帰直線を Figure 4-2 に示した。他者迷惑認知については、私的認識群では他者迷惑認知が高いほど社会的迷惑行動頻度が低く($\beta = -52, p < .001$)、他者が迷惑に感じているであろうと考えているほど社会的迷惑は抑制されるといえた。このことから、電車利用場面を専有できる空間と認識している場合、周囲の他者に

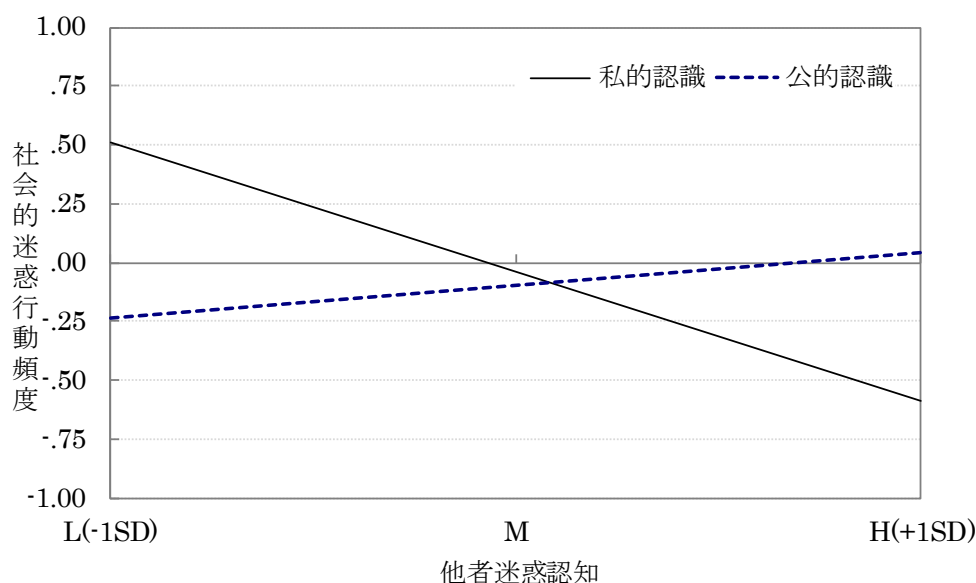


Figure4-2 専有空間認識各群の他者迷惑認知の単純傾斜

どの程度負の影響が及ぶかという点を行動基準として重視していると考えられる。これに対して公的認識群では、他者迷惑認知による有意な効果は認められず($\beta = .13, n.s.$)、周囲の他者がその行動を迷惑と感ずるかどうかは社会的迷惑の生起に関連するとはいえなかった。また他者迷惑認知が低い場合、私的認識群は公的認識群よりも社会的迷惑行動頻度が有意に高かったが($p < .001$)、他者迷惑認知が高い場合には私的認識群の方が社会的迷惑行動頻度は低かった($p < .01$)。これは、他者迷惑認知が高い場合には、専有できない場であると認識している場合よりも専有できる空間であると認識している方が、かえって社会的迷惑行動頻度は低くなることを示唆している。

以上の結果は、山田(2009)の指摘とは反対に、公共空間を私的な場とみなす態度が社会的迷惑を抑制していることを示唆している。しかし、ここで問題として注目すべきなのは、電車利用場면을専有できる空間と認識している群では、他者迷惑認知が低い場合に社会的迷惑行動頻度が非常に高くなる点である。このため、他者迷惑認知を高めるよう働きかける必要があるといえる。他者迷惑認知を高めることに関しては、これまでに他者の立場に立って他者迷惑認知を高める教育実践(吉田・廣岡・斎藤, 2005)、迷惑抑止メッセージによる働きかけ(油尾, 2009)などがなされている。今後、このような働きかけが電車利用場面における社会的迷惑の抑制に与える効果についても検討する必要があるだろう。

次に、各群における一般許容度の単回帰直線を Figure4-3 に示した。一般許容度については、私的認識群では一般許容度による社会的迷惑行動頻度への有意な効果はみられず($\beta =$

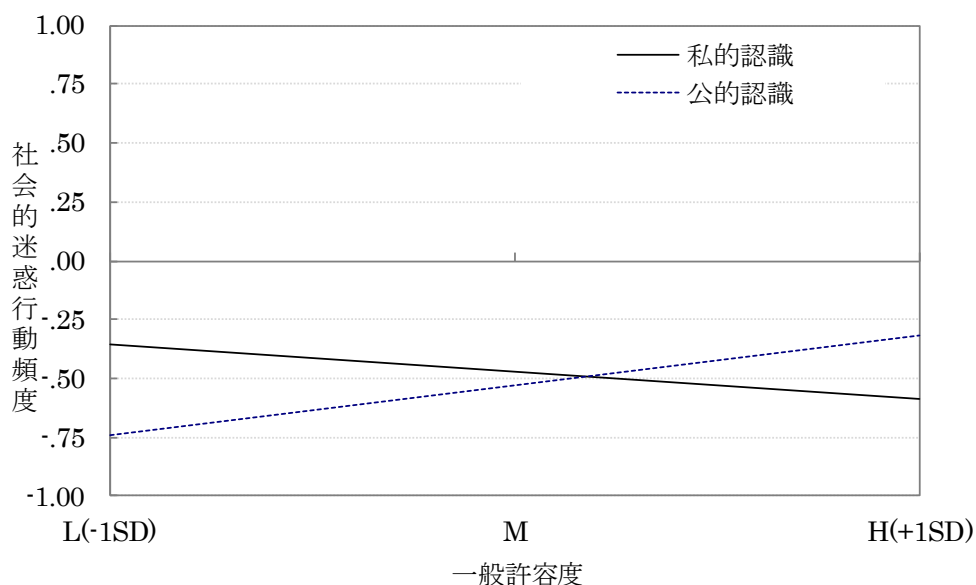


Figure4-3 専有空間認識各群の一般許容度の単純傾斜

-.12, *n.s.*), その行動が許容されているかどうかは社会的迷惑の生起には関連するとはいえなかった。これに対して公的認識群では, ごく弱い効果ではあるが, 一般許容度が高いほど社会的迷惑行動頻度が高く ($\beta = .22, p < .05$), 電車利用場面を専有空間ではないと認識している場合, その行動が他者から許容されていると認識しているほど社会的迷惑は促進されるといえた。また, 一般許容度が高い場合には両群に有意差はみられず, 一般許容度が低い場合には私的認識群は公的認識群よりも社会的迷惑の行動頻度が高い傾向がみられた ($p < .10$)。しかし, 一般許容度が高い場合も低い場合も, 両群とも概して社会的迷惑の行動頻度は低かった。これは, 社会的迷惑はたとえ許容されたとしても望ましくない行動であり, そのため許容度に関わらず相対的に社会的迷惑の行動頻度は低くなったと考えられる。

また公的認識群については, 社会的迷惑行動頻度は一貫して社会的迷惑行動頻度は低いという特徴がみられた。そのため, 電車利用場面を専有できる空間ではないと認識する人では, 外的評価指標に関わらず, 社会的迷惑が抑制されていることを示唆している。しかし, 周囲の他者から許容されている, それをしてもかまわないというように認知することで, 抑制が外れるという方向に外的行動指標が作用していると考えられる。

第15章 第4部の総合的考察

まず、青年の公共空間に対する公私認識の特徴については、公的認識を示した者が多数を占め、私的認識が強いとは言えなかった。また、周囲の他者や状況に意識を向ける傾向が高いほど電車利用場面を私的空間と見なすという結果が示され、周囲の他者や社会への無関心が公共空間の私的認識につながるという従来言説には否定的な結果が得られたといえる。これに関連して、青年の他者意識が20年前に比べて有意に高くなっていることが示され、この他者意識の高まりが私的認識をもつ青年を増加させている可能性がある。しかし研究6では、青年のみを対象に公共空間に対する公私認識および他者意識等を検討しており、他者意識の高まりと私的認識の世代差については推測に留まる。

第4部の結果から、青年による社会的迷惑を捉える上で注目されるのは、電車利用場面を公的な場ではなく私的な場であると認識することが必ずしも社会的迷惑を促進するとはいえないという点である。公私認識によって社会的迷惑の関連要因に違いがみられたものの、公私いずれにおいても、社会的迷惑は周囲の他者の迷惑認知や許容度といった外的評価を配慮した上で抑制されていることが示唆された。これは、社会的迷惑を抑制するためには公私いずれの認識をもたせるかではなく、むしろ異なる要因にどのように注目させるかを検討する必要があることを示唆している。

研究7において、電車利用場面を専有できる空間とみなす場合にのみ他者迷惑認知が社会的迷惑の行動頻度に影響することが示された。この結果は、公共空間を私的な場とみなす態度が社会的迷惑を引き起こすとする山田(2009)の指摘とは一致せず、従来の見解から説明することはできない。しかし、青年の公共空間に対する認識のうち、周囲の他者との関わりを持たない自分だけの空間という意味に焦点をあてたことに着目すると、私的認識群で社会的迷惑が抑制された背景には、専有空間を維持しようとする防衛的な意味があると考えられる。即ち、周囲の他者の不快感といったネガティブな評価を引き起こすような行動をすると、周囲と軋轢が生じ、専有空間が維持されなくなる恐れがある。このような他者から干渉されずに一人で過ごすことのできる場を成立させるために、自分を含めた他者領域の侵害に敏感になり、社会的迷惑が抑制されたと考えられる。

この結果からは、青年は、公共空間を私的な場と認識することで、目立たず振る舞い、周囲との葛藤を回避しようとすることが示唆される。このような青年の公私認識は、中園・野島(2003)が現代青年には関係の深化を回避し、表面的で円滑な関係を求めて自分の安定や

領域を守ろうとする態度が友人関係の特徴であるとしているが、この現代青年の友人に対する態度に類似しているといえる。その一方でこの青年の公私認識は、第12章で述べたように、状況に合致したコミュニケーション形態としての儀礼的無関心（ゴッフマン、1980）の表れと捉えることもできる。この儀礼的無関心について、佐藤(2001)は、完全に周囲の他者との関係を断ち切った姿は周囲に危惧感を抱かせると指摘している。しかし、今回の結果からは、青年は必ずしも周囲の他者を存在しないものと捉えているわけではなく、無関心な態度は状況適合的な振舞いとして選択されていると考えられる。

このように、本研究でみられる青年像は、山田(2009)で指摘される傍若無人な青年像とは様相が異なり、青年の私的認識は他者配慮的態度の表れであると解釈することができる。以上の結果からは、青年の私的認識は周囲に他者がいることを気に留めないような私中心主義側面ではなく、周囲に他者がいることを認識した上で周囲を切り離して自分だけの空間を守ろうとする防衛的側面を持つことが示唆される。しかし、研究6においてみられた公共空間に対する公私認識と周囲の他者や社会に対する無関心との関連は弱いものであり、私的認識の防衛的側面については明確な結果が得られたとはいえない。また共有空間認識と自己解放空間認識については、公的認識群が多数を占め、この分布の偏りによって明確な結果が得られなかった可能性がある。今後、各空間認識の私的認識群のデータを増やした上で公私認識の関連要因を検討し、公私認識の特徴をさらに詳細に捉えることが必要である。

また先述のように、公的認識をもつ青年は、一貫して社会的迷惑の行動頻度は低かった。しかし、迷惑認知が高い場合など、場合によっては私的認識よりも社会的迷惑を引き起こし、他者の許容的態度が社会的迷惑の抑制を弱めることが示された。このように、電車利用場面を公的な場とみなすことが常に社会的迷惑の抑制に効果的であるとはいえず、公的認識がどのように社会的迷惑を引き起こすのかについても検討する必要があると考えられる。

第5部 総括

第16章 状況の差異に着目した社会的迷惑の様相と抑制

第2～4部では、公共空間における社会的迷惑の抑制に関わる諸要因について、認知者、遂行者、状況認識の各アプローチから、状況及び状況認識の違いと他者配慮的態度に着目して検討してきた。第5部では、第2～4部で得られた知見をもとに、各状況において社会的迷惑の抑制に関わる要因を整理する。これによって、社会的迷惑が引き起こされる背景をふまえた上で、青年による社会的迷惑の様相を明らかにし、社会的迷惑抑制のための働きかけについて検討する。

第1節 青年による社会的迷惑の特徴とそれに関わる要素のずれ

第1部において、青年による社会的迷惑の背景要因として、状況および状況認識のずれ、状況適合性の評価基準のずれ、行動評価のずれが想定された。本節では、第2～4部の検討から明らかになった3つのずれの様相について整理し、青年が社会的迷惑を引き起こす背景について考察する(Figure5-1)。

状況および状況認識のずれ

本論文では、公共空間に対する公私の意味づけを操作するために、身近な他者(同性友人)の在・不在を基準として、集団状況及び個状況を設定した。共在する他者との関係性に基

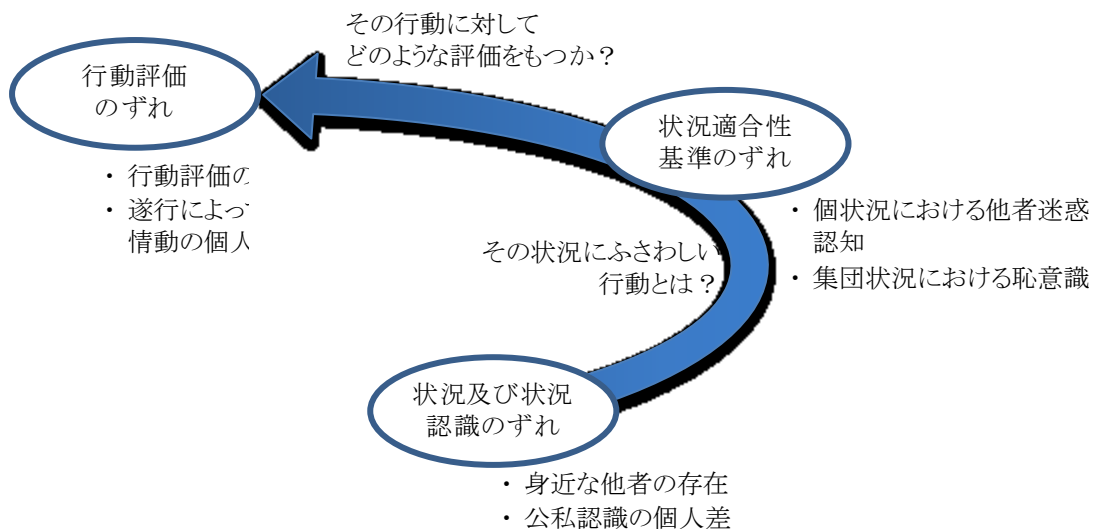


Figure 5-1 社会的迷惑に関わる3つのずれ

づく状況設定は、行動を規定する最小限の設定であると考えられる。しかし、状況間において、見知らぬ他者に対する配慮的態度が社会的迷惑に及ぼす影響は異なることが示された。即ち、状況が異なれば選択される行動も異なることを示唆している。これは、生活実感に非常に近い結果であるように思われる。しかし、社会的迷惑の原因として青年の時代的な他者配慮的態度の欠如が強調されてきた従来の見方とは異なる結果であり、客観的データとして示されたことは意義のあることといえる。

このような状況のずれは青年特有のものではなく、他世代においても状況による行動の違いは生じると考えられる。しかし、高田・矢守(1998)の指摘するように、他世代と比較した場合、青年は公共空間で集団を形成する機会が多く、そのために問題が目につきやすいと考えられる。しかし、引き起こされる社会的迷惑の行動頻度に着目すると、集団状況と個状況の間に有意な差はみられなかった。この結果は、仲間集団の形成が社会的迷惑を促進するという指摘(高田・矢守, 1998)には一致しないが、次の適合性基準のずれの節で検討するように、状況の違いが適合性の基準の違いを生じさせるのであり、行動そのものを左右するわけではないことに起因すると考えられる。

それに加え、本論文では、個状況における状況認識のずれについて検討した。他世代との比較は行わなかったが、青年においては公共空間を専有できる空間であるとする認識が少なからずみられた。公共空間を専有空間とみなすことをずれと捉えると、専有空間認識は重視する基準の違いにつながるものの、他者配慮的態度の欠如を意味するのではないことが示された。また研究6では、現代青年の他者意識の高さが示され、周囲への過剰な意識が公共空間における閉鎖的な空間の形成を促進することが示された。これは、公共空間における儀礼的無関心の作用を示唆するものであるといえるだろう。

状況適合性基準のずれ

状況および状況認識のずれの節で示した、見知らぬ他者に対する配慮的態度が社会的迷惑に及ぼす影響の状況による違いは、状況適合性の基準にずれがあることを示唆する。即ち、見知らぬ他者に対して配慮的態度を示すことは、青年の思いやりの表れではなく、状況にふさわしい行動を制御する上で何を基準とすべきかという評価において、他者配慮性が選択された結果であると考えられる。

本論文においてとりあげた社会的迷惑に影響を及ぼすと考えられる行動評価指標は、自己を基準とする自己のネガティブ認知、罪悪感と、他者を基準とする他者迷惑認知、恥意識、一般許容度、目撃頻度に分けられる。この中で状況に関わらず社会的迷惑を抑制する

効果が認められたのが、自己を基準とする行動評価指標である。これらは、共在する他者との関係性に左右されず、状況からの独立性の高い、社会的迷惑に安定した影響を及ぼす指標であるといえる。これに対して、状況によって社会的迷惑に及ぼす影響に違いがみられたのは、他者を基準とする行動評価指標である。その状況において、基準となる他者が身近な他者である場合と見知らぬ他者である場合では、仲間への適応から社会への適応を志向する方向に基準の切り替えが生じたと考えられる。

しかし同時に、個状況においても、他者を基準とする評価指標の効果は状況認知によって左右され、電車利用空間を自分一人に没頭できる空間であると認識している青年は周囲の他者に迷惑がかかるかどうかによって、また専有空間ではないと認識している青年はその行動が周囲の他者から許容されているかどうかによって、社会的迷惑は抑制されていた。本論文では、状況認識のうち、状況の公私に関わる認識である専有空間認識に着目したが、第4部でも述べたように、公共空間を私的な場と認識する青年は必ずしも多くはなかった。本論文で検討した3つの公私認識のうち、共有空間認識と自己解放空間認識2つについては私的認識を示した青年はごくわずかであり、社会的迷惑の抑制要因との関連を検討することはできなかった。その少数派の青年が社会的迷惑の遂行者になっているという可能性も否定できない。加えて専有空間認識についても、調査協力者の3割程度で私的認識群がみられたものの、公的認識群の方が多数派であった。この結果からは、青年が公共空間に対して持つ公私認識は、山田(2009)らが指摘するほど社会的迷惑に顕著な影響を及ぼしているとは言い難い。また、本論文で検討したのは専有空間認識との関連のみであるため、自意識特性に着目した検討と合わせた解釈は推測にとどまり、さらに検討が必要である。しかし、周囲の他者や社会との関わり方の志向性が状況に対する公私認識と関連し、どのような認識をもつかによって着目する行動評価基準が異なるなど、示唆を含んだ結果が得られたといえるだろう。さらに今後、自己解放空間認識と共有空間認識に焦点を当てることで、現在の公共空間における問題の様相を、より明確に捉えることができると期待される。

行動評価のずれ

本論文で検討した行動評価指標には、いずれも社会的迷惑に対する抑制効果が認められた。しかし研究1において、青年は身近な他者(同性友人)による社会的迷惑に対してはより迷惑度を低く評価し、身近な他者に対しても、自己の社会的迷惑に寛大な態度を示すよう期待していることが示された。また、青年は他世代に比べて、他者迷惑認知、ネガティ

ブ認知, 罪悪感, 恥意識の指標を低く評価することが示されている(谷, 2007)。このように, 青年は他年代の人々との間に行動評価のずれがあり, そのため青年によって社会的迷惑が頻繁に引き起こされると捉えられる原因の一つになっていると考えられる。

各行動評価指標が社会的迷惑に及ぼす影響については, 次節において整理し, 詳細に検討する。そして, 青年の見知らぬ他者に対する配慮的態度が公共空間における行動制御に及ぼす影響について, 状況別に考察する。

第2節 個状況と集団状況における社会的迷惑抑制要因の比較

集団状況と個状況において, 各行動評価指標が社会的迷惑に及ぼす影響を整理し, Figure 5-2 に示した。第1節で述べたように, 本論文で取り上げた自己を基準とする行動評価指標である自己のネガティブ認知と罪悪感は, 集団状況と個状況ともに社会的迷惑を抑制していた。このことから, 罪悪感と自己のネガティブ認知の喚起が, 状況を問わず社会的迷惑の抑制に効果的であることが示された。しかし青年は, 他世代に比べて, 社会的迷惑に対して罪悪感やネガティブな認知を持ちにくいことが示されている。このことから, 罪悪感やネガティブ認知を高めるような働きかけが求められる。罪悪感については, 他者への共感性のうち共感的関心とファンタジーの高さが罪悪感を高めるという結果がみられ, 自分の行動が周囲の他者に対して負の影響を及ぼすという想像力をもたせることが必要であると考えられる。

集団状況と個状況において社会的迷惑に及ぼす影響に違いが認められたのは, 恥意識や他者の迷惑認知という, 他者を基準とした評価指標である。が異なっていた。従来日本に

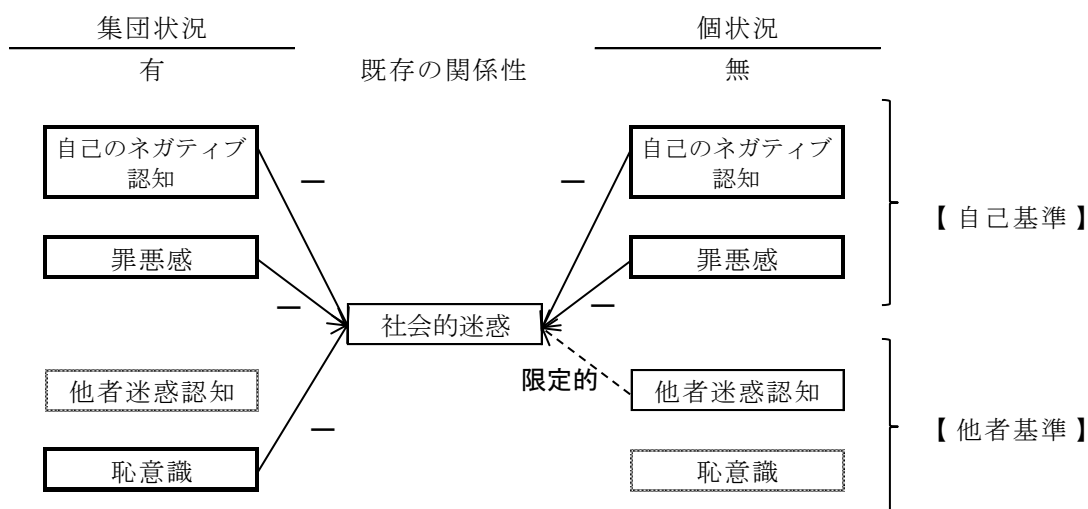


Figure 5-2 集団状況と個状況における社会的迷惑関連要因の比較

において行動を制御すると考えられていた恥意識は、集団状況では社会的迷惑を抑制するのに有効であったが、個状況においては有意な影響はみられなかった。また、本論文において注目した見知らぬ他者がもつ迷惑認知については、集団状況では有意な影響はみられず、個状況においても、限定的な影響がみられるにとどまった。このような状況による影響の違いがみられた理由として、恥意識は身近な他者を意識することにより喚起される感情であり、身近な他者に限定的な基準であるのに対して、他者迷惑認知については本論文では一般的他者を主体としていたためと考えられる。集団状況では、身近な他者に意識が集中しやすく、見知らぬ他者に対して意識が向きにくいいため、特に見知らぬ他者の迷惑認知は行動制御に影響を及ぼしにくいと考えられる。またこれは、身近な他者の存在による、社会ないし見知らぬ他者への配慮的態度の阻害と考えることもできるだろう。本論文では見知らぬ他者に対する配慮的態度に焦点をあてたために検討はしていないが、身近な他者の迷惑認知が社会的迷惑に及ぼす影響を検討した場合、社会的迷惑に対して抑制的な作用が認められる可能性があり、検討の余地があるだろう。

では、個状況において、青年は他者を配慮することなく、自分のしたいように振舞うといえるのだろうか。本論文で得られた結果から個状況と集団状況を比較すると、他者を基準とした評価指標の影響が小さく、他者配慮的態度が示されにくいように見える。しかし、個状況では、恥意識が有意な影響を及ぼさないかわりに、罪悪感といった他の要因が補完的に社会的迷惑を抑制している。このような社会的迷惑の影響要因の違いは、第1節において述べた、状況の違いによる適合性基準のずれを示していると考えられる。また、個状況と集団状況の間で、社会的迷惑の行動頻度に差はみられないことから、青年は個状況において社会的迷惑を頻繁に行うとはいえない。この結果は、集団形成が社会的迷惑を促進されるという高田・矢守（1998）の指摘に一致しないが、これは本研究が見知らぬ他者に対する配慮的態度に焦点を当てたものであるためと考えられる。

第3節 個状況における公私の位置づけによる社会的迷惑抑制要因の差異

個状況は、配慮すべき身近な他者の不在状況であり、共在する見知らぬ他者の多様性のために社会規範が機能しにくいと指摘されてきた(岩田, 2001; 吉田, 1998; 吉田他, 1999)。その一方で、第1部で触れたように、公共空間における青年の特徴には「一人だとまじめ」というものがあるとされる。本論文を通してみると、周囲に身近な他者がいないことで、他者の迷惑認知や許容性といった見知らぬ他者の意識に注意が向き、行動制御に影響を及

ぼすことが示唆された。本論文の研究5では、個状況において他者を基準とする行動指標が社会的迷惑に及ぼす影響に、公的自意識及び私的自意識による調整効果がみられたことから、第4部においては公私認識に着目し、社会的迷惑と他者を基準とする指標との関連を検討した。その結果、周囲の他者との関係性の認識によって、他者迷惑認知と一般許容度という、方向性の異なる他者を基準とした行動指標が社会的迷惑に及ぼす影響が異なることが示された(Figure 5-3)。このように、状況に対する公私認識によって、他者を基準とする評価指標が行動に及ぼす影響は異なっていた。そこで次に、個状況における社会的迷惑の抑制因についてより詳細に検討する。

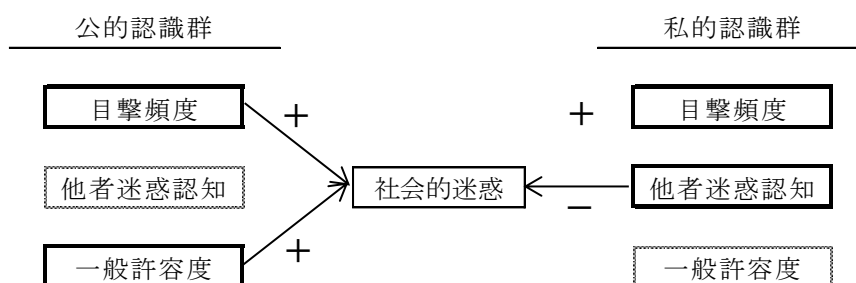


Figure 5-3 個状況における公私認識ごとの社会的迷惑関連要因の比較

個状況における社会的迷惑に関する検討からは、個状況での他者との関わり方の志向性が、見知らぬ他者に対する配慮的態度による影響を左右することがうかがえた。これは、公共空間に対して公的認識をもつか、それとも私的認識をもつかによって、関係性維持の動機づけが異なるためと考えられる。この点に関し、本論文では、自己を公私のどこに位置づけるかといった認識公的自意識と私的自意識、公私認識に着目して検討した。関係性維持の動機づけについて言えば、集団状況においては、第1部で述べたように、集団への適応が大きな課題である。そのため、社会的迷惑の抑制及び促進は、身近な他者と協調するための「逸脱しない」関係の維持を目指すと考えられる。これに対して個状況では、第4部において検討した専有空間認識に限ってではあるが、見知らぬ他者との間に異なる関係性への志向が持たれていると考えられ、それが公私認識の違いとして捉えられたと推測される。以下に、研究3及び研究7における結果を比較しながら、公私認識と他者との関係性の志向の違いについて考察する。

まず、専有空間認識の低い公的認識群では、他者の迷惑認知と社会的迷惑に有意な関連はみられず、一貫して社会的迷惑の行動頻度は低かった。これは、公的認識群は他者および社会に対する意識が低く、自己と他者、または自己と社会との関係に無頓着であるため

と考えられた。またこの結果は、研究3における公的自意識が低く私的自意識が高い群の結果に類似している。この群では、周囲の他者の目に映る自分ではなく、自己の私的な領域に意識を向ける傾向が高いと考えられ、自己を基準とした行動評価指標によって行動が影響を受けやすいとも考えられる。その一方で、公的認識群においては、他者の許容度が高いと認知されるほど社会的迷惑の行動頻度が高くなることが示された。これは、自己と周囲の他者が相互に妥協しあうことのできる範囲を基準としていることを示唆しており、見知らぬ他者との「ゆずりあう」関係の維持が目指されるためと考えられる。

これに対して、専有空間認識の高い私的認識群では、研究7において、他者の迷惑認知に社会的迷惑を抑制する効果が認められた。これは、私的認識群は他者や社会に対する意識が高く、自分の行動が周囲に及ぼす影響を客観的に観察し適切に評価し、それに応じて行動を制御しているためと考えられた。このように、私的認識群の青年にとって見知らぬ他者は存在しながらも関わりの断たれた他者である。そのため「関わらない」関係の維持が目指され、ネガティブなかかわりを回避し、周囲を切り離すための方略として、社会的迷惑の抑制が試みられると捉えることが可能である。またこの結果は、研究3において検討した公的自意識が高く私的自意識が高い群の結果に類似している。この群については、公的自意識が高く、他者から評価される自己を意識する傾向が高いため、周囲の他者への配慮から社会的迷惑が抑制されると考えられた。しかし、公的自意識が高く私的自意識が低い群においては、他者の迷惑認知と社会的迷惑の行動頻度に有意な関連はみられなかった。この理由として、公的自意識が高い群は、身近な他者には配慮するが見知らぬ他者には注意が向けにくい群である可能性がある。しかし同時に私的自意識が高ければ、周囲に身近な他者がいない状況であっても、自己を基準とする評価指標が社会的迷惑に抑制的に作用することが考えられるが、研究7においては自己を基準とする評価指標について検討していないため、この点に関しては推測に留まる。

また、一見正反対の特性を持つ群であるが、公的自意識が低く私的自意識が低い群においても同様の結果がみられた。この群は、自己の感情や他者の思惑を意識する傾向がひくく、自己との関係性に疑問を抱かず、「迷惑をかけてはいけないから」と無批判的に規範的行動に従ったと考えることができる。この結果からは、必ずしも周囲の他者や社会に対する意識が高い青年においてのみ他者の迷惑認知が社会的迷惑を抑制するとはいえないことが示唆される。以上のように、個状況に対する公私認識によって見知らぬ他者のどの観点を重視するのかが異なっていると考えられた。

本論文では、第2部と第4部のいずれにおいても公私の位置づけに着目したにもかかわらず、社会的迷惑に及ぼす影響に違いがあることが示された。これは、第4部で検討したのは状況特性としての公私の位置づけであるのに対し、第2部で検討したのは自意識特性としての公私の位置づけであったためと考えられる。これらの結果からは、公共空間における社会的迷惑について検討するためには、個人の公私の意識特性だけでなく、個人が状況に与える意味にも着目し、重層的に検討を重ねる必要があることが示されたといえる。

第17章 総括

本論文において目的としたのは、状況に応じて望まれる行動は異なり、選択される行動も状況によって左右されるが、それは他者に対する配慮のなさではなく、他者を配慮したために起こる葛藤回避の結果であるということを示すことである。そして集団状況と個状況について比較を行ったことで、集団状況において、身近な他者に焦点化が起こり、見知らぬ他者に対する配慮が行動に影響を及ぼしにくくなることは、本研究においても示された。しかし、個状況における見知らぬ他者に対する配慮的態度の影響は限定的であった。これは、集団状況と個状況との社会的迷惑の抑制要因の差異が、身近な他者から見知らぬ他者に焦点が移行するというよりも、仲間存在の影響力の失効によって生じていることを示唆している。

今回得られた興味深い示唆として、青年は、社会や周囲の他者に対して無関心で無配慮であるという指摘は支持されず、他者に配慮した行動制御を行うことが示された。青年の行動は常に一貫しているわけではなく、自分がおかれた状況を読み取り、どのようにふるまうべきかを柔軟に判断していると考えられる。この結果は、近年の社会的迷惑の増加の原因を、価値の多様化による社会的迷惑の抑制力の希薄化とする指摘(吉田他, 1999)とは異なる見方である。

周囲の他者が受ける迷惑が社会的迷惑に影響しないと推測された個状況において、無関心な態度の背景には他者配慮的な態度があることが示されたが、これは周囲の他者や社会への関心の高まりが、状況におけるふさわしい行動の読み取りを困難にし、私的な専有空間を形成し関わりを回避することで葛藤を生じさせないようにしようとする、合理的な態度であるとも捉えることができる。そのような合理性が、青年による社会的迷惑を時に抑制し、時に促進するという、相対する反応を生じさせていると考えられる。公共空間における複雑な他者関係の中で、そのとき重視すべき状況に着目して、「他者に迷惑をかけない」というルールに従って制御される行動は、他者配慮性の表出の違いを表すと考えられる。また共感性は、身近な他者に対する思いやりであり、個状況で共在する見知らぬ他者に対しては有効に作用しないと考えられた。しかし、集団状況においても、社会的迷惑に有意な影響はみられなかった。これは、社会的迷惑が周囲の他者に実害を与えるものではないためと考えられる。また、共感性の「ウチ」の人間にのみ向けられるものである(澤田, 1992)という特徴も関連すると考えられる。また、本論文からうかがえたのは、身近な他者と見

知らぬ他者に対しては、他者配慮、思いやりの方向性が異なるという点である。

現代青年は、「気に障るといけないので、席を譲らない」というように、他者を配慮するために向社会的な振舞いを抑制することが指摘されている。この態度は、公共空間を専有空間と認識することで周囲の他者との関わりを絶ち、葛藤を回避しようとする傾向と類似しているように見える。周囲の他者に配慮した行動をとれないことを「思いやりのなさ」と捉える見方もあるが、これは儀礼的無関心という見方からすると、理にかなったことと考えることができるのではないだろうか。このような一見無配慮と見える行動の裏に過剰ともいえる配慮が隠されていることに関して、坂井(2005)は、「行動に表れない思いやり」として検討している。また満野・三浦(2010)は、初対面の人に対する思いやり行動が、「傷つけ懸念」「面倒」「場尊重」「スキル不足」といった理由から抑制されることを示している。このことから、公共空間においては、他者の気持ちを推し量ることがかえって社会的に望ましい行動を抑制すると考えられる。坂井(2005)や満野・三浦(2010)で検討されているのは、向社会的行動の抑制についてであり、本論文における社会的迷惑とは異なる。しかし、向社会的行動と社会的迷惑のどちらについても、周囲に対して無関心を装うことでやり過ぎそうとする態度が、根底にあると推測することができる。本論文の立場は、社会的迷惑を行動レベルで抑制することであり、行動に表れる思いやりを扱うため、社会的迷惑「行動」を従属変数としている。そのため今回の結果からは、青年の思いやりの減少を社会的スキルの未熟さ(坂井, 2005)と社会的合理性の表われの、いずれと捉えるべきかについては、検討しがたい。しかし、行動として表出されない思いやりを考慮に入れることで、周囲の他者への配慮的態度がより明確になる可能性がある。このことから、意識レベルとの乖離を踏まえた上で、社会的迷惑の抑制を検討することも必要だろう。

公共空間における周囲の他者に対する無関心な態度は、以上のような行動に表出されない思いやりを示すとは限らず、本当に周囲の他者に対して意識を向けない青年も存在するだろう。それは、第1章での述べたように、公共空間を自己解放できる空間や共有できる空間と認識する傾向の高い青年がこれにあたる可能性がある。しかし本論文では、見知らぬ他者に対する配慮的態度の背景にある意識レベルでの思いやりについては検討しておらず、この点に関しては推測に留まる。今後、本論文を足掛かりに意識レベルでの他者に対する配慮的態度の有無と社会的迷惑の行動レベルでの表出について検討することで、明らかにすることができるだろう。

では、本論文の結果から、社会的迷惑抑制のためにできる働きかけとはどのようなもの

だろうか。第一に挙げられるのが、状況を問わず社会的迷惑に影響を及ぼす要因として、自己のネガティブ認知や罪悪感といった自己認知を高め情動を喚起することが有効であると考えられる。社会的迷惑の抑制においては軽視されがちではあるが、自己がその行動をどのように捉えているかは、行動制御に有効であることが示された。特に、状況を問わず社会的迷惑を抑制する点は、注目されるべき要因であると思われる。

第二に、公共空間を公的な場であると認識させることである。私的認識についても他者配慮的態度によって社会的迷惑は抑制されていたが、公的認識をもつことによる社会的迷惑の全般的な低さを軽視することはできない。公的認識をもつよう働きかけた上で、周囲の他者の許容度の認知といった社会的迷惑の促進要因を抑制することが有効であるといえる。また、私的認識をもつ場合も含め、周囲の他者の迷惑認知や、許容性といった、見知らぬ他者との共通認識の形成が重要である。このような社会的迷惑に対する意識の向上について、吉田らのグループは、授業プログラム「ソーシャルライフ」の一環として、「他者の立場で考える」ことにより社会的思考を促し、社会的迷惑を抑制する教育実践を試みている(e.g. 吉田・廣岡・斎藤, 2005)。このような取組みにより、若者の主体的に社会的を抑制しようとする態度が促進されることが期待される。

本論文では電車利用場面について検討しているが、自己解放空間認識が高い、または共有空間認識が高い等、同じ公共空間であってもタイプの異なる認識がもたれやすいといった違いがあることも考えられる。個々の空間特性とその状況適合性との関連に着目した考察には、本柳(2010)のファーストフード・レストランにおける検討等がある。しかし、心理学的研究では、具体的な空間を想定し、その状況認識と状況適合性を考慮した実証的研究はない。今後、電車利用場面以外の公共空間についても検討を行う必要がある。また、今回の結果から得られた示唆には、思いやり行動といった向社会的行動など、他者への配慮的態度に関わる全ての行動に対する応用可能性があると考えられる。このことから、青年における見知らぬ他者に対する配慮的態度の様相についての知見を蓄積し、公共空間における社会的迷惑に及ぼす影響とその抑制機序についてさらに検討することが今後の課題である。

引用文献

- 明田芳久 (1999). 共感の枠組みと測度: Davis の共感組織モデルと多次元共感性尺度(IRI-J)の予備的検討 上智大学心理学年報, **23**, 19-31.
- 有光興記 (2001a). 罪悪感, 恥と精神的健康との関係 健康心理学研究, **14**, 24-31.
- 有光興記 (2001b). 罪悪感, 羞恥心と性格特性の関係 性格心理学研究, **9**, 71-86.
- 有光興記 (2002a). 日本人青年の罪悪感喚起状況の構造 心理学研究, **73**, 148-156.
- 有光興記 (2002b). 罪悪感, 羞恥心と問題行動の関係 日本心理学会第 66 回大会発表論文集, 881.
- 有光興記 (2006). 罪悪感, 羞恥心と共感性の関係 心理学研究, **77**, 97-104.
- 有光興記・今田 寛 (1999). 特性罪悪感尺度作成の試み 日本教育心理学会総会発表論文集, **41**, 250.
- 薊理津子 (2008). 恥と罪悪感の研究の動向 感情心理学研究, **16**, 49-64.
- Benedict, R. F. (1946). *The chrysanthemum and the sword: Patterns of Japanese culture*. Boston: Houghton Mifflin. (ベネディクト, R. F. 長谷川松治(訳) (1972). 菊と刀 社会思想社)
- Cohen, J., Cohen, P., West, S. G., & Aken, L. S. (2003). *Applied multiple regression/ correlation analysis for the behavioral sciences (3rd Ed.)*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multi-dimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 113-126.
- 出口拓彦 (2004). 社会的迷惑行為に対する認知と頻度の関連—公的・私的自意識及び社会・個人志向性に着目して— 藤女子大学紀要, **42**, 59-64.
- 出口拓彦・吉田俊和 (2005). 大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連: 大学生生活への適応という観点からの検討 社会心理学研究, **21**, 160-169.
- Eisenberg, N. & Mussen, P. H. (1989). *The Roots of Prosocial Behavior in Children*. Cambridge: Cambridge University Press. (アイゼンバーグ, N, マッセン, P. 菊池章夫・二宮克美(訳) (1991). 思いやり行動の発達心理 金子書房)
- 遠藤利彦 (2009). 自己と感情—その進化論・文化論 有光興記・菊池章夫(編著) 自己意識的感情の心理学 北大路書房 Pp.2-36.
- Fenigstein, A. (1979). Self-Consciousness, Self-Attention, and Social Interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 75-86.

- Fenigstein, A., Scheier, M.F., & Buss, A.H. (1975). Public and Private Self-Consciousness: Assessment and Theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- 藤吉貴子・田中奈緒子 (2006). 青年と成人における共感性と罪悪感の差異 昭和女子大学生活心理研究所紀要, **9**, 99-105.
- Gilligan, C. (1982). *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's development*. Harvard University Press. (ギリガン, C. 生田久美子・並木美智子(共訳) (1986). もうひとつの声: 男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ 川島書店)
- ゴッフマン, E. 丸木恵祐・本名信行(訳) (1980). 集まりの構造: 新しい日常行動論を求めて 誠信書房 (Goffman, E. (1963). *Behavior in public places: notes on the social organization of gatherings*. New York: The Free Press.)
- 浜口恵俊 (1982). 間人主義の社会日本 東洋経済新報社
- 浜崎隆司 (1985). 幼児の向社会的行動におよぼす共感性と他者存在の効果 心理学研究, **56**, 103-106.
- 樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦(編) (2000). 高校生文化と進路形成の変容 学事出版
- 平松 毅 (1983). 情報公開制度のための提言 書齋の窓, **321**, 28-36.
- Hoffman (1998). Empathy, role-taking, guilt, and development of altruistic motives. T. Lickona (Ed.), *Moral development and behavior*, Pp.124-143. New York: Holt.
- 飯田浩之 (2002). 校則に見る子どもの規範意識 深谷昌志(編) 子どもの規範意識を育てる—子どもの規範感覚の検証と子どもの規範形成の探究— 教育開発研究所 Pp.47-50.
- 池田善英・押見輝男 (1999). 自己意識尺度オリジナル版の評価 立教大学心理学科研究年報, **41**, 51-61.
- 稲永由紀 (1999). 規範意識形成研究における2つの立場: 公共的場面における「モラル/マナー」低下問題をめぐって 九州大学大学院教育学研究紀要, **2**, 57-68.
- 井上忠司 (1977). 「世間体」の構造—社会心理史への試み 日本放送出版協会
- 石田靖彦・吉田俊和・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・安藤直樹・北折充隆・元吉忠寛 (2000). 社会的迷惑に関する研究(2)—迷惑認知の根拠に関する分析— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), **47**, 25-33.
- 石川 真 (2005). 社会規範に対する自己認知と他者認知に関する研究 上越教育大学研究

- 紀要, **24**, 677-688.
- 石川隆行・内山伊知郎 (2001). 5歳児の罪悪感に共感性と役割取得能力が及ぼす影響について 教育心理学研究, **49**, 60-68.
- 石川隆之・内山伊知郎 (2002). 青年期の罪悪感と共感性および役割取得能力の関連 発達心理学研究, **13**, 12-19.
- 伊藤美奈子 (1993). 個人志向性・社会志向性に関する発達的研究 教育心理学研究, **41**, 293-301.
- 伊藤美奈子 (1998). 人間の発達をとらえる際の2志向性概念の提唱 心理学評論, **41**, 15-29.
- 岩田 紀 (1987). 日本人大学生におけるプライバシー志向性と人格特性との関係 社会心理学研究, **3**, 11-16.
- Keltner, D. , & Buswell, B. N. (1996). Evidence for the distinctness of embarrassment, shame, and guilt: A study of recalled antecedents and facial expressions of emotion. *Cognition and Emotion*, **10**, 155-171.
- 角田 豊 (1994). 共感経験尺度改訂版(EESR)の作成と共感性の類型化の試み 教育心理学研究, **42**, 193-200.
- 加藤隆勝・高木秀明 (1980). 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, **2**, 33-42.
- 北折充隆・吉田俊和 (2000). 記述的規範が歩行者の信号無視行動におよぼす影響 社会心理学研究, **16**, 73-82.
- 北山 忍 (1994). 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究, **10**, 153-167.
- 北山 忍・唐澤真弓 (1995). 自己:文化心理学的視座 実験社会心理学研究, **35**, 133-163.
- 木内亜紀 (1995). 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **66**, 100-106.
- 木内亜紀 (1996). 独立・相互依存的自己理解—文化的影響, およびパーソナリティ特性との関連— 心理学研究, **67**, 308-313.
- 小池はるか (2004). 共感性と対人的迷惑行為との関連—迷惑高認知場面と迷惑低認知場面の比較— 名古屋大学大学院発達科学研究紀要(心理発達科学), **51**, 233-240.
- 小池はるか・吉田俊和 (2005). 対人的迷惑行為実行頻度と共感性との関連—受け手との関係性についての検討— 東海心理学研究, **1**, 3-12.

- 小池はるか・吉田俊和 (2011). 共感性・社会考慮が公共の場における迷惑行為抑制に与える影響 高田短期大学紀要, **29**, 1-6.
- 小牧一裕・岩淵千明 (1997). 授業規範:反規範行為における意識構造 日本心理学会第 61 回大会発表論文集, 381.
- 久世敏雄・和田 実・鄭 暁斉・浅野敬子・後藤宗理・二宮克美・宮沢秀次・宗方比佐子・内山伊知郎・平石賢二・大野 久 (1988). 現代青年の規範意識と私生活主義について 名古屋大學教育學部紀要(教育心理学科), **35**, 21-28.
- Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- 松井 洋 (2004). 社会的迷惑行動に関する研究 川村学園女子大学研究紀要, **15**, 55-68.
- Mattick, R. P. & Clarke, J. C. (1998). Development and validation of measures of social phobia scrutiny fear and social interaction anxiety. *Behaviour Research and Therapy*, **36**, 455-470.
- 南山真美・吉岡深雪・向山泰代・辻平治郎・梅本堯夫 (1988). 他者意識が感情と感情特性の認知に及ぼす影響(2) 日本教育心理学会総会発表論文集, **30**, 416-417.
- 満野史子・三浦香苗 (2010). 大学生の思いやり行動躊躇と対人関係特性の関連 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, **12**, 75-85.
- 森久美子・石田靖彦 (2001). 迷惑の生成と受容に関する基礎的研究--普及期の携帯電話マナーに関する言説分析 愛知淑徳大学論集(コミュニケーション学部・コミュニケーション研究科篇), **1**, 77-92.
- 元橋豊秀 (1993). 人並み志向と平準化志向 社会心理学研究, **9**, 1-12.
- 本柳 亨 (2010). マクドナルドで発生する無礼と無関心—予測可能性に対する信頼— 現代社会学理論研究, **4**, 185-196.
- 向山泰代・南山真美・吉岡深雪・辻平治郎・梅本堯夫 (1988). 他者意識が感情と感情特性の認知に及ぼす影響(4) 日本教育心理学会総会発表論文集, **30**, 420-421.
- 永房典之 (2008). なぜ人は心にブレーキをかけるのか? 永房典之(編著) なぜ人は他者が気になるのか 金子書房 Pp.16-30.
- 中江須美子・古賀ひろみ・平田万里子・山口一美・坂井 剛・押見輝男 (1999). パースペクティブ・テイキングと自己—Davis のパースペクティブ・テイキング尺度における検討— 立教大学心理学研究, **42**, 57-67.
- 中村 真 (2010). 恥意識が社会的迷惑行為および社会的逸脱行為の促進・抑制に及ぼす影

- 響: 規範意識が低い仲間との不一致に起因する恥意識は社会的逸脱行為を促すのか
日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, **19**, 114.
- 中園尚武・野島一彦 (2003). 現代大学生における友人関係への態度に関する研究—友人関係に対する「無関心」に注目して— 九州大学心理学研究, **4**, 325-334.
- 日本民営鉄道協会 (2005). 平成 17(2005)年度 駅と電車内の迷惑行動ランキング
<http://www.mintetsu.or.jp/activity/enquete/2005.html>
- 日本民営鉄道協会 (2006). 平成 18(2006)年度 駅と電車内の迷惑行動ランキング
<http://www.mintetsu.or.jp/activity/enquete/2006.html>
- 日本民営鉄道協会 (2011). 平成 23(2011)年度 駅と電車内の迷惑行動ランキング
<http://www.mintetsu.or.jp/activity/enquete/2011.html>
- 日本青少年研究所 (2004). 高校生の生活と意識に関する調査
<http://www1.odn.ne.jp/youth-study/reserch/index.html>
- 日本青少年研究所 (2005). 高校生の学習意識と日常生活—日本・アメリカ・中国の3ヶ国比較— <http://www1.odn.ne.jp/youth-study/index.htm>
- 越智 貢 (2000). 自由の現在 「現代日本人の生き方」調査企画委員会(編) 「現代日本人の生き方」: 調査報告 上廣倫理財団 Pp.126-146.
- 押見輝男 (1990). “自己の姿への注目”の段階 中村陽吉(編) “自己過程”の社会心理学 東京大学出版会
- 押見輝男 (1992). 自分を見つめる自分—自己フォーカスの社会心理学— サイエンス社
- 押見輝男・坂井 剛 (2002). 公的自意識の自己中心性について—額にEを描く— 立教心理学研究, **44**, 13-19.
- 押見輝男・渡辺波二・石川直弘 (1986). 自己意識尺度の検討 立教大学心理学科研究年報, **28**, 1-13.
- 尾関美喜・吉田俊和 (2007). 集団内における迷惑行為の生起及び認知—組織風土・集団アイデンティティによる検討— 実験社会心理学研究, **47**, 26-38.
- 尾関美喜・吉田俊和 (2009). 集団アイデンティティが集団内における迷惑の認知に及ぼす効果—成員性と誇りの機能的差異に着目して— 実験社会心理学研究, **49**, 32-44.
- 斉藤美幸・高橋鷹志・岩佐明彦 (2001). 公共空間における場所と行為の関係性の考察: 行為の可能性アンケートによる分析 社団法人日本建築学会学術講演梗概集, 1083-1084.

- 斎藤和志 (1999). 社会的迷惑行為と社会を考慮すること 愛知淑徳大学論集, **24**, 67-77.
- 坂井玲奈 (2005). 思いやりに関する研究の概観と展望—行動に表れない思いやりに注目する必要性の提唱— 東京大学大学院教育学研究科紀要, **45**, 143-148.
- 桜井茂男 (1986). 児童における共感と向社会的行動の関係 教育心理学研究, **34**, 342-346.
- 桜井茂男 (1988). 大学生における共感と援助行動の関係—多次元共感測定尺度を用いて— 奈良教育大学紀要, **37**, 149-154.
- 薩日内信一 (2001). 個性を生かすマナー・殺すマナー 児童心理, **756**, 1218-1222.
- 佐々木淳・菅原健介・丹野義彦 (2005). 羞恥心と心理的距離との逆 U 字的関係の成員に関する研究—対人不安の自己呈示モデルからのアプローチ 心理学研究, **76**, 445-452.
- 佐藤恵子 (2001). 無関心というコミュニケーション形態について: 電車車両空間を考える 東海大学紀要(開発工学部), **11**, 1-7.
- 澤田瑞也 (1992). 共感の心理学—そのメカニズムと発達— 世界思想社
- 澤田瑞也・齊藤誠一 (1995). 共感性の多次元尺度作成の試み 日本教育心理学会第 37 回総会発表論文集, 71.
- 澤田瑞也・齊藤誠一 (1996). 共感性の多次元尺度作成の試み(2) 日本教育心理学会第 38 回総会発表論文集, 68.
- 渋谷昌三 (1979). 他者存在の社会心理学的再考 研究年報, **26**, 93-115.
- 鈴木智之 (1999). 「不確かな個人」私的身体と公共空間 三田社会学, **4**, 4-16.
- 菅原健介 (1984). 自意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.
- 菅原健介・永房典之・佐々木淳・藤澤 文・薊理津子 (2006). 青少年の迷惑行動と羞恥心—公共場面における 5 つの行動基準との関連— 聖心女子大学大学院論叢, **107**, 180-160.
- 高木 彩 (2005a). 社会的規範の知覚と迷惑行動の関連 日本社会心理学会第 46 回大会発表論文集.
- 高木 彩 (2005b). 社会的迷惑研究の動向: 行為者と認知者の観点から 東京女子大学心理学紀要, **1**, 75-80.
- 高木 彩 (2006). 社会的規範の知覚と迷惑行動の関連(2) 日本社会心理学会第 47 回大会発表論文集.
- 高木 彩・村田光二 (2005). 注目する規範の相違による社会的迷惑 社会心理学研究, **20**,

216-223.

高木秀明 (1976). 情動的共感性と援助行動の関係に関する研究 日本教育心理学会第 18 回総会発表論文集, 448-449.

高田利武 (1999). 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程—比較文化的・横断的資料による実証的検討— 教育心理学研究, **47**, 480-489.

高田利武・松本芳之 (1995). 日本の自己の構造—下位様態と世代差— 心理学研究, **66**, 213-218.

高田利武・矢守克也 (1998). 高校生の乗車行動と文化的自己観 青年心理学研究, **10**, 19-34.

Tangney, J. P. (1995). Shame and guilt in interpersonal relationships. In J. P. Tangney & K. W. Fisher (Eds.), *Self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. Pp.114-139.

Tangney, J. P., & Dearing, R. L. (2002). *Shame and guilt*. New York: Guilford Press.

谷 伊織 (2008). バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版(BIDR-J)の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, **17**, 18-28.

谷 芳恵 (2006). 青年の規範意識と問題行動について 神戸大学発達・臨床心理学研究, **5**, 71-80.

谷 芳恵 (2007). 乗車場面における非社会的行動と他者の迷惑感の認知, 恥意識, 罪悪感—年代による違いを中心に— 神戸大学発達・臨床心理学研究, **6**, 55-64.

登張真穂 (2000). 多次元の視点に基づく共感性研究の展望 性格心理学研究, **9**, 36-51.

登張真穂 (2003). 青年期の共感性の発達:多次元の視点による検討 発達心理学研究, **14**, 136-148.

戸田まり (2006). 社会的迷惑行動と共感性・社会的スキルとの関連 日本教育心理学会第 48 回総会発表論文集, 584

戸田まり・小林亜希子 (2007). 大学生の社会的迷惑に関する検討 北海道教育大学紀要(教育科学編), **57**, 31-40.

泊 真児・吉田富二雄 (1998a). プライベート空間の心理的意味とその機能: プライバシー研究の概観と新たなモデルの提出 筑波大学心理学研究, **20**, 173-190.

泊 真児・吉田富二雄 (1998b). プライベート空間機能尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 日本社会心理学会第 39 回大会発表論文集, 90-91.

泊 真児・吉田富二雄 (1999). プライベート空間の機能と感情及び場所利用との関係 社

- 会心理学研究, **15**, 77-89.
- 泊 真児・吉田富二雄 (2001). 性格特性の Big Five と日常活動におけるプライベート空間の 7 機能 社会心理学研究, **16**, 147-158.
- 友枝敏雄・木村好美 (2003). 規範の崩壊か, それとも変容か—高校生・高校教師の規範意識調査の計量分析 教育と医学, **51**, 443-449.
- Triandis, H. C. (1994). *Individualism and collectivism*. Westview Press. (トリアンディス, H. C. 神山貴弥・藤原武弘(編訳) (2002). 個人主義と集団主義: 2つのレンズを通して読み解く文化 北大路書房)
- 辻平治郎 (1987). 自己意識と他者意識(1) 日本教育心理学会総会発表論文集, **29**, 514-515.
- 辻平治郎 (1989). 他者の内面への関心, 外面への関心, および空想的関心—他者意識概念の明確化とその測定— 甲南女子大学人間科学年報, **14**, 31-48.
- 辻平治郎 (1993). 自己意識と他者意識 北小路書房
- 辻平治郎・南山真美・吉岡深雪・向山泰代・梅本堯夫 (1988). 他者意識が感情と感情特性の認知に及ぼす影響(1) 日本教育心理学会総会発表論文集, **30**, 414-415.
- 運輸政策研究機構 (2003). 公共交通における緊急事態への対応に関する調査 <http://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/01081/contents/001.htm>
- 薄井 明 (2009). 「公共の場における迷惑行為」意識の構造的理解に向けて 北海道医療大学看護福祉学部紀要, **16**, 75-82.
- 卜部敬康・佐々木薫 (1999). 授業中の私語に関する集団規範の調査研究—リターン・ポテンシャル・モデルの適用— 教育心理学研究, **47**, 283-292.
- 和田 実・久世敏雄 (1990). 現代青年の規範意識と私生活主義: パーソナリティ特性との関連について 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **37**, 23-30.
- 山田真茂留 (2009). 「普通」という希望 青弓社
- 山形恭子 (2004). 公私の社会認識に関わる行動に影響する要因の分析 日本心理学会第 68 回大会発表論文集, 138.
- 山形恭子 (2005). 自己意識と公私社会認識に関わる行動との関連 金沢法学, **47**, 1-21.
- 山形恭子 (2006). 公私識別行動に影響する諸要因の分析 日本社会心理学会第 47 回大会発表論文集.
- 山形恭子・中嶋順子 (2002). 公私の社会行動尺度に関する検討 日本社会心理学会第 44 回大会発表論文集, 826-827.

- 山岸明子 (1976). 道徳判断の発達 教育心理学研究, **24**, 97-106.
- 山岸明子 (1990). 二つの道徳性と対人関係 順天堂医療短期大学紀要, **1**, 48-56.
- 山岸明子 (2002). 現代青年の規範意識の稀薄性の発達の意味 順天堂医療短期大学紀要, **13**, 49-58.
- 山岡重行 (2009). 3次元自己制御とユニークネス欲求 立教大学心理学研究, **51**, 89-101.
- 山内香奈・鈴木浩明・小美濃幸司・中谷恭輔 (2003). 鉄道利用時の迷惑行為に対する不快認知モデルの検証 日本行動計量学会大会発表論文抄録集, **31**, 198-201.
- 横田正夫 (1999). 罪悪感 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司(編) 心理学辞典 有斐閣 p.287
- 吉岡深雪・向山泰代・南山真美・辻平治郎・梅本堯夫 (1988). 他者意識が感情と感情特性の認知に及ぼす影響(3) 日本教育心理学会総会発表論文集, **30**, 418-419.
- 吉田圭吾・溝上慎一 (1996). プライバシー志向性尺度(本邦版)に関する検討 心理学研究, **67**, 50-55.
- 吉田俊和 (1998). 社会的迷惑行為を考える—多様なアプローチを探る— 日本グループ・ダイナミクス学会第46回大会発表論文集, 11.
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・北折充隆 (1999). 社会的迷惑に関する研究(1) 名古屋大学教育学部紀要(心理学), **46**, 53-73.
- 吉田俊和・元吉忠寛・北折充隆 (2000). 社会的迷惑に関する研究(3): 社会考慮と信頼感による人の分類と迷惑行為との関連 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), **47**, 35-45.
- 吉田俊和・斎藤和志・北折充隆(編) (2009). 社会的迷惑の心理学 ナカニシヤ出版.
- 吉田俊和・廣岡秀一・斎藤和志 (2005). 学校教育で育む「豊かな人間関係と社会性」—心理学を活用した新しい授業例 Part2— 明治図書
- 油尾聡子 (2009). 迷惑抑止メッセージと記述的規範の一致・不一致が社会的迷惑行為と生起する感情に及ぼす影響 東海心理学研究, **4**, 47-51.

謝辞

後期課程に進学してから、思いがけず長い時間を過ごすこととなりました。研究方針に思い悩み、それでも何とか本論文をまとめ上げることができたのは、支えて下さったたくさんの方々がいらっしゃったおかげです。心から感謝申し上げます。

指導教員である、神戸大学大学院准教授の齊藤誠一先生。

大学院に入学してから延べ9年間、分野違いの研究にもかかわらず、お付き合い下さいました。長い研究生活の中で、もう無理ですと言って途中で投げ出そうとしたこともありました。それを何とか思いとどまるよう、根気強く説得して下さいました。あの時、諦めて研究をやめてしまっていたら、やり遂げられなかったという気持ちをいつまでも引きずっていくことになっていたと思います。

予備審査論文の報告会を終えてあと半年を残すばかりとなった時、父が体調を崩しました。後悔をしたくないと我儘をいう私に、齊藤先生は気のすむようにすればいいと言って下さいました。父を看取り、さらに1年を費やしてここまで来ました。先生にご心配とご迷惑ばかりをおかけした大学院生活でした。心からお詫びと、感謝申し上げます。

元指導教員である、甲南女子大学教授の佐藤眞子先生。

大学院に入学し、佐藤先生の手元から離れた後も、私を気遣って下さいました。また、急な調査のお願いに際しても、笑顔で迎えて下さいました。遠く離れた場所で右往左往する私を見て、さぞかしはらはらされていたことと思います。どうもありがとうございました。

神戸大学大学院准教授の、坂本美紀先生。

坂本先生のお手伝いをさせていただく中で、様々な研究のノウハウを学ばせて下さいました。また、論文執筆中には多々ご迷惑をおかけしたにもかかわらず、論文の進み具合などをいつも気にかけて下さいました。心から感謝申し上げます。

予備審査論文の審査員を務めていただきました先生方。

大いに視野狭窄な感のある私の予備審査論文に、多様な視点から鋭いご指摘をいただき

ました。まさしく目からうろこといった気分でした。先生方からのお言葉を一つ一つ吟味することで、拡散しがちであった研究の方向づけをすることができました。心から感謝申し上げます。

神戸大学大学院齊藤ゼミ卒業生の榎本千春さん、則定百合子さん、上長然さん、日潟淳子さん、田中由佳さん。

いつまでも大学に居座り続ける私を、心配し、励まし、応援して下さいました。また、博士論文執筆において迷った時、壁にぶち当たった時、さまざまな場面でサポートして下さいました。執筆中、いつも隣に皆様の博士論文を置き、それを目標にすることで頑張ることができました。どうもありがとうございました。

神戸大学大学院博士課程後期課程の同志である、奈良女子大学准教授の岡本英生先生、松木太郎くん。

齊藤ゼミアドバンスト研究会では、思いがけない分析結果に頭を悩ます私に、有用なご意見を多数いただきました。そのご意見の数々が、私の研究の重要な指針となりました。さらに岡本先生には、調査においても並々ならぬご協力をいただきました。心からお礼申し上げます。

神戸大学大学院博士課程前期課程の田中美帆さん。

ご自身も修士論文提出を控えて忙しい中で、悪筆この上ない論文を添削していただいたり、愚痴を聞いていただいたり、いろいろな形で支えていただきました。本当に田中さんには頭があがりません。どうもありがとうございました。

神戸大学大学院発達基礎論院生室のメンバーである、神野雄くん、西尾祐美子さん、状家莉保さん、中井由貴子さん。

元気で個性的な面々で、諸事情により急きょ飛び入りした私の論文執筆を、温かく見守っていただきました。神野くんには、調査実施の協力から学会発表のための諸々の手配まで、幅広くお手伝いをしていただきました。西尾さん、状家さん、中井さんは、いつも楽しく朗らかで、荒みがちな生活をサポートしていただきました。どうもありがとうございました。

齊藤ゼミの皆様。

いつも後ろ向きな私を、いつも笑顔で応援して下さいました。幅広い興味とテーマで、ゼミでは刺激に満ちた時間を過ごすことができました。どうもありがとうございました。

博士論文に関わる調査にご協力下さいました、学生の皆様と先生方。

項目数も多く、面倒な内容の多い調査であるにも関わらず、多くの学生の皆さんが協力して下さいました。また先生方には、貴重な授業の時間を割いてご協力いただきました。皆様方のご協力なくして、この研究はありえませんでした。心から感謝申し上げます。

最後に、長い学生生活を過ごす私を支えてくれた両親、兄姉とその家族達に、心から感謝の気持ちを伝えたいと思います。特に両親は、いつまでも論文を出そうとしない私に、心の中ではやきもきしていたことと思います。それでもなお、満足のいくように頑張れと励まし、支えてくれました。本当に、感謝の言葉ありません。

1年余り前、病床にあっても何よりも私の論文執筆を気遣い、論文完成を心待ちにしてくれていた父が他界しました。行き詰まり、苦しいときには、父のためにやり遂げるんだと自分を叱咤して乗り切りました。この論文の完成を父に見せてあげられなかったことが心残りです。誰よりも一番に、この論文を父に捧げたいと思います。

2013年12月

付録 1

博士論文執筆に関わる業績一覧

1. 論文

- 谷 芳恵 (2006). 青年の規範意識と問題行動について 神戸大学発達・臨床心理学研究, **5**, 71-80.
- 谷 芳恵 (2007). 乗車場面における非社会的行動—青年の迷惑感の認知を中心に— 神戸大学発達科学部研究紀要, **14**, 141-147.
- 谷 芳恵 (2008). 共感性が公共場面における迷惑行為に与える影響 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 **2**(1), 7-12.
- 谷 芳恵 (2010). 公共場面における迷惑行為に対する罪悪感—共感性, 公的自己意識, 私的自己意識との関連から— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 **3**(2), 21-26.
- 谷 芳恵 (2012). 恥意識, 罪悪感の迷惑行動に対する影響—状況と行動基準との関連から— 神戸大学発達・臨床心理学研究, **11**, 1-5.
- 谷 芳恵 (2013). 電車利用場面における社会的迷惑の抑制要因の検討: 周囲の他者との関係性に着目して 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **7**, 25-32.
- 谷 芳恵 (印刷中). 青年の公共空間に対する公私認識 神戸大学発達・臨床心理学研究
- 谷 芳恵・齊藤誠一 (投稿中). 電車利用場面における青年の社会的迷惑の関連要因と公私認識による調整効果の検討 青年心理学研究

2. 学会発表

- 谷 芳恵 (2005). 青年の規範意識と社会的迷惑行為について 日本青年心理学会第 13 回大会発表論文集, 76-77.
- 谷 芳恵 (2007). 乗車場面における迷惑行為と他者の迷惑認知の関連—公・私的自意識及び状況による調整効果を中心に— 日本教育心理学会第 49 回大会発表論文集, 454.
- 谷 芳恵 (2012a). 大学生の公私認識と迷惑行動に対する意識の関連 日本発達心理学会第 23 回大会発表論文集, 663.
- 谷 芳恵 (2012b). 公共空間における社会的迷惑と公私認識の影響 日本社会心理学会

第 53 回大会発表論文集, 356.

谷 芳恵 (2013). 青年の公私認識, 社会的迷惑に対する意識の関連要因 日本社会心理学第 54 回大会発表論文集, 437.

付録2

社会的迷惑の行動頻度

[研究2,3,5,7]

【教示】

A) 集団状況

あなたは、今、友人たちと電車に乗り込みました。電車の中には、他に、一般の乗客がいます。

B) 個状況

あなたは、今、一人で電車に乗り込みました。電車の中には、他に、一般の乗客がおり、あなたの知り合いは誰もいません。

共通)

このような時、次のような行為を、あなたはどの程度しますか。「1: 全くしたことがない」～「4: いつもする」の中から、あなたに最もあてはまるものを1つ選び、番号に○をつけてください。

- 1 全くしたことがない
- 2 あまりしたことがない
- 3 時々することがある
- 4 いつもする

-
- 1 電車に不正乗車(無賃乗車, キセル)する
 - 2 まだ降りる人がいるのに、先に乗り込もうとする
 - 3 かけ込み乗車をする
 - 4 電車内で、携帯電話をマナーモードにしない
 - 5 混雑した電車で、空席の前に立ったままにいる
 - 6 大きな荷物を置いて通路をふさぐ
 - 7 電車内で物を食べたり飲んだりする
 - 8 座席に荷物を置いたり、足を広げて座ったりする
 - 9 電車内で、声の大きさを気にせずおしゃべりをする
 - 10 電車に乗ったり降りたりする人がいるのに、入り口付近にいて動かない
 - 11 リュックを背負ったまま満員電車に乗る
 - 12 電車内や駅のホームにゴミを放置する
 - 13 電車内でヘッドホンステレオの音漏れを気にせず音楽を聞く
 - 14 電車内で、携帯電話で通話する
 - 15 乗車時に、列に並ばずに割り込む
-

B) 個状況では、9「電車内で、声の大きさを気にせずおしゃべりをする」を除く14項目を提示した。

付録3

社会的迷惑に対する (a)他者迷惑認知 (b)自己のネガティブ評価

[a: 研究1,2,3 b: 研究3]

【教示】

次のような行動について、最もあてはまるものを「1:全く感じない」～「6:とても感じる」の中から1つ選び、番号に○をつけてください。

(a) 他者迷惑認知

次のような行為に出会ったとき、その場に居合わせたあなた以外の人々ほどの程度「不快や迷惑」を感じると思いませんか。

(b) 自己のネガティブ評価

次のような行為をしている人を見かけたとしたら、あなたはどの程度「みっともない」と感じますか。

- 1 全く感じない
- 2 あまり感じない
- 3 どちらかといえば感じない
- 4 どちらかといえば感じる
- 5 やや感じる
- 6 とても感じる

-
- 1 電車に不正乗車(無賃乗車, キセル)する
 - 2 まだ降りる人がいるのに, 先に乗り込もうとする
 - 3 かけ込み乗車をする
 - 4 電車内で, 携帯電話をマナーモードにしない
 - 5 混雑した電車で, 空席の前に立ったままにいる
 - 6 大きな荷物を置いて通路をふさぐ
 - 7 電車内で物を食べたり飲んだりする
 - 8 座席に荷物を置いたり, 足を広げて座ったりする
 - 9 電車内で, 声の大きさを気にせずおしゃべりをする
 - 10 電車に乗ったり降りたりする人がいるのに, 入り口付近にいて動かない
 - 11 リュックを背負ったまま満員電車に乗る
 - 12 電車内や駅のホームにゴミを放置する
 - 13 電車内でヘッドホンステレオの音漏れを気にせず音楽を聞く
 - 14 電車内で, 携帯電話で通話する
 - 15 乗車時に, 列に並ばずに割り込む
-

付録4

社会的迷惑に対する (a) 罪悪感 (b) 恥意識

[a: 研究4,5 b: 研究5]

【教示】

次のような行動について、最もあてはまるものを「1: 全く感じない」～「6: とても感じる」の中から1つ選び、番号に○をつけてください。

(a) 罪悪感

次の行為をあなたがしたとしたら、あなたはどの程度「後ろめたい」と感じますか。

(b) 恥意識

次の行為をあなたがしたとしたら、あなたはどの程度「みっともない」と感じますか。

- 1 全く感じない
- 2 あまり感じない
- 3 どちらかといえば感じない
- 4 どちらかといえば感じる
- 5 やや感じる
- 6 とても感じる

-
- 1 電車に不正乗車(無賃乗車, キセル)する
 - 2 まだ降りる人がいるのに、先に乗り込もうとする
 - 3 かけ込み乗車をする
 - 4 電車内で、携帯電話をマナーモードにしない
 - 5 混雑した電車で、空席の前に立ったままにいる
 - 6 大きな荷物を置いて通路をふさぐ
 - 7 電車内で物を食べたり飲んだりする
 - 8 座席に荷物を置いたり、足を広げて座ったりする
 - 9 電車内で、声の大きさを気にせずおしゃべりする
 - 10 電車に乗ったり降りたりする人がいるのに、入り口付近にいて動かない
 - 11 リュックを背負ったまま満員電車に乗る
 - 12 電車内や駅のホームにゴミを放置する
 - 13 電車内でヘッドホンステレオの音漏れを気にせず音楽を聞く
 - 14 電車内で、携帯電話で通話する
 - 15 乗車時に、列に並ばずに割り込む
-

付録5

社会的迷惑に対する (a) 意識 (b) 目撃頻度 (c) 他者迷惑認知 (d) 一般許容度

[a: 研究6, bcd: 研究7]

【教示】

次のような行動について、最もあてはまるものを1つ選び、番号に○をつけてください。

(a) 社会的迷惑に対する意識

電車使用時にあなたの知らない人が次の行動をしているのをみかけたとき、あなたはどの程度気になりますか。

- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1 全く気にならない | 4 どちらかといえば□気になる |
| 2 あまり気にならない | 5 やや気になる |
| 3 どちらかといえば□気にならない | 6 とても気になる |

(b) 目撃頻度

あなたは普段、駅や電車の中で、次のような行動をどの程度目にしますか。

- | | |
|--------------|--------------|
| 1 全く□見かけない | 4 たまに見かける |
| 2 ほとんど□見かけない | 5 よく見かける |
| 3 あまり□見かけない | 6 非常に□よく見かける |

(c) 他者迷惑認知

次のような行為に出会ったとき、その場に居合わせたあなた以外の人々はどの程度「不快や迷惑」を感じると思いますか。

- | | |
|---------------|---------------|
| 1 全く感じない | 4 どちらかといえば感じる |
| 2 あまり感じない | 5 やや感じる |
| 3 どちらかといえば感じる | 6 とても感じる |

(d) 一般許容度

次にあげる行動について、電車の中でこのような行動をとることは、どの程度許容されていると思いますか。あなた自身がどの程度許容するかではなく、一般にどの程度許容されていると思うかについて、あなたの考えに最もあてはまるものを選んでください。

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1 全く許容されていない | 4 どちらかという□許容されている |
| 2 許容されていない | 5 許容されている |
| 3 どちらかという□許容されていない | 6 完全に許容されている |

-
- 1 まだ降りる人がいるのに、先に乗り込もうとする
 - 2 かけ込み乗車をする
 - 3 電車内で、携帯電話をマナーモードにしない
 - 4 混雑した電車で、空席の前に立ったままにいる
 - 5 大きな荷物を置いて通路をふさぐ
 - 6 電車内で物を食べたり飲んだりする

- 7 座席に荷物を置いたり, 足を広げて座ったりする
 - 8 電車に乗ったり降りたりする人がいるのに, 入り口付近にいて動かない
 - 9 リュックを背負ったまま満員電車に乗る
 - 10 電車内や駅のホームにゴミを放置する
 - 11 電車内でヘッドホンステレオの音漏れを気にせず音楽を聞く
 - 12 電車内で, 携帯電話で通話する
 - 13 乗車時に, 列に並ばずに割り込む
-

付録6

電車利用時の公私認識項目 (プライベート空間機能尺度(泊・吉田, 1998)項目を使用)

[研究6, 7]

【教示】

電車の車両内の空間, また電車内で過ごしている時間について, あなたは普段どのように感じていますか。あなたの考えに最もあてはまるものを「1:全くあてはまらない」～「5:非常にあてはまる」の中から一つ選び, 番号に○をつけてください。

- 1 全くあてはまらない
- 2 あまりあてはまらない
- 3 どちらともいえない
- 4 ややあてはまる
- 5 非常にあてはまる

-
- 1 ゆっくり休息できる時間や空間である
 - 2 課題や考え事など, 何かに集中できる時間や空間である
 - 3 自分を見つめなおしたり, 混乱した状況や気持ちを整理する時間や空間である
 - 4 親しい人と共有する時間や空間である
 - 5 気分転換できる時間や空間である
 - 6 日常性から開放される時間や空間である
 - 7 普段の自分とは別の自分を表現できる時間や空間である
-

付録7

本論文で使用したその他の既存尺度(a~g)

【教示】

次の内容について、あなたに最もよくあてはまるものを「1:全くあてはまらない」～「5:非常にあてはまる」の中から1つ選び、番号に○をつけてください。

- 1 全くあてはまらない
- 2 あまりあてはまらない
- 3 どちらともいえない
- 4 ややあてはまる
- 5 非常にあてはまる

(a) 多次元共感性質問紙 (登張, 2003)

- 1 ニュースで災害にあった人などを見ると、同情してしまう
- 2 人から無視されている人のことが心配になる
- 3 人が冷たくあしらわれているのを見ると、私は非常に腹が立つ
- 4 友達がとても幸せな経験をしたことを知ったら、私までうれしくなる
- 5 いじめられている人を見ると、胸が痛くなる
- 6 落ち込んでいる人がいたら、勇気づけてあげたい
- 7 困っている人がいたら助けたい
- 8 心配のあまりパニックにおそわれている人を見るとなんとかしてあげたくなる
- 9 体の不自由な人やお年寄りに何かしてあげたいと思う
- 10 悲しい体験をした人の話を聞くと、つらくなってしまふ
- 11 困っている人を見ても、それほどかわいそうと思わない
- 12 他人をいじめている人がいると、腹が立つ
- 13 私は身近な人が悲しんでいても、何も感じないことがある
- 14 すぐに助けてあげないといけない人を見たら、どうしていいかわからなくなる
- 15 ころんで大けがした人を見ると、そこから逃げ出したくなる
- 16 泣いている人を見ると、私はどうしていいかわからなくなって困ってしまう
- 17 けがをして痛そうにしている人を見ると、気持ちが悪くなる
- 18 急に何かが起こると、どうしていいかわからなくなる
- 19 周りの人が感情的になっていると、どうしていいかわからなくなる
- 20 誰かに対し腹が立ったら、しばらくその人の立場に立ってみようとする
- 21 この人は不安なのだなどというように、人がどう感じているかに敏感なほうだ
- 22 友達の目からは物事がどう見えるのだろうか想像し、理解しようとする
- 23 誰かを批判するより前に、自分がその立場だったらどう思うか想像する
- 24 怒っている人がいたら、どうして怒っているのだろうか想像する
- 25 テレビや映画を見た後には、自分が登場人物の1人のように感じる
- 26 本を読むときは、主人公の気持ちを考えながら読む

- 27 小説を読むとき、登場人物の気持ちになりきってしまう
- 28 テレビゲームの主人公になりきるのが好きだ
- 29 ドラマや映画を見ると自分も登場人物になったような気持ちで見ることが多い
- 30 おもしろい物語や小説を読むと、そのようなことが自分に起こったらどのように感じるか想像する

1～13: 共感的関心 14～19: 個人的苦痛 20～24: 視点取得 25～30: ファンタジー

(b) 自意識尺度 (菅原, 1984)

- 1 人に会う時、どんなふうにするまえが良いのか気になる
- 2 人に見られていると、つかつかうをつけてしまう
- 3 人前で何かする時、自分のしぐさや姿が気になる
- 4 初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気づかう
- 5 他人からの評価を考えながら行動する
- 6 自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる
- 7 世間体など気にならない
- 8 自分が他人にどう思われているのか気になる
- 9 自分についてのうわさに関心がある
- 10 人の目に映る自分の姿に心を配る
- 11 自分の容姿を気にするほうだ
- 12 他人を見るように自分をながめてみることもある
- 13 自分がどんな人間か自覚しようと努めている
- 14 自分自身の内面のことには、あまり関心がない
- 15 気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取るほうだ
- 16 ふと、一步離れた所から自分をながめてみることもある
- 17 その時々、気持ちの動きを自分自身でつかんでいたい
- 18 しばしば、自分の心を理解しようとする
- 19 自分が本当は何をしたいのか考えながら行動する
- 20 自分を反省して見ることが多い
- 21 つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている

1～11: 公的自意識 12～21: 私的自意識

(c) 行動基準尺度 (菅原他, 2006)

- 1 お金さえ払えば、何をしても許される
- 2 法律に違反さえしなければ、あとは個人の自由だ
- 3 人に怒られなければ、何をしてもよいと思う
- 4 何をしようが自分の勝手だと思う
- 5 何か問題を起こして、近所のうわさになるのは嫌だ
- 6 周りから変な人と思われぬように気をつけている
- 7 警察につかまったら、恥ずかしくて世の中に顔向けできない
- 8 世間から笑われるようなことだけはしたくない
- 9 友だちのみんながやっていることに乗り遅れたくない
- 10 友だちがみんなで悪いことをしているのに、自分だけ裏切れない
- 11 悪いことでも、みんなと一緒にやれば平気でできてしまう
- 12 仲間がみんなやっているのに、自分だけやらないのは恥ずかしい

- 13 自分が誰かの迷惑になっていないか, 常に気を遣う
- 14 見知らぬ人に対してでも, 相手の立場になって考える
- 15 他人に迷惑がかかりそうなら, 身勝手な行動は慎む
- 16 大勢の人がいる場所では, お互い同士もつと気を遣うべき
- 17 みんなで話し合っただけで決めたことは守らなければならない
- 18 どんな人に対してでも, 人権を尊重する
- 19 仲間と考えが違ったりしても, それぞれの意見を大切にする
- 20 多数の人の意見だけでなく, 少数の意見にも耳をかたむけるべき

1~4: 自分本位 5~8: 地域的セケン 9~12: 仲間的セケン 13~16: 他者配慮 17~20: 公共利益

(d) 他者意識尺度 (辻, 1993)

- 1 他者の服装や化粧などが気になる
- 2 人の外見に気をとられやすい
- 3 人の体形やスタイルなどに関心がある
- 4 表面的な他者の印象に心を奪われやすい
- 5 人のことにしばしば思いを巡らす
- 6 人のことをよく空想する
- 7 人のことがいろいろと心に浮ぶ
- 8 人のことをあれこれと考えていることが多い
- 9 他者のちょっとした表情の変化でも見逃さない
- 10 他者の態度や表情を気をつけて見るようにしている
- 11 人のちょっとした気分の変化でも敏感に感じてしまう
- 12 人の言動には絶えず注意を払っている
- 13 人の考えを絶えず読み取ろうとしている
- 14 人の気持ちを理解するように常に心がけている
- 15 他者の心の動きをいつも分析している

1~4: 外的他者意識 5~8: 空想的他者意識 9~15: 内的他者意識

(e) SPS (Social Phobia Scale) 日本語版「他者から見られることに対する不安」尺度 (金井他, 2004)

- 1 人前で文字を書かなければならない時, 不安になる
- 2 公衆トイレを使う時, 自意識過剰になる
- 3 自分の声や, 自分の話を聞いている人の存在に突然気づくことがある
- 4 道を歩いている時, 人が自分をじっと見ていると思ひ, 緊張する
- 5 人という時, 赤面するのではないかと怖くなる
- 6 他の人達がすでに着席している部屋に入る時, 自意識過剰になる
- 7 他の人に見られている時, 震えてしまうのではないかと心配になる
- 8 バスや電車で人と向い合せに座ったら, 緊張する
- 9 人が自分のことをふらついているとか, 病気であると思ひているかもしれないと考へパニックになる
- 10 たくさんの人と一緒にいる時は, 飲み物を飲みにくいと思ひ
- 11 レストランで知らない人と食事をするときは, 自意識過剰になる
- 12 人が自分の行動を奇妙だと思ひのではないかと心配する

- 13 混雑した食堂でトレイを運ぶとしたら、緊張するだろう
 - 14 人前で自分をコントロールできなくなるのではないかと心配する
 - 15 人の注目を浴びるようなことをしてしまうのではないかと心配する
 - 16 エレベーターに乗っている時、人が自分を見ているのではないかと緊張する
 - 17 列に並んでいる時、目立っていると感じることもある
 - 18 人前で話す時、緊張する
 - 19 人前で頭が上下左右に揺れるかもしれないと心配する
 - 20 人が自分を見ていることがわかると、ぎこちなくなったり緊張したりする
-

(f) 私生活主義尺度「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」尺度 (和田・久世, 1990)

- 1 働くことや勉強することを最小限にして、自由な生活を楽しみたい
 - 2 自分のことに精一杯で、他人のことを考えるだけの余裕はない
 - 3 結局、人のことは自分とは関係のないことだ
 - 4 自分ひとりが努力しても世の中はよくなる
 - 5 ボランティア活動や奉仕活動などに興味や関心はない
 - 6 社会問題は自分の生活とはまったく関係のないことだと思う
 - 7 政治や社会の問題など、難しいことを考えるのはめんどろである
 - 8 現状に甘んじ、与えられた範囲内で自分の生活を楽しむ
 - 9 何事も深く考えず、その場のしぎで過ごしている
 - 10 他人のことで自分の時間をとられたくない
 - 11 自分が損をしてまで、皆のためにつくすのはバカげたことだ
-

(g) バランス型社会的望ましき反応尺度日本語版; BIDR-J (谷, 2008)

- 1 私が感じた他人の第一印象はよく当たっている
- 2 私のことを他人が本当にどう思っているのか気にならない
- 3 「なぜそれが好きなのですか？」と聞かれた時、何についても説明できる
- 4 自分で決心したことが他人の意見で変わることはめったにない
- 5 私は自分の人生を完全に思い通りに進めている
- 6 いろいろなことについて、つい余計なことを考える
- 7 私は自分で決めたことを後悔しない
- 8 時々、すぐに決心できなくて失敗することがある
- 9 私はきわめて理性的な人間である
- 10 私は自分の判断をいつも信じている
- 11 たとえ何人かの人に嫌われても、私にとっては問題ない
- 12 なぜ自分がそうしたのか、自分でも分からないときがある
- 13 必要であれば、時々嘘をつく
- 14 人をうまく利用したことがある
- 15 人をののしったことがない
- 16 人と争ったとき、水に流すよりもむしろ復しゅうする
- 17 私は恐らく捕まらないような時でも、いつも法律に従っている
- 18 友達の陰口を言ったことがある
- 19 お釣りを多くもらった時、気づいてもそのまま受け取ってしまう

- 20 道路や公共の場所で、ごみを落としたことはない
 - 21 他人には言えないようなことをしたことがある
 - 22 仮病で仕事や学校を休んだことがある
 - 23 図書館の本や店の商品を破損した時は、必ずそれを報告する
 - 24 かなりよくない習慣をいくつか持っている
-

1～12: 自己欺瞞 13～24: 印象操作